

ない船であつた。生命のない捨てられた世界であつた。われわれは皆サロンドツキに並んで、浪と運命を共にするであらう、その船に別れを告げた。誰の心にも黒い、寒い寂涼が蟲食つた。

これは、やがて、わが萬壽丸の運命でもあつた。われ等が、船底に飢えと寒さとに倒れて漂流する時に、もう少し大きな船が又、われ等の傍を通るであらう。われ等は信號を掲げねばならぬことを知つてゐるだらう。又われ等は、人間がその船室に凍えかけてゐることを、知らせる必要のあることを知つてゐるであらう。それにも拘らず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデツキへ這ひ出た時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このやうにして、わが萬壽丸は汽笛を鳴らして通過した。その汽笛を微に聞いて、今立ち上らうとして、その凍えた體に最後の努力と藻掻きとを試みてゐる兄弟が、その船の中に居ないだらうか、その頼りない捨てられた犬の子のやうに哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。難破船は、薄闇の中に、暴れ狂ふ怒濤の中に、傳奇小説の

中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり残された。藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、残された船を見送つて、堪へられない寂しさと、憤とに心を燃した。

「あの船には、尠くとも二十人の乗組員はあつただらう。それが養つてゐる、同じ數位の家族もあつただらう。あの中で二十人は凍死したか、ポットで溺死したか、どちらにしても彼の船の乗組員が助かると云ふことは考へられないことだ。二十人は遂々、その家族を残して、妻子はその主人に残されて逝つてしまはれたんだ。そして、その船に依つて、最も重大な利害を感じる筈の船主は、今その宅で雪見酒を飲んでゐるのであらう。その二十人の不拂労働から、蓄めて經營してゐる會社の株のことを、電報が入ると直ぐに氣にするだらう。遺族には、香典が二十圓宛位は行くであらう。そして、船主は、二十人の人間のことよりも、その沈没するのが當然なほど腐朽し切つた、ぼろ船の運命に對して、高利貸式の執拗さで口惜しがつてゐるだらう。」

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失はねば生きて行けないのか、人柱！俺達は皆人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫達が、犬ころが唸り合ひながら食べると同じやうに、騒ぎながら、夕飯を食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のとL字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭をかぶめながら、うまい夕食を攝つた。全く字義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のやうな元氣さと華かさとして駆け廻るやうに感じられた。彼は飯を口一杯に頬張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これも頬張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメートは来たかい」

「未だよ」藤原は、全てそれが波田のせいでありでもするかのように、膨れつ面をもつて、答へた。

「随分無責任ぢやないかい。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた。

「ハ、ハ、ハ、なるほどね、サロンから、おもてまでぢや三時間ぢや来られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神経中樞との距離がさ。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるやうに見えた。「それに、こゝろ云ふことに馴れて、無神経になるつてことは、それが仲間のことであると、なほさら善くないね」

藤原は、話しがむづかしいので、有名であつた。彼は漢語見たいなもの——仲間の間でさう云つた——を使ひたがる癖が骨に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、初められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて「大急ぎ」で駆け込んで来た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメートと一緒にとり巻いた。

「ボースン！ こんなに暗くちや何も分らんぢやないか、蠟燭をつけて来い。五六本！」と、チーフメートは一發放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寝初めてから、三時間目に初めて、彼の室は灯で照らされた。彼が船へ持つて来たものは、その體と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養ふのは自分でなければならぬことを感じさせられて来たのであつた。

彼は、訴へるやうな目附きて、又、彼のそのやうな負傷にも拘らず、チーフメートに直接物を言ふことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あーい」と呻いた。

チーフメートは何でも構はず、ボーイ長の左半身全體に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務

が終ればいゝのであつた。醫者のやる様なことが、彼の義務であることも積に障ることであつたが、それは、彼がそれでパンを得てゐる以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い條件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずもの」どもであることを知らねばならない筈であつた、ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分を區別してるとすつかり同じやうに、彼とセーラー等とを區別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は労働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ポイー長を滅茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、(面倒臭い餘りに、そうするのはない)と云ふ風にセーラーたちに見せたかつた。彼は爲なければならぬことの形式だけをやつて、然も感謝の念をセーラー達から盗まうとさへ企んだのであつた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで眞暗ぢやないか」と黒川は口を切つた。彼はポイー長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ポースンは掬窮如として答へた。全て、全て、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ポースン自身の罪でも堪らないやうに。

「これぢやいくらお前等でも堪らないなあ」

「なあに、メーツさん、新造船だから、いゝ方ですよ。」とポースンは答へた。

「暗くて寒いことあ今始まつたこつちやないや、おまけに風呂だつてありやしない、これでもおれ等は、人間並は、人間並なのかい」と藤原が後ろから、燃えるやうな毒舌を打つつけた。

チーフメートは早速方向轉換の必要を痛感した。

「ポイー長の傷は存外軽くてすんだね。俺はもうとても駄目だと思つてゐたんだよ。命拾ひしたわけだね」

「さうさ、すぐくたばりやもつと傷が軽いわけさ。手がかゝらねえからな」又藤原が口を出した。

セーラーたちは、何か起りはしないかと内心好奇心に驅られて「事」の起るのを待つてゐた。

「黙つてろ！ 餘計な口を叩くな！」チーフメートは遂々爆發した。

「黙つてろ？ 黙るさ。だが、手前等には手前等の命は大切でも、人間の命が、どの位大切かつてことは分る時はあるまいよ。へッ」藤原はそのまゝ自分の巢へ上つて、煙草に火をつけた。

彼は明白にチーフメートに挑戦した。

戦争はすぐ開かれるか、後で開かれるか、どんな形に於て開かれるか、それは水夫等全體を昂奮の極に追ひ上げた。

黒川一等運轉手は彼の策戦が失敗したことを承認した。そして、多分此事はこれだけで片がつかないだらうと、云ふことも分つた。長びくやうな事件にならねばよいがと彼は心配してゐた。特にそれは、此場合では、彼にとつて絶対に都合のわるいことであつた。彼は、黙つて、早く手當を濟ますに限ると思つたので、その手當を急いだ。

かくして、イヒチオールはそれが、その本來塗らるべき處であらうと、又は、傷をなして赤い肉の出た處であらうと、出血してゐる處であらうと、お構ひなしに塗りたくられた。又、如何なることが起きてても、起らなくても、ポイー長の左半身全體を眞黒くすると云ふことは、彼の三時間に互る熟慮の結果であつた。

そしてチーフメート黒川鐵男は、そのプログラムに従つて他意なくやつてのけた。何等親味な情からでもなく人間的な氣持からでもなく、安井——水夫見習——は、その全半身に

たゞ氣やすめだけのイヒチオールを塗布された。それは義務を果すための一つの對象にすぎなかつた。

安井は叫んだ「おかあさん、おかあさん」と叫んで救を求めた。そして眼を開いては、絶望のどん底に眞つ暗になつて落ち込んでしまつた。

彼は、體の傷みと共に、堪へ得ぬ渴と餓とに迫られてゐたのだつた。

六

安井の手當がすむと、水夫達は、改めて、食卓に就いた。そして、いつでも安井がポイー長の職務として、食事の準備、後片附等はするのであつたが、今日は、波田が引き受けた。

「安井君、何か食べたかはないかい」と、波田はポイー長に訊いた。

「喉が渴いて、腹が空いて、堪らない」と、彼は辛うじて答へた。

「そいぢや今持つて来るから待つて呉れよ。」

波田は、コツクに、卵を呉れるやうに頼んだ。

「卵なんぞ贅澤なものが、おもてに使へるかい、ぼけなす奴！」波田は一撃の下に、卵なんぞ「おもて」の者の口に入りかねることを教へられた。然し、若し、卵がなければ、流

動物を與へるのに困るのであつた。

「どうだらう、ボーイ長が固い物は食べられないだらうと思ふんだが、何か寝てゝ食べるやうなものはないだらうか、とも（高級海員の事）のコーヒーへ入れるミルクを一罐丈に分けて貰へないだらうかなあ。」波田は食餌のことは、チーフメイトが醫者序にやるべきものだと考へた。けれどもまた「やるべきこと」は俺達だけにあるんだ。と思ひかへした。

「それぢやシチャード（司厨司）へ話して見ろ！ 一兩位出しや分けられねえこともねえかな、ぐれえなところだらうぜ」このコツクはおもての食費を胡魔化するために、とものコツクから、給料を下げても、おもてへ一つ船で鞍がへした、途轍もない『悪』であつた。

「此野郎、鼻持のならねえ野郎だ」と思ひながら、波田は、シチャードへ、ミルク一罐と、卵十個分けて貰へないかと交渉した。

「ボーイ長にやるんだつて、あゝ、いゝとも、持つて行きな、そうかい、ぢやあパンを一斤許り持つてつて、牛乳と卵とて濕してやるといゝや、ほら、こゝに砂糖と、……：……それだけていゝかい、そしてどうだね、ボーイ長の容態は」シチャードは親切に倉庫から、それ等のものを箆へ出して呉れた。「どうもありがたう。金は後でおもてから拂ふからね、當分濟まないが借して呉れないか」波田は全く嬉しかった。

こくつて、すぐにその寢床にもぐりこんで、三十分間をぐつぐつと寝ることに決めたらしかつた。

疊敷には能きない形ではあるが、夫をその面積に換へれば六疊位は敷けるだらうと思はれる『おもて』には、上下二段にベッドを作りつけて、水夫長、大工、舵取を除いた、水夫五人と、おもてのコツクが一人と、ストキとが寝るやうに出来てゐて、その中央に、テーブルと、ベンチとが作りつけてあつた。で、おもては、一切合切がギリ／＼一杯であつた。食卓は、用事が済むと、室の眞ん中に立つてゐる柱に添ふて上に吊り上げられるにしても、矢張り一杯／＼であつた。そして道具置場は、その食卓の下を潜つて、船首の尖つた處が、そうであつた。

わが萬壽丸は甚しく團扇に似てると云ふ定評があつてさへ、矢張り船の船首部分は、いくらか尖つてゐることが、これで見ても分るのであつた。

そして、窓は總て、二重に嚴密に閉され、デッキへの鐵の扉までが嚴重に閉されたから、空氣は全く動かなく通はなくなつてしまつた。そして、此、太鼓の内部のやうな船室は、皮であるべきサイドの鐵板が、波濤に叩かれて堪らなく轟くのであつた。

その間にボーイ長は、その負傷の疼痛を、陸上の父と母とに訴へた。摺子木のやうに圓い神經の持主であるセーラー

「いゝよ、そんなことあ、氣をつけてやりな、若いもんだ。先のあるもんだからな」

「あゝ、そいぢや、ありがたうよ」波田は、ともかくそれ等のものを持つて来て、ボーイ長に與へた。

彼は飢えた狼のやうに貪り飲んだ。ボーイ長が食慾を失つてゐないことが、波田には大層心強く思はれた。

彼が安井のために、食事の仕度をする間に誰もが食事を終つてゐた。そして、茶碗や、徳利（醬油）はころばないやうに、各々其始末さるべき處へと仕舞はれてあつた。彼は、それから、又、自分の分を繼續しなければならなかつた。船の動揺は甚しかつたが、満船してゐる關係上、動揺以上に浪の打込みが甚しく、そのため、水夫室の頭上では、錨が浪と衝突して少しでも緩みが来ると、今にもサイドを押し割りさうに、メリ／＼ツと鳴つた。

波田は、それ等のことには、外の誰もと同じく馴れ切つてゐるので、二度目の夕食をうまく食ふことができた。

彼は、腹には詰め込みながら、耳には、セーラーたちの『煙草』の話を聞いた。暴化した後では、きつと話がしんみりするのであつた。いつでも冗山戯るにきまつてゐる三上さへも、一二度極端な、女郎に關するその話題を提供して見たが、反響がないので、それ以外に話すことを全然持たない彼は黙り

たちも、環境がかくの如くであるために、ひとりてにしんみりしてしまふのであつた。そして、彼等は、いつでも、しんみりするのを好まなかつた。それは、彼等を、此世の中で一番詰らない役割に引つ張り込んでしまふからであつた。と云ふのは、いつでも彼等は最も詰らない役割であるのだが、それを本とうに彼等に手きびしく覺らせるからである。誰でも、自分が踏みつけられ、馬鹿にされることを喜ぶものはない。わがセーラー達も、しんみりする時必ず、そうであることが分るやうに獨りてに考へるのであつた。そして、船のり氣質として、そんなに自分たちを『コミヤル』餘剩勞働を搾取すると云ふ意が含まれてゐる船のり言葉、奴は容赦しない筈であるのだが、それが能き得ない處に、彼等が、泌みりした度に悄氣込み、次いで自暴自棄になると云ふ結果が生れるのであつた。

彼等は、自分達が人間であることを知つてゐた。そして人間らしからぬ生活に、追ひまくられてゐることを知つてゐた。そして、彼等はどうかすれば、これらの不都合な生活から人間らしい生活へ入れるかを、絶えず考へ、其機會を覘つてゐた。そして彼等は其の考へを纏めることも、機會を捕へることも能きないで、小資本を貯めるための、極めて短い時間だけ、此の危険な仕事によつて金儲をしやうとした最初の考へは、そのまゝ、彼等を怒濤の上で老年にしてしまひ、磨滅した心棒

にしてしまふのであつた。
その夕、ボーイ長のベツ下の側に集つた藤原、波田、小倉の三人は、皆ひどく泌みりしてゐた。

七

「俺たちは何だつてこんなに泥棒猫扱ひに、いちめられるんだらうなあ」と藤原が溜息と一緒に吐き出すやうに云つた。一時の昂奮から、夕方ボーイ長のことで来たチーフメイトとの事を思ひ出して、きつとよからぬ豫感に襲はれたのだらう。「それやあ君、泥棒猫だからさ」と小倉がひょうきんに答へた。彼は人に落膽させまいとして、いつでも骨を折る氣のいい正直者であつた。

「どうしてなんだらう」藤原はおとなしく訊いた。
「十四の猫の中の二匹が泥棒猫であつても、その全體が泥棒猫と思はれるんだからな。況して君、十四の中八匹がさうだつたら、勿論泥棒猫團だらうよ」

小倉は答へた。

「それぢや、僕等は一體生れつき泥棒猫だつたらうかね」
「多くはさうだね。詰り僕等が泥棒猫であつたにしても、それは僕等の知つたことぢやないことになる譯だ」

「と云ふと」と藤原は小倉に訊きかへした。

「詰りさ。僕等は、その飼主から見れば役に立たない泥棒猫

て来るんだ。資本家や、資本家の傀儡共が、商品を濫造するやうに、濫造した、出来合の御用思想だけが、思想だと思ふことを止めて、僕等にや僕等の考へ方、行ひ方があることをハツキリ知らなきやならないんだ。小倉は頭の中で、辭書のページでも繰つてるやうにして云つた。

「どうして、それを考へ、どうしてそれを知ればいゝんだ」
藤原は問を止めなかつた。

「それは、餘り困難な問題だ。僕はそれで悩んでるんだ」と小倉は答へた。

「小倉君。人間は萬物の靈長なり」と云ふ人間の造つた言葉があるだらう。そこでね。僕は、昔から、一番苦しい、貧しい、不幸な階級の中で、又殊に貧しい不幸な呪はれた人々でも、萬物の靈長だつたらうか？ と考へることがあるんだよ。俺はあの犬になりたい」と奴隸は主人の犬を見て思はなかつた。だらうか。俺は燕になり度い」と、誰かど殘虐な牢獄の窓に縋つて思はなかつた。だらうか。俺は猿になり度いと詰らぬ因襲と××とから、切腹を命じられた武士は思はなかつた。だらうか。俺は豚になりたい」と乞食の子は思つたこととはないだらうか。小倉君。僕は、行く行くはそうなることを信じてゐるが、今では、人間は萬物の靈長でもなんでもないと思つてるよ。藤原は煙草に火をつけた。
「それや僕もさう思ふなあ。僕だつて饑にならいたい、と思つ

なんだ。ね、いつ主人のものをかつばらうか油断も隙もありやしない、とかう、見られてゐるんだ。だから、主人の方ぢや僕等を泥棒猫扱ひするんだ。扱ひだけぢやないんだ。僕等を眞物の泥棒猫か、もつと適切に云へば、去勢した馬車馬と考へてるんだ。だから、主人、詰り、資本家から云へばさね。

僕等は、彼等が僕等を爲やうと思ふ儘にされてゐることが、唯一の方法なんだ。だから、船主が『水夫等は晝飯を食はない方が労働能率を上げるだらう』と思へば、僕等から晝飯をとり上げてしまふし、室蘭、横濱間は三日で航海すべきだから、糧食はカツキリ三分でよろしい。難破したり、遅航したりすれば、それは奴等の例の怠惰から來たもので、俺れの方の損害の方が大きいから、それ以上の積込は相ならぬ、と云ふことになれば、それも正しいのだ。小倉は極めて眞面目に、説法でもするやうに靜に云つた。

「フーン、して見ると、僕等もその考へに適應しなければならぬのかい」藤原は、小倉に訊いた。

「適應する必要は勿論ないさ。然したと適應する者のあることとは事實なんだ。僕は資本家が自分自身の肉體の構成と、労働者の肉體構成とが、全然、異なるものであると考へてゐるだらうと思ふ。」

「それで、そうなら僕等はどうかだつてんだね」と藤原は訊いた。

「それで、僕等は、僕等としての『意識』を持つ必要が生じ

たことがあるもんなあ」と、波田は初めて、その突拍子もない口をきつた。

「人間は萬物の靈長であるに拘らず、人間だつてことは僕は信じるよ。だが、人間が萬物の靈長だつてことは、僕も、尤も僕は今まで、そのことをそんな風に問題にしたことがなかつたがね、人間は、兎も角賢い動物だとは思つてゐたよ。賢い癖に、詰らぬ處に力瘤を入れたり、どんな劣等動物でもしないやうな詰らないことを、人間の特徴と誇りながらしたりする動物だらう、人間つてものはハハハ、ハハ、これが小倉の人間觀であつた。

「人間が萬物の靈長だなんて問題に、コピリつくことはもう止さう、が、全く人間も他の動物と同様に食ふため、生殖するため、地上で蠢動してゐるんだね。」藤原は人間であることを悲しむやうにかう云つた。

「食ふことゝ、生殖することだけで活動してるから、それで蠢動してると云ふのかい」今度は小倉が皮肉な聞き手になつた。

「まあさうだね」と藤原は一寸苦笑した。

「ところが君、ブルジョアはそれ以上の高利貸的官能のために、或は又倒錯症的慾望のために、食はせないこと、と、生殖させないことゝで蠢動してゐるぢやないのかい」と云つて小倉は大聲立て、笑つたが、フト氣がついたやうに、ボーイ

長の方を見やつて口を嚙んだ。
「安井君、痛むだらうね」と、波田はボーイ長に訊いた。
「え、痛くて、痛くて、他の人の痛くないのが不思議で……」と答へた。

「困つたね。航海中だから、まあ、出来ないだらうけれど仕方がないから、我慢するんだね。横濱へついたら病院へ入院が出来るとさ」と波田が慰さめた。

「ところが、能きないんだ。ボーイ長は未だ雇入れがしてないんだ。これは確に船長の失敗なんだ。この點から攻撃すれば、解雇手當や負傷手當などは勿論、取り得ると思ふんだ」藤原はかう云つた。

「雇入れがしてなくつたつて、入院は出来るさ。此重傷を入院さ、んなんてことはないさ。それに、雇入れと、負傷とは、どんな關係がありやうもないぢやないかね」波田は、藤原が入院を拒みでもするやうに食つてかゝつた。

セーラーの三上や西澤、水夫長、大工、コックなどは、もうその寢床でグー／＼いびきをかいてゐた。全く、何か特に昂奮することでもない時は、食後は非常に眠いのであつた。全く眼が開かない程眠いのであつた。幼子が夕食を食べながら居眠るやうに、幾日か續いた強行軍で、兵士が歩きながら眠るやうに、それと同じく眠いのであつた。けれども、此三人は、今食後十分か二十分の熟眠どころではないのだつた。

藤原は云つた。

此時、ブリツチからコーターマスターが降りて來た。そしてボースンの室の入口から怒鳴つた。

「今から、デイープシーレット（深海測定器）を入れろつ、と、それから水夫室へ來てその真ん中で大聲に「スタンバイ」と怒鳴つた。

八

皆は、今日晝中の労働が劇しかったので、夜は休みになるものだと考へてゐた。暴化は稍々其勢を静めはしたが、然も、船首甲板などは一浪毎に怒濤が打ち上げて來た。そして、水夫室の出入口は、波の打上げる毎に、素晴しく水量の多い瀧になつて、上のデッキから落ちて來るので、一々其の重い鐵の扉を閉さねばならぬ程であつた。それに、今朝からのワシデッキとハツチの密閉とで水夫達は、その着物の大部分を濡らしてしまつた。(波田、三上の如きは、その全部を二重に濡らした、詰り一揃の服を二度濡らした)それで、今、誰の仕事着も洗ひ滌がれて、汽罐場の手すりに、乾かされてあつた。

水夫達は起きるとすぐ、猿股一つでか、或は素裸でか、寢間着まで、汽罐場まで、仕事着をとりに行かねばならなかつた。けれども裸で、その寒さに道中はならなかつた。

今や、彼等はボーイ長が雇入れなしに使役されてゐたと云ふ事實に就いて、彼等の意見を發表し合ふ必要が生じたのであつた。

「そんなことは、海員手帳にチヤンと書いてあるこつた。議論の餘地なんぞありやしないさ」と、ストキの藤原は云つた。(事實それは海員手帳に記入されてあることであつた。そして如何なる場合でも船長は之を怠つてはならないのであつた。法文の上でも、實際から行つてもそれはそうでなければならず、又そうあるべきであるのだつたが、惜、それがさうされなかつた場合は問題はどうかと云ふことは、略々、さうあるべき通りに、行かないのであつた。要するに、理論からも、實際からも、人間は、平等に、幸福でなければ困るが、一部の人間は、平等は困る。俺達だけの贅澤がいいんだ。搾取の痛快こそ生活の意義だと云ふので、分り切つたことが分らなくなるやうに、ボーイ長の場合に於ても、明白に、ボーイ長が有利な立場にあるにも拘らず、その全體の利益と權利とをワイにする處の一要素である『労働者』で、ボーイ長があつた。だから、これは、それほど簡単に、數學的結果を見ることは困難であらう。その代りに、法律的乃至は、商業會議所式の結果を見るであらう。)と、三人が話し合ひの末、そこまで落ち着いたのであつた。
「だから、俺達は、これに對しては闘はなけりやならん」と

波田は、自分の仕事着が未だ、今乾された許りであるので、いくら汽罐場の上でも未だ生乾きであることを知つてゐた。従つて彼は、猿股一つの上に合羽を着て作業しやう決心であつた。處が仕事着は小倉が彼に一つ呉れることにしやうと申し込んだ。それで、彼は、油繪のキャンパスのやうな、オバーオールを一つ手に入れることが能きた。それにはペンキで未來派の繪のやうな模様が、ベタ一面に彩られて、ゴワ／＼してあつた。

「それでも、ロンドンで買つたんだぜ」小倉は云つた。

「舶來の乞食が着てたんだらう。こいつあ具合がいいや」と彼は云つた。

水夫達は皆各々スタンバイした。そして、ともへと出かけた。

暗黒は海を横にも縦にも包んでゐた、闇は、その見えない力であらゆる物を縛り、締めつけ、引き摺り、轉ばしてゐるやうに思へた。それは總ての物を纏めて引つくるみ、その中の部分をも締めつけた。風が波に打つ衝り、マストに突き當り、リギンに切られて、泣き喚いた。海はその知らぬ底で大きく低く、長く唄んでゐた。

わが萬壽丸は、その一本の手をもつて、相變らず虚空を掴んで行き惱んでゐた。船尾の速度計は三哩を示してゐた。

水夫たちは、倉庫からダリスを取り出して、ウエスにつけ

てその手に握つた。
そして、ボースンが、ランプをもつて、レットの機械を照らした。

ともからは、波田が以前から、その後頭の左寄りの處に時丸位で深さ二寸位の穴を『ブチ開け』てやりたい、と常々希つてゐたセキメイツ（二等運轉手）が來た。

硝子管は沈鍾の中へ收められた。そして、バネが外された。凧の緒のやうなワイアを引つ張つてレットは、ガラガラツと船尾から逆巻く、眞つ黒な中に、噛みつかんばかりに白い泡を吐く、波層の中へと突進した。デツキの最高部は極めて狭かつた。従つて、後部のハツチデツキを浪で蔽ふ時は、われわれは、本船と切り離された板片の上に縋つてゐるやうな心細さを感じた。凍寒はナイフのやうに鋭く痛くわれ等の薄着の肌をついた。飛沫は絶えず、全部の者を縮み上らせた。

レットが、その緒を引つ張る速度が緩むと、それは、ハンドルに依つて止められる。そしてそのワイアの長さが、そこで讀まれる。それを讀み終ると、二つのハンドルでその沈鍾を巻き上げねばならない。それが水夫の仕事であつた。深海測定器であるから、おまけに進行中であるから、鍾は斜に流れつゝ海底に到達するのである。百米突、二百米突などのワイアの長さを讀み上げられた時、われわれは、海の深さよりそれを巻き上げることの困難さに縮み上る。

なるのであつた。そして、それが、お互に、颯ごつこをしてゐるのであつた。それはまるで、冗談半分にやつてるとより思へない格好であつた。

セキメイツは絶えず、怒鳴り散らした。實際セキメイツにとつては、水夫等がそんな格好をすることは、仕事の能率の妨げになり、殊に『俺を馬鹿にして』ゐるのであつた。水夫等は、セキメイツの怒鳴ると、波浪の吠えるのと、スクールの轟音と、リギンの裂くやうな音とをゴツチャ／＼に聞いてしまつた。そして、依然として、彼等は、彼等の必然に従つて、二つの反射運動を繰返した。

セキメイツは自分の怒鳴る毎に、わざと、一戸宛餘分に入るやうにしてやらうと計畫した。「こいつ等を翌朝まで巻かせてやるぞ」と彼は決めたほど怒つてしまつた。

沈鍾は長い間反抗して、遂々上つて來た。鍾の中から硝子管を取り出して、それに代りを入れて、入口を、グリスでしつかり塗るのである。その硝子管が鍾の内へ收まるや否や、セキメイツは『レツコ』と怒鳴る。ボースンはバネをとる。沈鍾と、ワイヤとは投げられた石のやうに飛んで行く。

この作業を水夫等は繰り返さねばならなかつた。それは我慢のならぬことであつた。けれども我慢せねば、またならぬことであつた。

水夫等は、八度、それを繰り返した。それは、八日、航海す

それは極めて、それそのものとしては軽いものであつた。けれども船の進行と、浪の抵抗とは、釣つた魚が愈々陸上に上るまでは、その幾倍もの大きさのやうに思はれる、より以上に、その小さな沈鍾を重くした。そして、その手巻ウインチは、極めて小さく出來てゐたために、ワイアを、一回轉に、極めて小距離、最初は二吋後に三吋位より巻き取ることができなかつた。そして、それが車軸へ來るまでに、二人の水夫は、グリスを以て、ワイアに塗らねばならなかつた。これは、一々塗ることが不可能であるために、二人のセーラーはワイアをグリスのついたウエスで握つてると云ふ形になつて現れるのであつた。

巻き方は骨が折れた。と同時にグリスの塗工も寒かつた。そして、その全體の者にとつて最も苦痛な點は、凍寒と、眠いと云ふことであつた。

寒さは全く著しかつた。合羽をバリバリに凍らせた。皮膚が方々痛かつた。齒が合はなかつた。體が痺れて來るのだつた。そして、眠りは、もつと強く、水夫たちを襲つた。賃銀勞働のあらゆる刹那が必要勞働と、餘剩勞働とに分割され得るやうに、あらゆる刹那に、寒さと、眠さとが、全て相反した刺戟を彼等に與へた。

寒さに對しては、彼等は必要以上に、體を揺り動かした。眠さに對しては、彼等は膝關節が、グラグラして、作業が空に

るより、八日拘留されるよりも長かつた。その間に四時間半を費した。彼等は濡れた駄のやうに疲れ衰へてしまつた。

セキメイツは徹夜の決心を、自分のために撤回した。彼も今は濡れた駄であつた。

水夫がその南京虫の待ち草臥れてゐる巢へ藻漕り込んだのは、午前一時前十五分であつた。そこには眠りが眠つた。

九

一切を夢の中に抱擁して、夜は更けた。夜、そのものは、それでいいのであるが、おもての船室は、一八六〇年代の英國に於けるリース仕上の家内勞働者が、各一人に對して六十乃至百立方呎しか空気を與へられてゐなかつた——マルクス——のと較べて、もつと甚しかつた。われ／＼は、夜の明け方まで、死のやうな眠りにつく、そしてその死のやうな眠りから覺めて『罐詰の蓋』を開けて、外氣を室内に吹き入れしめるときに、『あゝ、眼が覺めた』と思ふ代りに『よく俺は蘇生したものだ』と思ふのであつた。

我々はしけの場合は、殊にオゾンが多いにも拘らず、殆んど窒息死の瀬戸際まで眠る。そのために、我々の體中は、一晩中に鈍く重くなつてゐる。そして、睡眠が與へる元氣恢復と云ふことは思ひもよらないことであつた。

われ／＼は、水夫室なる罐詰の、扉なる蓋を開けて、初め

て、人心地がつくのであつた。——これは、本文と關係のないことであるが、此時乗組んでゐた人間の中、藤原、波田、小倉、西澤、大工、安井は皆肺結核患者であつた——そして、此空氣混濁は、そのことに起因して、肺疾患者を海上に於て生産する矛盾を敢てした。

罐詰の内部に、生きたものが居ると云ふ結果は、どんなものであるかは、明に誰にでも想像のつくことであつた。たゞそれは、その蓋を開けた時に、蓋の外の清浄さによつて、非常に救はれた。

彼等が五時間眠つてゐる間に、海は凩いだ。アルプスのやうに骨張つてゐた海面は、山梨高原のやうにうねつてゐた。マストに、引つ懸り打つ衝つた雲は、今は高く上の方へ昇つて行つた。

發作の静まつた後のやうに、彼女はおとなしく、静に進んだ。

室蘭出帆の日は日曜であつて、作業、それも並々ならぬ難作業だつたので、今日の月曜は日曜線延べて休みにするやうに、『とも』へ頼みに行くことにしやうではないかと『ならずもの』共は、齒磨揚子を聊へながら相談した。

「それは願ふまでもなく至當の事ぢやないか。黙つて休みやいいさ」と藤原は闘争的に主張した。

「これは、一々その都度都度、頼んだり願つたりしちや、面

痛さを感じることはなかつた。

水夫達は皆、夫れ夫れの嗜好に従つて、横濱へ着いてからの行動や、食物に就いて空想に浸つてゐた。デツキの上では、彼等は陸にさへ上れば、あらゆる快樂がある、それが待つてゐると思ふ。自分たちが縛られ、奴隷扱ひにされ、自由を略奪され、労働力を搾取されてゐることは、陸と、デツキとの間に海が横はるからである、無意識の中に考へてゐた。それは丁度牢獄に監禁された囚人が、赤い高い煉瓦塀の彼方には、絶對の自由がある。自分はそこでは自分の好む通りにすることが能きる。そこは、そのまゝ天國だと、考へるやうなものであつた。處が監獄の塀の外にも、彼の考へた自由はその影もなかつたやうに、又甲板の上で考へたやうな自由と幸福とは、決して陸上にもありはしなかつた。彼等は、それを、彼等が上陸する度に味つた。そして、陸上で自分の財布を地面へ叩きつけ、自分の着てゐるその無格好な汚れた着物を引き裂き、労働で荒れた、足の踵のやうな皮を引ん剥いてやり度く思ふのであつた。それ等が、彼等が折角撞れ切つた陸に上つたに拘らず、彼等から自由と幸福とを追つ拂つた。

労働者は、自由や幸福や、人間性が、賃銀を得つゝある間に自分に與へられ、或は自分からそれを得やうとすることが、全然不可能なものであることを知るやうになる。人間が牛肉を食ふと同じやうに、人間が〇〇を食ふ時代の存續する限り、

倒だし、その度にかげ合ひに行く者は悪者になるやうだから、一つ永久的の取り極にしたなら、『日曜日、出帆入港にて休日フイとなりたる節は、翌日を公休日となすこと』とか何とか、四角張つて、約束しといたら、そんなに、毎々間違つかないでも濟むだらうぢやないか」波田は提案した。

「そんなにしなくなつて、そういつもあることぢやないんだから、今日丈け願つといたらいいぢやないか」とポースンはなだめた。

哀れなポースンよ！ 年は寄つてるし、子供は多いし、暮しは苦しいし、娘は病氣だし、此臆病な禿げのお爺さんに従ふことに皆決めた。

ポースンは、顔を慌て、洗ふと其の儘、チーフメーツの處へ頼みに行つた。

船は大うねりに乗つて、心持よく泳いで行く。右手には遙に本州北部の山々が、その海岸まで突出して、豪壯なる姿を眞つ白く見せた。寂しい山河である。そこには我等の寄るべき港とては殆んど無いのであつた。人煙稀れなる森林地帯でもあるやうに、原始的な草原でももあるやうに感じさせる景色であつた。ポースンの返事のあるまで、水夫達は、デツキへ上つて、懐しき陸を眺め、昨日困らされた海を見入るのであつた。

風は、今日は昨日程寒くなかつた。黒潮の影響を受けてゐるので、デツキへ上つても、メスで頬の肉を裂かれるやうな

痛さを感じることはなかつた。

労働者は、その生命が軛の下にあることを自覺しなければならぬ。水夫等は、そんな風なことを感じた。と思ふと、そのすぐ次には「俺一人ていくら焦つて見ても始まらない話だ、坊主でも女郎買をするではないか、俺等は人間の中の屑扱ひにされてゐるんだ」と、社會が自分に強制する處の職分及生活範圍を、自分から容認してしまふのであつた。

彼等は、陸でも、これより月給がいゝのに、俺は海の上で何故こんな少ないのだらう。俺も陸に上つて働けないだらうか、迎も働けまい。口があるまい。と、彼等は法則通りに思ひ込んでゐるのであつた。

ポースンが『とも』から歸つて來た。そして『持に今日は休暇を與へる』と云つたことを傳へた。

この報告は、何等の批評もなく皆に受入れられ、喜ばれた。「馬鹿にしてやがらあ『特に』だ」と、嬉しうに叫びながら、誰もが、何を爲るためにとも分らずに、そのベッドへと駆け込んで行つた。

そして此の貴重なる、出し澁られた休日等を彼等は大抵眠つてしまふのであつた。全く、いつもの例の如く、此時も、一人残らず、その巢へもぐるが早い、眠つてしまつたのであつた。

唯一の切實なる欲求を睡眠に置いてゐるセイラーたちは、そのことから見ただけでも、どの位彼等が過勞し、酷使され

てゐるかゞ分る。

一〇

朝食は八時である。波田は、ボーイ長が負傷したため、仕事の間炊事の方をやらねばならなかつた。二時間許り間があるのに、彼は其の時間を、自分のベッドへともぐり込んだ。彼は、八時になると、コツクから起された。彼は、おもての人たちが食べるやうに、大きな味噌汁鍋と、お鉢とを、コツク場から抱いて来て、柱に添ふて吊り下げた、テーブルの上へそれを載せた。それから彼はあらゆる準備を終へて、「飯だ」と怒鳴つた。

ボーイ長には、昨夜通りに、味噌汁を添へて與へて、彼は第一番に朝食に就いた。それは、全くうまい飯であつた。味噌汁もうまかつた。澤庵も、……

波田が食つてゐる中に皆も眠い目をこすり／＼起きて、飯にとりかゝつた。

船の飯はうまかつた。それは、全く澤山食はれた。それは味としては實に下味さ此上もないものであつた。味噌汁にして、澤庵にして、味と云ふ點から味ふ時にそれは零であつた。けれども、これがセーラーたちには此上もなくうまかつた。彼等はよくそれほど多量に食べると思ふほど貪り食つた。ストキは波田に、セーラーたちが、不味いものを多く食べる

する何等の仕事のない時、たゞ一つの自分自身の事があるならば、それは誰にでも、重大に取り扱はれねばならないことだ。殊にそれがパンの問題に關する時は、猶更さうでなければならぬ。

實際彼等は、その食事を、實際より以上に、想像を以て調理して食ふのである。じやがいものうてたのが鹽で味をつけて盛られてあると、彼等は、それをキントンと呼ぶのである。そして、それは全くきんとんのやうにうまいのである。

外國航路に於ける船では、決してこんな状態ではないが、それにしても心理的には、矢張りさうである。けれども、萬壽丸は、これが甚しい。萬壽丸では、船主は甲板部に豚を飼つてゐる積りで、もあるらしい。

「こんな状態では、誰でも、心細さから支けても、喉まで詰り込み度なることは事實である。」と。これがストキのプロレタリア哲學であつた。

事實、ストキは質が悪い、第三者の積りで、自分が豫め腹を作つて置いて、其状態を眺める時に、ストキの觀察及批評は當つてると、思はずにはゐられないのである。

食事は、藤原の皮肉なる觀察の如くにして終つた。終るや否や又元の如く寢床へ犬の様に潜り込んだのが、三上であつた。西澤は煙草に火をつけて、彼が最も得意とする、信州岡谷附近の紡績工場へ勤めてゐた頃のローマンズの一くさり

ことには、心理的な部分も非常に手傳つてゐると云つたことがあつた。ストキに従へばかうであつた。

セーラーは食物を定期に與へられる。彼等は、どの食事の前にも尠くとも、四時間の勞働を課せられてゐる。彼等は充分空腹である。時間が來ると、彼等は食卓へかけつける。食卓には、盛り切りの惣菜が一皿宛置かれてある。稍々充分に食べる爲には、澤庵だけしかない。彼等は、いつでも、次の食事が甚敷く待ち遠い。夫は、空腹が待たせるよりも、一つの重要な理由は、次の食事が來ると云ふことが、その日の勞働をそれだけ成し終へたと云ふ、一つの安心を彼等に與へることと、その食事の後にいくらかの時間が、彼等に與へられてゐることとである。彼等は、これ等の心的作用によつて、待ち兼ねた食事が濟むと、直ぐに次ぎの食事を、ゲーゲーおくびを出しながら待つのである。彼等は又食事と食事との間に、間食することが能きない。彼等は食事に際して、そこに盛りられた量以上の菜は絶対に食ひ得ない。また、それ以外の菜も海上に於いて求むべき方法がない。丁度彼等は囚人が、其の胃腸を少食のために損ひつゝ、堪へられない飢を訴へ、次の食事に對して焦燥を感じつゝ待つのと、同様である。

セーラーたちが、食事をそれほど待ち、貪るのは、それが自分自身のためにする（これは資本家のために、再生産することにもなる）唯一の生活手段であるからだ。自分のために語り初めた。彼の話は實にうまかつた。講談師でもあれほどには話さないであらうと思はれる程、一切を創作的に述べるのであつた。そして、その話がうまければうまい程、初めの人には感心し、古顔は、遁げ出してしまふのであつた。

今は、藤原も、波田も、遁げ出す譯に行かなかつた。外に誰も西澤のローマンズを引き受けて呉れるものが無いからであつた。藤原は辛抱する氣でこれも無暗に、煙草を喫かした。西澤の話が、その巧妙なる山に入つて、今正に落ちやうとする時、藤原が云つた。

「君の話は大變うまい。そして大層面白い。たゞ、一度だけ純粹なほんとの話をして聞かして貰つたら、猶面白いだらうと思ふよ」

「アハ、ハ、君の皮肉の方が上手だよ。僕も一度ほんとうな話をし度いと思ふんだが、どれがほんとだか、どこからが拵へたんだか、今では自分にも分らなくなつてしまつたんだ。ハ、ハ、ハ」と氣の良ささうに笑つた。

「君は全く、無産階級藝術家の寶玉だ。全くだよ」と藤原は、全く眞面目に云つた。

「小銃だと受け應えが出来るが、藤原君がタンクを使用し初めると、僕も退却以外に應戰の法がねえや。ハツハ、ハ、ハ、」西澤も、そのベットへ上つて、轉がつてしまつた。

「どうだい、誰もかも皆寝ちやつたわ。『寝る程樂はなかりけ

り、浮世の馬鹿が起きて働く』つて歌があるぢやないか、皆賢くなつちやつたね。」と云ひながら波田は、自分の巢から本を持ち出して来て、それを、繻詰の蓋の處へ行つて讀み初めた。

藤原は暫く、暗い室の中で、煙草の火だけを、時々明るくさせては一人、何か考へてゐるのであつた。が、やがて彼は煙草を捨て、立ち上つた。

「波田君、君は感心に本を讀むね、それは何て本だい。航海學かい。」

「ナアニ、友人から借りて来たんだが、迎も難かしくて、分らねえんだ。」

「一寸見せ給へ、へへ、マルクス全集、第一巻且か、資本論か、それや君、社會主義の本ぢやないかい。」

藤原は、自分も其本を非常に讀み度く思つてゐたが、餘り高價なので今まで買ふことが能きなかつた。彼は中をめぐつて見ながら「面白いかい」と訊いた。

「面白いか、面白くないか、ためになるか、ならぬか、全て分らぬよ。意味が分らないんだ。處々サーチライトで照らし出した程部分的に分る處があるんだ。そこはね、本文の論旨を説明するために引例した處さ。その例だけは分る。そして素てきに面白い。面白いと云ふより、何だか、僕たちのことが、僕たちの知つてゐるより以上に委しく書かれてゐるよ。だ

「僕が身の上を、誰れかに聞いて貰はうなんて野心を起したのは、全く詰らない感傷主義からだ。こんなことは、話し手も聞き手も、その話の後で、きつと妙な淋しい氣に落ち入るものだ。そして、話し手は『こんなことを話すんぢやなかつた。俺はなんて下らない、泣き言屋だらう』と思ふし、一方では、『あゝ、あんなに昂奮して、あの男に話さすんぢやなかつた。此話は後々の生活の間に何かの、悪い障害になるか知れない』と、思ふに決つてゐる。處がそんな結果を齎すやうな話だけが、何かのはづみに、どうしても話さずには居られない衝動を人に與へるものなんだ。あとで何でもないやうな話は、何かのはづみに、誰かを驅り立て、話さずには置かないと云ふやうな、昂奮や衝動を與へはしないんだ。僕は、今日、僕が本を無暗に讀んだと云ふ話から、僕は我慢が出来なくなつたんだ。それほど、僕は『本を讀んだ』ことが僕に馬鹿氣た氣を與へたらしいんだ『本を讀んだ』ことは、僕が起さるのにも、眠るのにも、ものを云ふのにも『本を讀んでゐる』やうな感じを人に與へるらしい。詰り僕は本の讀んでならぬ乾燥したものを讀んだんだ。

それで僕は見事に頭を壊してしまつた。今から考へると、その頃、僕は何を讀むかと云ふ大切な讀書の要件が分つてゐなかつたんだ。時によると、圖書館で、目錄だけを半日かゝつて讀んだ。そして結局、本を讀むことは、僕に何も與へな

けど、その例以外は全て分らないんだよ。波田は正直に答へた。

「僕にも讀まして呉れ、ね」藤原は頼んだ。

「あゝ、いいとも、讀んで呉れ給へ、未だ續きが三冊あるからね。」

「僕も本を讀むことは好きだつたよ。随分よく讀んだものだよ」と云つて彼は、波田と並んで木のベンチへ腰を下した。

彼は、人を人とも思はないやうな、ブツキラ棒な男であつた。そして必要以上は口を利くことが嫌ひなやうに見えた。

「全く君は讀書家だね。」と波田は藤原に同意した。「そして、どんな本を君は好んで讀んだかい。」

「僕はね。ありとあらゆる詰らない本を讀み漁つたよ。珠算

獨り學びなど云ふ本まで、珠算なんてする氣もなく讀んだし、

ドンキホーテも、渡邊華山も、占易の本から、小學地理、歴史、修身、全く何でもかでも活字の並んでゐるものは手當り

次第に讀んだよ。」と、藤原は、何だか、河の堤防が決壊して

もしたやうに渦を卷いて彼の話を話し出した。

一一

藤原は、そのいつもの、無口な、無感情な、石のやうな性格から、一足飛びに、情熱的な、鐵火のやうな、雄辯家に變つて、その身の上を波田に向つて語り初めた。

いことを知つたんだ。そして今になつて考へると、その頃の僕には、生活がなかつたんだ。生活が、その頃の僕は煙見たいにフラ／＼して、地についてゐない、生意氣な學生だつたんだ。本を讀むことの無駄を知り、僕の頭の従つて、カラッポであることを自覺した僕は、生活を得やうと考へたんだ。生活は學校を出て、その免狀で月給にありついて、その範圍外は家からの補助で送るのが、生活ぢやないことを僕は覺つたんだ。生活とは、燃えるものだと思つたんだ。焼け盡すやうな爆發するやうなものが生活だと僕は考へたんだ。俺は親の金で教育を受けてゐる。それや俺が生きてると云ふ事にはならないんだ。俺が生きてるためには、俺が自分を活かさなきゃならないんだ。俺は、俺の腕で食はう！と僕は決心したんだ。そこで、僕は毎朝、下宿を辨當を持つて出て、友人の所へ書物を預けて置いて、工場を廻り歩いた。そしてAと云ふ工場に旋盤見習て入つた。

工場生活は、非常に苦しかつた。學生の生活と較べて溝のやうに悪かつた。朝から夜まで、仲間の勞働者さへも、見習の僕を敵視するやうに思はれた。單純に物事が運ばなかつた。僕は、今ではあたり前だと思つてゐるので、自分でも驚くのだが「伍長の處へ行つて、グレインを借りて持つて來い」など云はれてどの位そのために恥をかいたり、方々駆けづり廻つたりしたか知れなかつた。僕は、此處にも生活はないと思

ひ初めてみた。けれどもそこは、學生とちがつた處があつた。眞剣だつた。そして、誰もが、心の底になにか雪雲のやうに陰鬱なものを貯へてゐた。どんな若い労働者でも、不平を云つてゐた。そして、彼等は、其生活が悪いと考へてゐた。僕も甚だ悪いと思つてゐた。そこで、僕等は、いい生活を考へるのだつた。こんな生活はいけない。

こんな生活は、あそこがどういけぬ、こゝがあつていけぬ、いとすつかり分つてゐるんだ。そこで、いい生活はこゝを、あそこを、あそこを、旋盤を睨みながら一日に十四時間も十六時間も考へるんだ。それを、矢つ張り仲間たちも、多いか少ないかだけで、考へるには考へてゐるんだ。

「いい生活を人類のために求める。そこに俺の生活があるんだ」と、かう僕は、フト旋盤に送りをかけて腰を下す途端に考へたんだ。それから僕は、本を讀む代りに、自分たちの生活を見つめるやうになつた。僕は全て僕自身を仇敵のやうに白い眼で睨んだ。工場へ五時に來てから、幾度も小便に行つた。その中ほんとうにしたかつたのが幾度、あとは、兎にかく場處を動き度かつたからだ。倉庫番(工場の)の處まで何歩あるか、何秒かゝるか、それだけを悠くり歩くことを、何故職長は咎めるか、職長は労働者か、それとも何か、とそんな風に愚の骨頂のやうなことから、その他様々なことが、僕の頭を根限り追ひまくつた。

そして僕には、僕が學生であつた時代が恥かしくなつた一時代が來た。僕はそれから、性格が一變したんだ。それまでは、僕は、殆んど誰れからも愛される質だつたんだ。そして近づき易い青年だつた。處が僕が、學生時代を呪ひ初めると共に、職工時代をも呪ひ初めたんだ。詰り、その「恥づべき學生の俺を今の職工の俺たちが養つてゐたし、これからも養つてやらなきやならないんだ」と。丁度僕が、此正體の知れない考へに囚はれた時に、一人の職工と知り合ひになつたんだ。

「人間は何故働かねば食へないんだか知つてるかお前」とそいつが云ふんだ。僕は暫く黙つてゐた。すると、

「人間は何故働かねえ奴が贅澤だか知つてるか、え」とそいつが又云ふんだ。

「人間は苦しんでゐるんだ」と僕が云つたんだ。

「さうだ。一人のために千人が、十人のために一萬人が」とそいつが云つたんだ。僕は分つた。その労働者は、白水と云ふ名前だつた。

それから僕はその男とつき合ふやうになつたんだが、その白水と云ふ男は全く珍らしく意志の強固な、感情を理智で叩き上げて、火のやうな革命的な思想を持ち、それを僕等が飯でも食ふやうに、平氣で、傍目からは習慣的に見えるほど、冷靜に實行する男だつた。A工場では、誰もその男を尊敬し

てゐた。會社では、その男を鐵首しやうとして、あらゆる手段を廻らしてゐた。そして、それは白水も充分に感づいてゐたやうだつた。彼は、眼だけを光らして、殆んど上役と口を利く様なことがなかつた。上役も彼を見ると、なるべく避けて歩いてゐるやうに見えた。彼は、朝から終業まで、熱心に旋盤にかじりついて、仕事をした。そして、不思議なことは、彼は、特に能率を上げたこともなく、下げたこともなかつた。いつも一生懸命でやつてゐて、そして彼の能率は中一寸以下であつた。彼の熟練には、職長も文句が出なかつたんだ。彼はA工場の技師長と同期で大學を出た、と云ふ噂があつたんだから。處が白水は學校には、實際は行つてゐないらしいんだ。然し、また驚くほど獨學をやつたらしいんだ。彼は僕と違つて、讀むべきものを知つてゐたんだ。探す目的を持つてゐたんだ。それに、白水は、前科が四犯あつたんだ。その各々の入獄時代に外國語も研究したらしいんだ。年は見たところ三十にも見えるんだが、實際は二十六だつた。彼は、資本家からも、労働者からも、別々な立場と意味とから注目されてゐたんだ。それは汚ない、暗い六疊の間だつた。それを白水は借りたんだ。そして彼はそこで自炊を初めたんだ。暫く彼がさうしてゐる中はその六疊の間は、いつでも夜になると、労働者が五六人集つてゐないことはなくなつた。

二

藤原は熱心に語つた。彼は、白水を目の前に置いて、話してゐるやうに、感激し、幸福さうに自分の話に酔つてゐるのであつた。彼は、こゝまで話して來て、その好きな煙草に火をつけて、肺臓全體に煙の行き互るやうに、深く鋭く、煙を喫つた。

波田は、熱心に聞いてゐた。そして、白水と云ふのは、藤原の前名のことはあるまいか、と、藤原の話の合間合間に疑つたりしてゐた。それは、藤原によつて語られ、表される白水ではあるにしても、餘りによく藤原に似すぎてゐた。けれどもそれはどうでもいゝことであつた。

「フーム、鐵工産業の労働者は頼もしいね」と、波田は詠嘆的に云つた。

「労働者は、主人になるんだからね、労働者の手によつて、平和と幸福とが購はれるんだからね」ストキは、ホツとしたやうにして云つた。

「それから、その男はどうしたんだね」と波田は本をいぢりながら訊いた。

「白水は、自分の六疊の薄暗いと云ふより、殆んど眞つ暗な間を、夜間——晝間でもいいのだが、晝間は皆仕事に出るのであつた。が、中には、晝間辨當を持つて本を讀みに來る者

もあつた——開放したのであつた。そして、顔は變つても、數はいつでも大抵五六人、多い時は十五六人も集つた。そして、そこにいるんな話が取り換された。僕も、その集りには毎晩出たものだった。

白水は、彼の室では、又はその集りでは、全て工場に於ける彼とは別人のやうに柔和に、そして氣輕になるのだつた。最初の間は、誰でも不思議に思ふのだつた。誰かが「白水君は、工場と、家とは別々な全く異つた白水君を持つてるんだね」と云つた時、彼はかう答へた。

「それや僕に限つたこつちやないぜ。君だつてそうぢやないか、機械の附屬品たる君と、妻君のための君と、奴隷としての君と、君の主人としての君と、誰だつて、労働者は此二つの人格を持つてゐないものはないだらう。君だつて、機械の附屬部分として働いてゐる時の顔付や氣持と、今の、それ、妻君や、子供のための君としての顔付や氣分の方が、どの位懐しい、親しい人間だか分らないよ。燈臺下暗しだぜ、ハツハツ、と。」と。そこに居合せた者も、皆聲を揃へて笑つた。彼の説明は按摩のやうに人を柔にし、その疑を解いたんだ。

そして、話はいつても、かう云つた風な冗談から口を切られて、何故労働者が機械の附屬部分であるか、と云ふ質問が生じて來るのだつた。それには白水君が誰も返答しない時に、ゆつくりと、よく分るやうに説明を加へるんだ。

XXXX、XXXX、恐るゝに足らずと云ふ、固い信念の中に、生きるやうになつたんだ。さうして、さうなると、そこに待つてゐたものは、彼等の尻を引つ叩いた鞭が、拵へて待つてゐた陥牢であつた。愈々彼等は、現實の牢獄の扉に打つ突らねばならなくなつたんだ。

ある年の秋だつた。A工場の在るN市は、日本全國を襲つた暴風雨の襲撃を蒙つた。その程度は日本の諸都市中で最も惨めな部分に屬する程であつた。

風が強くて、雨が横から吹いて、傘がさせなかつた。屋根瓦が吹き飛ぶので、街に出られなかつた。海岸部分は軒先まで浸水した。水が減くと同時に、崩壊れた家が無數だつた。船が海岸へ打ち上げられて、玩具屋の店先に於ける船のやうであつた。目貫の方でも、小學校が倒壊した。民家が倒れた。市民は外にも出られなかつた。内にも居られなかつた。

A工場の労働者も、此天災から逃避し得なかつた。のみならず、彼等は其住む地域の關係上、より一層甚しい程度に、その惨害を受けた。彼等は少し受取つて多く養ふために、安い家賃を選んだ。そこは海岸の低地であつたんだ。

A工場の労働者で、白水と同じ部に出てゐる男が、充分に其浸水の鹽の辛さを舐めさされた。彼の家は床上二尺浸つた。疊が將に汚濁せる潮水のために浸らうとする時、正に其時期にかつきり達してゐた彼の妻君は、生理上の法則に従つて、赤ん

かう云ふ風にして、そこに集つて來る労働者は、必ず、一つ宛か、二つ宛か、自分自身の身の上の解剖を會得して歸つて行くやうになつた。

かうしてゐる間にも、白水は、絶えず、警察から、尾行されたり、張込みされたり、呼出しを受けたりするんだつた。そして、それが、毎晩そこに集ることが原因であることが、そこへ集つて來る人達にも分つて來るのだつた。

その中に、そこへ絶えず集る者には、たとへば僕等などにも、時々警察の眼が光るやうになつて來たんだ。それが何故だか分らなかつたんだ。しかし、若い者は警察からかれこれ云はれることに對して、非常な反感と、従つて、それを激成するやうな、立場になつて行くのだつた。彼等は今まで無邪氣に聞いてゐた。しかし、警察が彼等の私宅を訪問したり、その工場を訪ねたりするやうになると、彼等は眞剣に聞くやうになつて來た。そして、警察を段々恐れぬやうになつて行つた。

「俺達自身が何であるかを、俺たち自身で研究することが、何故悪いんだ」と、若い労働者たちは、警察の刺戟の洗禮を受ける、一種の無産階級信念——を抱くやうになつて來たんだ。

そして、遂に、警察によつて刺戟された若人共は、立派な「無産階級軍の前衛隊」となり、猶加へらるる試練によつて、坊を分曉した。その産褥の隣りに、十二年以前から如何なる場所へでも横になつて行く、痛風の彼の老母が臥せてゐた。太陽が誰をも待たないと同様な公平さと、正確さとで、その汚濁した潮水は、その水量を増して來た。叫喚があつた。失心があつた。泣き聲があつた。

此労働者は、盥に赤ん坊を入れた。そして押入れの上段に、出來るだけ深く老母を深く押し込んだ。次に彼の妻君を、その手前へ押し込んだ。その上で、此男は、自分自身赤ん坊を襁褓で拭いて、父親の正當なる責任を果した。極めて簡單明瞭なる事實であつたが、それが簡單であつても、その事のたぬに入費がかゝると云ふことも明かなことだつた。處が、どうして此男が母の藥代や妻の後始末、それから子供への手當、産婆への報禮などをすることが能きよう。それ處ではなかつた。彼は今まで、家族を養つてゐたA工場にも、出るに出来ない有様だつた。疊はビシヨ／＼に濡れてゐた。床の下は魚でも住んでゐさうだつた。便所と井戸水とが同居したのに、未だそれが掃除されてゐない。

若し、此の男が苦勞に馴れなかつたか、貧乏に馴れなかつたか、一寸神經質でもあつたのなら、僕等が考へても、首をくゞつた方が氣が利いてゐさうに思はれる位なんだ。ところが、此の男は我慢したんだ。後で知る事だが、此の男は我慢するんだ、何でも、癪に障る位我慢強いんだ。と僕等は、

さう思つてたんだ、ところがどうだらう。全つ切り奴は感じないんだ。

彼は、此惨憺たる事實に對して、何物をも感じなかつたやうだつた。たゞ、金が少々あればいいのだつた。それが萬事を解決するだらう。君、長い間、人間は餘り慘めであると、感受性を全然失つてしまふものらしいんだ。此兄弟なんぞも矢つ張りその一例だと見える。人間がその苦痛に對して、馴らされてしまふ——何の必要もないのに——それが、どんなことだと君は思ふんだ。馬が去勢されて生殖慾が無くなるやうに、人間が、縛りつけられて、型に押し込まれて、自由を奪はれてしまつた去勢された馬のやうに、感受性を失つてしまふ。自分がどんな奴隷だか知らずに、働けば樂になると思つて働く。労働者たちは、皆此感受性を麻痺させられてしまつたのだ。労働者は働けば働くほど、自分を搾る資本に、それだけ多くの餘剩労働は搾取され、資本を増大せしめるんだ。此去勢された、馬のやうになり切つた兄弟は、二三日の後會社へ行つたんだ。

「積善會の積立金を頂き度うございますが、さう云ふ譯で」と、事實ありのままを純客觀的に——彼には、今では、彼自身のこと客觀的にしか見えなくなつてゐるやうだつた——と述べて立てたんだ。此積善會つてのはね。労働者の賃銀の百分の五を毎月強制

細大洩らさず、「客觀的」に話し初めた。

彼の話は、決して腹の立つべき質のものではなかつた。けれども、その長さと、それから、繰返すと、切りのないのには、誰もが退屈をしなければならなかつたし、それに、話の中に、いつの間にか、問題と、話の中心とが離れてしまふと云ふ困難な缺點があつた。

「それで、どうだと云ふのだね」と後明は、此男に訊いた。「へー、それで」と、此哀れな男は鸚鵡返しに答へた。そしてそれつ切りで先が出なくなつてしまつたのだ。彼はもう、自分の要件は今までの話の中で話した、それも繰り返し／＼話したやうな氣がしてゐたのであつた。もうこれ以上何を申上げませうと云つた顔付をしてゐた。

一三

「さう云ふ悲惨な事情であるから、自分の労働賃金の一部を積立てゝある、積立金を拂戻して下さいと云ふのです。白水が代つて話した。

「君は頼まれて來たのかね」後明は、夫れの方が先決問題だと云ふ様な顔付で訊いた。

「さうです」

「さうかね」と、今度はその男に聞いた。

「へー」と、どつちだか分らぬ返事をその男はした。

積立てをさせるんだ。そして、その金を一定の額だけ、吉兎禍福に應じて、會社からいくらかの補助金と共に「給與」して貰ふんだ。そして毎年一回此金で運動會を開いて、一金一封（五十錢）を酒代として、頂くんだ。工場法の役目を、労働者の負擔に轉化した型が、即ちその積善會なるものだつたんだ。その積善會のお金の中で私の積立金を下さいと、此男は申出たんだ。

勿論それは言下に刎ねつけられて、見舞料として、積善會から二圓丈け貰へた譯なんだ。處が二圓では何とも話が煮えんと其男は云ふんだ。何とかならないでしやうかと、相談を白水に持つて行つたんだ。

「それは、積立金を取つたらいいだらう。積立金は職工の貯金だらう。それを取つたらいいだらう。積善會の方は又話が何とかつくだらう。」と云ふことで、白水は事務所へ、その節くれ立つた木の切り株のやうな男と一緒に走つたんだ。工務係の後明と云ふ妙な後光の差し損つたやうな名前の男が、二人と相對して、何の話だと聞いたんだ。

おふくろと、妻と赤ん坊とを、押入れへ押上げた、此哀れな男は、くどくどと、何故波が敷居より上へ上つて來たか、とか、疊と疊の間から、先づ汚れた水が、ブク／＼と吹出して來るものだと、押入れへ、幸ひ、三人を入れましたので、とか、彼れが、今そこで、そんな目に會つてゐるやうに、

「その事が、その積立金拂戻について、それほど重大な先決問題ぢやないではありませんか、問題は極めて簡單でしよう。労働者がその賣つた労働力に對して支拂つた金額の一部を、會社が労働者の爲に積立ててある、強制的に。その金額を、労働者が返して呉れと云ふのは、全て一分の思考をも要しないことぢやありませんか」白水はまくし立てた。

「それやね、誰も拂はんとは云はんのだが、どう云ふ手續で持つて行かうつてんだね。」

「支拂傳票さへ書けばいい、こつちやありませんか」

「詰り、退職しやうと云ふんだね。」と、意地悪の後明人事係は云つた。

「退職！ 誰れが、いつ退職なんて云つたんです」と白水は少し宛昂奮してやり始めた。

「だが、會社の規則では、積立金は、退職の時に支拂ふと云ふことになつてゐるもんだからね。従つて、積立金を受取る者は、同時に、賃金の残額をも一緒に支給されることになる譯だね」と、その豚奴は、いやに尻を落ちつけてやがつた。

「勿論」と、白水は口を切つたんだ。奴が、何か心に決することがある時の重々しい口調でね。

「労働者が退職して行く時に、積立金が賃銀と同時に支拂はれるのは、當然なんだ、それは工場法にも明記されてあることなんだ。然し、それは如何なる事情があつても、會社に損

害のかかった場合でも、それから差し引くことができない、性質の金なんだ。その金が本人退職後も尙會社に残つてゐるとすれば、明かに委託金横領ではないか、その金が支拂はれるのが、いつも最後の例だからつて、その金を受取ることに依つて、辭職を意味するなんて、そんな詭辯が、よくも人事係の君の口から吐けたもんだ。君の其論調と態度とが、今まで、労働者自身の金を、どんな必要があつても労働者へ返へさなかつた、と云ふ例を作つたまでのことだらう。君の其の論調でやられたのならば、今まで、一時の入用のために、自分の預金を引き出すために、どの位多くの労働者を、君は餓首したことになるだらう。此會社の積立金が若し、絲切齒のやうに、それをとると、命に關すると云ふのであつたなら、僕はわれ／＼の武器に訴へても、又は工場法に依つて、法に於ても戦ふ積りだ。

白水がその重々しい論調で、肋骨の間から、心臓を目がけて、雖でも刺すやうに話してると、相手の後明は、最初はいやに横柄振つて、虚勢を張つてゐたんだが、終ひには、怖ろしくなつたらしいんだ。

「然し、私は末だ、餓首するとも退職せよとも云ひはしないんですよ。たゞそれは例の無いこつた、今まではかう云ふ仕來りであつたと云つたまで、すよ」と、その千枚張の面の上に油をかけやがるんだ。

「それへ金額を書いた下さい、そして、その金額は向ふ三ヶ月間に分割して、収入から差引いて積立てますから、その積りてみて下さい」と抜かしやがつたんだ。

「何をこのむく犬め」と、白水はいきなり怒鳴りつけて、そこにあつた椅子を振り上げかけたが、切り株が止めた。

「へえ、ありがたうござえます。今さへ助かりや、後は三月で間違なく御返し致しますから」と、一方で白水を引つ張りながら、一方で後明に、承知をした上、御丁寧なお辭儀を一つしたんだ。

「へえ、何に、今の都合がつきや後は又、眞つ黒になつて稼ぎますから」と白水に云つたんだ。

その事件があつて後の白水は、會社側から甚しく忌み嫌はれた。そして白水の餓首が事務員から、重役の問題にまで進んだんだ。

この家屋浸水事件後、僕と白水その他の多數の兄弟たちが、A工場に對して、N市に於ける最初の大規模な應戰を試みて、全部が、見事に陣頭に倒れ、おまけに僕と白水と外に四人の兄弟が、その争議のため、牢獄の赤い煉瓦塀を潜ることになつたんだ。それは九月の末頃であつたらう。A工場の労働者たちは、切り株浸水事件の後に、白水が積善會の積立金の會計報告等が一切無いことを鳴らし、且つ工場法扶助規則や未成年労働者使用等、規則違反が多いこと等を表面の理由とし

「悪い例なら破つたらどうだと云ふんだ。舊來の陋習を破つたらどうだと云ふんだ。一切合切を前例を守つてゐたら、人間は未だに、人間の肉を食つて、生活しなければならぬんだ。未だ人間が人間の肉を食つてゐるんだが、それが無くなるためには、あらゆる舊來の陋習が破らるべきなんだ。殊に法律でさへ保證してゐるやうな範圍内にまで、労働者を搾取し劫略することは、明かに人間嗜食の一形式だ。白水は益々彼の錐を揉み込んで行つた。

「いや、君のやうに昂奮しちや困りますよ。さう云ふお氣の毒な事情ならお拂ひするやうにしませうが、何しろ前例の無いことですから、一度重役まで伺つて見なければなりません。今直ぐでなければいけないんですかね。」と白水に云つて、「オイ、どうだい、すぐ要るのかい」と、哀れな切り株に訊いた。

「勿論すぐです。今日はもう三日後になつてゐるんだから、後れてゐるんですぜ」

と、白水は、その切り株が慌て、へまな返事をする事とだらうと思つて、引き取つて答へた。

「それぢやお話して來ますから暫く待つて呉れ玉へ」と云ひ残して、バリカンで悪戯に毛を剪られたむく犬のやうな格好で、後明人事係は出て行つたんだ。

長いこと待たせて後明は歸つて來て、紙つ切れを渡して、

て、資本家階級の間、どんな策戰があるか探を入れ初めたんだ。N市は地方的に利己的な處であつた。そのために争議も、一種の地方色を持つてゐたのだが、僕等は、最初の日の示威運動が濟むと直ぐに警察へ引つ張られ、そのまゝ、未決監へ送られたので、争議の経過は、全て知らなかつたんだ。だが、僕等が警察へ檢束された翌日、ドシャ降りの雨の中を、A工場の兄弟達千人が、警察へ示威運動に來て、警察へ委員を送つて檢束の理由を聞く一方労働者軍は、雨の中でその響と和して〇〇歌を合唱して呉れた時は、僕等五人は中で思はず〇〇歌を合唱したんだ。そして、その日の夕方、その日の示威運動をリードした鈴木君が跣足で引つ張つて來られたんだ。

僕等は、警察から檢事局、檢事局から未決監、検審と、順を追ふて進むべき道を進んだんだ。そして、そこへ送られた五人の初犯囚は、警察の××べきでないと思つた如く、××××るべきでないことを又知るに至つたのであつた。その争議は、N市に永久に、無産者運動を据ゑつける基礎になつた。

そして、その刑を終へると、同志は夫れ夫れ袂を分つて、他の都會へ散つて行つたんだ。そして、僕だけはかうして船乗りになつてゐるんだ。白水は今どこで活動してゐたらうと、よく僕は思ふんだ。船に於ける戦闘は、陸上とは全然趣を異にすることが、此頃僕には分つて來初めた。僕等は、百人分

の米を作つて自分は飢え、千人分の布を織つて自分は凍えたり、大建築を建て、自分は行き仆れたり、するやうな労働者の地位を全く改め得るまでは、不斷の闘争が必要なんだ。そしてその時は必ず来るんだ。當然来るべき良きものを迎へないと云ふ法はない。我々はそれの来るまで迎へるんだ。」

「ストキはポケットから煙草をとり出して火をつけた。」

「波田君、僕の話がいや味になりやしなかつたかい。うんざりしちやつたらうね。」

「いや、面白かつた。僕は、君等が経験した監獄の話が聞き度いんだ。」

「監獄の？ 監獄の話は單調なものだ。單調無爲と云ふ苦痛だけさ。社會では、僕等の生命はそれを顧る暇のない程多忙に搾取され、その溝溜に投げ込まれるが、監獄では、たゞじつとそれを見詰めると云ふだけのものだ。」藤原は、靜にデツキへ出て行つた。

「さあ、それぢや、僕は晝食の仕度をしなきゃ」と云つて、波田は、コック部屋へと出て行つた。

デツキでは、藤原は、波除けに凭れて、荒涼たる本州北部の風光に見入つてゐた。

一四

わが萬壽丸は、三日間の道を歩んで、その十一時頃横濱港

「オーイ、これからサンパンを下すんだぞ」
恰も強い電波にでも打たれたやうに水夫達は此言葉に打たれた。

岩見武勇傳に出て来る鎮守の神——その正體は佛々である——の生贖として、白羽の矢を立てられはせぬかと、戦々兢兢たる娘、及び娘を持てる親たちの様な恐れと、哀れとを、水夫達は一樣に感じた。これは、夜横濱に着いたが最後必ず起る現象であつた。そして又、船長はいやでもおうでも夜横濱へつくやうに命令するのであつた。到着きさうな豫定のときだけが、その通りに入港した。その他は必ず夜着くやうに犬吠沖か、勝浦沖か彼女は散歩を強制せられるのであつた。

古今共に佛々が、出るためには、夜を選ぶのであつた。そして、悲しむべきことは、わが萬壽丸に岩見重太郎が乗り合せてゐないことであつた。十一時、サンパンは、その非常に危険な怒濤の中に卸されなければならなかつた。二人の漕手が、水夫の中から掴み出されなければならなかつた。

此漕手に白羽の矢が立つたのは、鯉船で鍛へ上げた三上と、純取の小倉とであつた。三上は低能であつた。小倉は大人しかつた。白羽の矢は、岩見武勇傳の場合と違つて、大抵二人に、恒例として當るのであつた。

二人の漕ぎ手は、一里餘の暗黒の海上を、サンパン止め——暴風雨にて港内通船危険につき港務課より一切の小舟通行

外へ假泊する筈だつた。船は勝浦沖を通つた。浦賀沖を通つた。懸て横濱港の明るい灯が見え初めるであらう。

横濱は、水夫等、火夫等の乳房であつた。それを待ちあぐむ船員の心は、放免の前日に於ける囚人の心にも似てゐた。東京灣の波浪も、太平洋の餘波と合して高かつた。梅雨上りの、田舎道に藝の子が、踏みつぶさねば歩けない程出ると同じやうに、澤山出てゐる筈の帆船や漁船は一艘もゐなかつた。觀音崎の燈臺、浦賀、横須賀などの燈臺や燈火が痛さうに瞬いてゐるだけであつた。しけの匂が暗の中を漂つてゐた。落伍した雲の一團が全速力で追つかけてゐた。

それでも、もう本船が、酔つ拂ひのやうに動揺する、と云ふやうなことはなかつた。本牧の燈臺を眺めて、港口標光の前に眺めながら、わが萬壽丸は横濱港外に明朝検査までを假泊した。三千噸の重さと大きさとの、怪獸の唸りにも似た轟音と共に錨は投げられた。船はその動揺を止めた。

一時に一切が靜になつた。一切の昂奮と緊張とが、一時に沈靜した。

「一切は明日なんだ。明日は幸福と解放の一切なんだ」と誰かが安心したのでだ。

水夫等は、船首上甲板に立つてゐたが、錨が投げられると共に、その各々の巢へ飛び込み初めた。先頭の羽田がトラツプを下り切らぬ中に、ボースンは怒鳴つた。

を禁止する——の暴化を冒して、船長を日本波止場まで、『秘密』に送りつけねばならぬのであつた。

船長は、『秘密』で、上陸して、その家庭へ歸るのであつた。

そして、その翌朝、『秘密』に、ランチで本船へ歸つて、それから『公然』入港すると云ふ手順になつてゐたのである。

それ等の面倒で危険な、一人のために何にも關係のない、もう二人の人間の生命を、危険に向つて曝露する。この『秘密』の冒険で、船長は十時間、或はもつと少く八時間だけ、家庭に於ける人となり得るのであつた。

船長は、船長室で支度をしてゐた。彼は、彼の家庭について抱き得る、彼の思想を、此船に對する他のあらゆる思想と、全然區別してゐた。彼は、『秘密』の彼の上陸の前には、彼は、對内的にのみ、船長から、人間に變るのであつた。彼は何もかもが、一切合切、妻のこと、子供のこと、その他持ち切つてゐた。殊に、妻のことでは、彼は、『やきもち』をやいてゐたのであつた。

彼はトランクに種々のものを押し込んだ。そして又出した。そして溜息をついた。サンパンの準備は何だつてこんな手間取るんだ！ 分り切つたことぢやないか、一度や二度のことぢやあるまいし、チエツ！ だが、彼は、未だ催促については我慢してゐた。そして彼は自分の室を見廻した。

船内に於て一番奇麗な、廣い、凝つた、便利な室ではあつ

た。が、彼にとつてそれは、ビール箱の内側であつた。それは些も愉快なものではなかつた。それは乾いた荒席のやうに、彼の神経を埃つぽく、もやもやさせた。

ポイーがコーヒーを持つて来た。

「未だ、仕度は能きないか、ポースンを呼べ！」と彼は、ポイーに命じた。そして、ポイーに對しても腹を立てた。「チョツ！ こんな氣の抜けたコーヒーを持つて来やがつて、コーヒーの保存法も知らないんだ、奴等は」彼は、煮えつくやうなコーヒーに喉を露した。

「ソイツと、出し抜けに、俺は歸らなきやならん。自動車は家へ知れない位の處で、歸してしまはなくちや、そして……」船長は、絶えず妻にやきもちを焼いた。そして、彼も、それほど妻を愛してはみないことを、誇示する積りで寄港地毎に遊廓に行つた。そこではよく、水夫と一つ女を買ひ當てたものだ！

それは、全く面白い、滑稽な、喜劇的一幕を演ずるのだが、今は、サンパンが用意されやうとしてゐる。

一五

水夫等は、ともの、三番のウキンチに二人ついた。ポートデツキに二人、各々のロープについた。そして波田は、サンパンに乗つた。それをタラツプまで廻航するためであつた。

の緒の如き役を努めてゐた綱は今一方外され、どちらも延ばされた。波田はすぐに、船首の方の綱をも、うまく外すことができた。そして、傳馬は、今や、本船と完全に獨立した小舟になつた。と同時に、傳馬は、既に十間餘り押し流されてゐた。そしてそれは、盆の中で選り分けられる小豆のやうに、ころ／＼した。

波田は、櫓を入れた。船は、眞つ黒い岩か何かのやうに、そこにどつしりしてゐた。そして、彼の小舟は忙しく轉んだ。寂しい氣持であつた。彼は全身の力を籠めて、櫓を押しした。船のともを廻らうとした時、傳馬は仲々その頭を、どちらへも振り向けやうとしなかつた。一目散に逃げて行く犬の子のやうに、無暗に風に流されやうとして、波田に反抗した。けれども彼の總身の努力は、その體に一杯の汗となつて滲み出たやうに、傳馬の頭をやうやく風上に向けることが出来た。が、ともすればそれは横に吹き流されさうであつた。

彼が傳馬をタラツプにつけた時は、その體中は洗つたやうに汗になつてゐた。波を削る風はナイフのやうに鋭かつたが、それが、快く彼の頬を吹いた。彼は直ぐおもてへ入つて汗を拭いた。

おもてへは、みな歸つて、船長が歸ることについて、ものうささうに、一言か二言づゝ批評を加へてゐた。

三上と小倉とは、體中を合羽にくるんですっかり仕度が出

可哀さうなドンキーは、また機關室へ入つて、蒸汽をウキンチへ送らねばならなかつた。火夫も火口に待つてゐねばならなかつた。

綱は少し宛繰り延べられた。それは板の上へ卸されるのであるならば、サンパンにかゝつてゐる鉤を、綱が緩んだ時に外しさへすれば、サンパンはそこに立派に座つてゐるのだが、それが波——ことにその夜の如く、大きく鼓動してゐる時——に向つて卸される場合は、非常に困難であつた。波の絶頂に上つた時に、一方の鉤だけを外すならば次の瞬間には、そのサンパンは鮭のやうに吊るされてゐるだらう。それが、波の最低部にまで卸されることは、不可能であつた。鉤が外れるであらう。もし鉤が外れなければ、本船のどつ腹へその頭か、又はひよわいその腹を打つ衝けて、碎けてしまふだらう。

ポートデツキで綱の操作をしてゐる二人の水夫も、傳馬の中にあつて、確かり、鉤の外れないやうに握つた、波田も字義通りに『一生懸命』であつた。波は、本船の船腹を蛇の泳ぐやうに、最高と最低との差を三間位に、うねりくねつてゐた。

今、傳馬は波の斜面に乗つた。波田はともの鉤を外した。と其時に、『スライキ、スライキ、レツコ』と怒鳴つた。延せ、延せ、打つ捨れ』と云ふ意味である。傳馬への本船からの聲來てゐた。

「オーイ、行くぞーつ」と、當番のコーターマスターがブリツヂから怒鳴つた。

「ヂヤ頼みます。御苦勞様、願ひます」と残る者は二人に云ひながら、タラツプまで見送つた。

二人の船頭さんは、船長の私用のために、船長の二倍だけの冒險をしなければならなかつた。

船長はポイーに導かれてタラツプ口へ出て來た。

彼が何かを入れたり、出して見たりしてゐたトランクを、ポイーは宛ら貴重品でもあるかのやうに、勿體らしく持つてゐた。

船長は、やきもちをやきながら、ローマの凱旋將軍シーザーの如くにサンパンに乗り移つた。

船長以外の總ての者は、鉛のやうに重い鈍い心に押さへつけられた。傳馬の纜は解かれた。とすぐに、それは、流された。眞つ暗な闇の中に、小さなカンテラが一つボンヤリ見えた。その側から、小倉と三上との聲で、エンヤヨイヤ、エンヤヨイヤ、と聞えて來るのだつた。

水夫たちは、おもてへ歸つた。そして船長を送り届けてサンパンの歸るまでは、眠つてもよいのであつた。けれども、誰も黙つて、ベンチへ並んで腰を下して、狐につまゝれでもしたやうにボンヤリしてゐた。

過度労働のために、水夫たちは、無抵抗的に催眠されてゐた。そしてそこには死のやうな倦怠以外に何もなかつた。一切の望を失つた無期囚徒のやうに、習慣的であり、機械的であつた。云はゞへし折られた腕か何ぞのやうにだらりとしてゐた。時々誰かの神経が少し覺めると、そこには其神経を待つてゐた多くの不快な刺戟が、それをムズムズと探るのだつた。それは風の食ふやうな、又は蚊がうるさく耳の側で泣くやうな、そんなけちな、そのくせどうにもいやで堪らない、下らない事柄許りが待ち構へてゐるのだつた。そして、この船室全體の構造と、彼等が一樣に抱かされる共通な基本的な感じとは、倦怠に蝕れ切つた囚人が、矢張り、ボンヤリ高い窓を睨めて、その馴れ切つた倦怠と無感覺とを、鈍く感じてゐるとよく似てゐた。

船員たちは、こんなことが『労働』だと思つてはゐなかつた。彼等は、自分が寝るも起るも賃銀労働者であることは知つてゐた。けれども、それを絶えず意識の中にしつかり、握り詰めてゐる譯には行かなかつた。殊に其労働場が船であつたために、彼等は一軒の家に住んでゐる様に心得がちなのであつた。彼等は、えて、自分に課せられる不當な労働、支拂はれない労働を、ついうつかり、『つとめ』だと思ひ込んでしまふことが多かつた。

「一つ釜の飯を食つてゐるんだから」と水夫達は思つて、我慢

「あの灯の邊が俺の家だ」と、乗つて二十分位の間は、思つてゐた。處が、いつまで経つても港口が近づかなかつた。然し、眞暗闇であつたが、櫓の音も、二人の鼻息も凄じい風の音を破つて彼にまでも聞えるのであつた。

傳馬は、仙臺沖の鯉舟で鍛ひ上げた三上がともを押して、小倉が日本海隠岐で鍛へた腕で、わきを押した。

然し、彼等は二人とも、本船を離れるが早いか、これは難かしいと直感したのであつた。櫓は、振り廻す鞭のやうにしはつても、傳馬は、港口から、流れ出る潮流に押し流されて、些も進まないものであつた。で、彼れ等は、港口までは、逆流を利用しやうと決心した。そこで、船首を本船の方へ向けた。傳馬は進んだ。然し、それは激流を横ぎるやうな作用と共に進んだのであつた。彼等は、本船を離れて三十分も立つた頃、どこに本船があるかを、片方の手で額の汗を拭ひながら探して見た。

本船は、黒く、小さく、港口の方に見えた。彼等は流されつゝあることを知つた。然し、彼等は、彼等の持つてゐる最大の力以上は出せなかつた。その上彼等は三十分全力を盡したのだ。彼等は、その潮流と、その風とに到底打ち克つことができないと云ふことを覺ると、ぐつとその能率を引き下げた。そして、流れない程度にだけ押して、再び船首を横には向けなかつた。

してゐるのだつた。そして、それは、ともの連中、メイツ達をして、最上、最強の鞭にしてしまはせた。彼等は外のどんな手段で、その『瘠馬』共が、拗ねて頑張る時は、そのとつときの鞭を一つ食らはせれば、それで萬事はいいのだつた。

その中に、一人づつ、その寢箱の中へ嵌りに行つた。どうしても、船長を送つた傳馬は、二時半か三時、でなければ、早くても歸らないんだ。このしめては、いつまでも歸らないかも知れないのだ。大體餘り、船長も家を戀しがりすぎるのだ！

「あゝあ、人間がいやになつたわい」と西澤は、一番奥の彼の巢から唸つた。

「どうだ、種馬になつたら」と、波田が混ぜつかへして、そのまゝ、死のやうな倦怠へと、一切は吸ひ込まれてしまつた。船長は、その家へ歸つたが、負傷に呻いてゐるボーイ長は箱の中に、荷造りされたやうに寝てゐた。

一六

本船を離れた傳馬は、その航海に本船が經驗した、より以上の難航であつた。港口は、すぐそのやうに見えた。けれども、小倉と三上との腕の牙えにも拘はらず、全て港口に近づかうとはしなかつた。船長はじれ切つてゐた。

一切の物がその息を潜め、その眼を瞑つてゐる。その時に、その何物も見得ない暗の中で、懸命に波浪と潮流とに對抗することは、その運命を、牢獄内に朽ちしめるやうに決定された、無期徒刑囚のやうな神経になり終はせた彼等であつても、なし得ない辛抱であつた。

殊にそれは、此闇の中に、ボンヤリ座つて時々、「シツカリしないか」とだけ怒鳴る船長の、利己心からのみ起つた一切だ、と云ふ感じが、いつの間にか、闇が産みつけてもしたやうに、二人の胸の中に食ひ入つてゐたのであつた。

今は、二人の漕ぎ手は、その櫓に對しての意識の集中を斷念して、船長と稱する不可解な、その曖昧な、暗黒な形相をしてゐて、サンパンの中に座つてゐる、この生物に對して、「何故俺達は、こんなに苦しまねばならないのだ」と云ふ考への周圍をさまよひ初めたのであつた。

それは、誰も見てゐないし、聞いてゐないし、感ずることもできない、全く暗黒な闇の中であつた。そこにはどんな叫聲をも一呑みにする嵐と潮の叫喚があつた。そこには、何物をも洗ひ流す處の急流があつた。そこには人間を骨ごと食つてしまふ鱗があるものであつた。

「そして、あいつは、たつた一人だ。おまけに、あいつの腕の五本ぶり、俺の腕はある、あいつを五人掲げることが、俺は平氣だ！ だのに……」

獲物の廻りにわざと遊びたはむれて、仲々飛びつかうとせぬ狼のやうに三上は、その考への廻りをウロウロしてゐた。小倉も同じやうな考へを別な方から嗅いでゐた。飢餓がある。疾病がある。不具がある。負傷がある。そしてそれ等の總てが死へ行く道になつてゐる。彼は此道をブルジョアによつて、他の無数の労働者と一緒に追はれてゐる。それを追つて来るのは少數だ。追はれてゐるのはそれ等の幾千倍も幾萬倍もあるのに、その多くの労働者の群には、牙を剝いて自分の後を振り向かうとする、たつた一人の仲間さへもないのだ。労働者は、鹽にあつた蟪蛄だ。それは譯なく溶けてしまふんだ。たゞ一人の労働者、それが十人に一人、十萬人に一人もないのだ。それで、それでこそ、人間は、大量生産的に××され得るのだ。人間は自分のためには死ねないんだ。人間は、命令を好むものだ。命令の下には總ての人間が死に得るが、自分からは一人の人間も、よく自分を殺し得ないものだ。一人の人間が、生きてゐたために、何十萬の死んだ例がなかつたやうか。全世界の歴史が、此有難からぬ、或は有難い處の人間性の弱點によつて、血で染め上げられ、肉で書かれたのではなからうか。奴隷の歴史を讀んで、その主人の暴虐に憤る前に、人は、その奴隷の無智と、無活氣なるを慨かないだらうか。われ等、賃銀労働者も、奴隷のやうに、農奴のやうに、われ等の子孫をして拳を握らしめなないであらう

すれば自分が負けに極つてゐるのだつた。彼は明日を待つことにした。

「何だと！ 覚えて居れ？ 此野郎！ 手前は何だつて……今日の暴化がサンバン止めになつてゐる事位を知らないか、此野郎、手前を海の中に叩き落すのは難作ねえんだぞ、どこひよつとこ奴！」三上は漕ぐ手を止めてしまつた。

三上は、低能だと云はれてゐた。彼には種んな發作的の行動があるのだ。船長は、それを知つてゐた。それでいぢけ込んでしまつた。馬鹿に相手になつて此暗い海へほんとに叩き込まれたら、全くそれ切りだつてことは、充分に船長も知つてゐた。

「三上、さう怒るものぢやない。え、濱につけば、氣に入るやうにしてやるから怒らずに、一生懸命やつてくれ、え」「着けば『分る』んだね。よし來た」仙臺は又、ぼつ／＼と櫓を押し初めた。

小倉は、おかしかつた。「着けば分る！」三上の野郎首を切られるのが分るだらう、馬鹿野郎奴！ 接角面白ところまで筋が運んだと思つたら『分る』で済ましちまやがつた。フ、これが『労働者』なんだ。誰にでも、たつた一言で奇麗に欺されちまうんだ。これだから、人間の歴史がいつても、齒痒くて癢に障つて堪らないんだ。あ、分る、分る、全く一切がよく分る。

か。それは、人間の力を以ては、意思の力を以てしては、い

かんともし難い處のものであるか。俺が、人類の歴史を見て泣くやうに、俺は又泣かねばならぬ歴史を、書き足しつゝあるのだ。俺は、そう云ふ汚れた歴史に邪魔者として入ることは、今まで能きたのだ。又今でも出来るのだ。だが、それは能きない處に、人類の歴史が汚されるやうな大きな結果が持ち上るのだ。だが、血と肉とて積み上げられた歴史は、その生贖が甚しかつたやうに、それ丈け美しい花が咲くんだ。歴史が行く道を俺はついて行き、その歴史の櫓を押しばいゝのだ。

「おい！ 傳馬はどん／＼流れつちまふぢやないか、どうしたんだい。」

「船長！ 引き汐だから、いくら押しても駄目だ。港口まで行きやあ、又流れつちまふ丈けのものだ。それよりや上げ潮を待つた方がいいや。」三上は未だ獲物の側にでもゐるやうに薄氣味悪く、ぞんざいな言葉を使つた。

「馬鹿なことを云ふな！ 夜が明けちまふぢやないか、しつかり押せ！」

「自分でやつて見るといいや、これ以上俺達の腕にや合はねえんだから」三上は愈々打つつけるやうに云ひ切つた。

「何だ！ やらないと云ふのか！ よし！ 覚えて居れ！」船長も仕方がなかつた。こんな眞つ暗がりの海の上で喧嘩を

然し全く、心細い『航海』ではあつた。海はすぐその足の下で唸つてゐた。嘩んでゐた。そしてその體をやけに揺ぶつてゐた。

三上と、小倉とは、その生活の大部分がさうであると同じに、今もたゞ機械的に働いてゐるに過ぎなかつた。けれど、彼等は、恐ろしく磨滅して來た。所謂『焼けて』來たのであつた。彼等は充分に營養を採つてゐる譯ではなかつたので、機械の油が切れて直ぐ焼けて來るやうに、彼等の肉體も焼け初めたのであつた。彼等は、殊に小倉は三上よりも體力が非常に劣つてゐたので、肩から背へかけた部分、大腿骨の部分などに、熱を感じて來たのであつた。それと共に、二人とも、非常な『たるさ』と、力の衰へることを感じた。彼等は、まゝよ、なるやうになれ！」と覺悟を決めてしまつた。

船長も、今は強壓的に、頭ごなしにやつつける譯に行かなかつた。勿論彼は、その精銳なるピストルは本船に置いて來たのであつた。このために彼は、幾分かその臆病さの度が募つたのであつたが、何しろ、彼は、たゞ一人であつた。その權力——與へられたる——を保證し、それを暴力化せしめる處の背景が、全然、今、彼に與へられてゐなかつたのだ。「力が一切を決定するのだ。民衆は、今恐ろしい勢で力を得つゝあるのだ。力が正しく働くか、力が悪く働くか、力が搾取的に働くか、力が共存的に働くか、によつて、人類が幸福

であるか不幸であるか、慘虐であるか、平和であるかに分れるんだ。」

小倉は、船内に於て最大、最高の、公、私、孰れにも互る權力の所有者である船長が、その一切の暴力的背景を置き忘れて来たために、此短時間の間に、五倍の太さの腕を有する三上の一喝の下に、縮み上らねばならぬと云ふ喜劇を見た。そして、そこに曝露されたる××の正體を見た。

「俺達が力を個々には持つてゐても、それが組織されてゐない、訓練されてゐない、と云ふ處に一切の敗因が巢食つてゐるのだ！」小倉は、それが個々に露頭の突き合つた面白さから、後から、後からと、それについての考が、湧き出て来るのだつた。

「だが、俺達は、今、此の萬壽丸の状態で、労働者の個々の力を組織することが能きるだらうか、發作的な、衝動的な、同志打的な暴力の發動は、俺達の仲間にある。××××××××は俺達の上にあるのだ。俺達は、充分に組織された暴力を以て傷けられる上に、未だ足りないで、自分自身の暴力まで用ひて、自分を傷けるんだ。」

小さな傳馬は、その危険なる海上を、その暗黒の中に、船長の地位も權力をも完全に蹂躪して、全て冗談のやうに、クルリクルリと揺れて、一つ處に辛うじて漂ひ得てゐた。船長は、龜の子のやうに首を縮めてゐた。そして、質に於

ことは、根絶しなければならぬ。いや、全く法律が不完全だ。」

船長は、變つた解雇方法で三上を苛めてやらうと決心した。

一七

潮は今、引き潮の最頂點に達した。萬壽丸の傳馬も、三上と、小倉との經濟速力を以て、港口へ近づき初めた。

十一時に卸された傳馬は、今、十二時半まで、眞つ黑暗の中に、吸ひつかれてもした様に一つ處に止まつてゐただつた。

日本波止場まで一時間ばかりなのであつた。

小倉は勘定してゐた。「一時半について、それから三時に船に歸つて、三時半に傳馬を巻き上げて、四時から、俺はワツチだ。チエツ！ 畜生！ 此處で、此儘へたばつて眠た方が氣が利いてらあ、畜生！」

三上は、此時頗るお目出度い、が然し實際的な、そして架空的な、突飛な計畫を立てゝゐた。そして、その計畫は、船長が『分る』やうにして呉れれば、やらずに済むのであつたが、若し、俺を欺してもしたら、構はないから、やつてやらうとした、復讐的な意味をも含んだ處のものであつた。

ても量に於ても、小倉と三上との二人分よりも澤山着込んでゐるのに、寒さにふるえてゐた。そして、三上の一言に、未だその顔をほてらせながら、ギク／＼してゐた。そして今日の潮の長さを、頻りに續にさはつてゐた。

彼にとつては、三上が一秒間でも彼を侮辱したことは、三上の生涯を通じて所罰されるべきであり、その側に黙つて櫓を押しつゝた小倉も、その侮辱を聞いたと云ふ廉によつて、同罪であるべきであつた。そして、彼は、横濱碇泊中には、奴等が「何であるか」を思ひ知らせてやらねばならないと決心した。

「それにしても身の程を知らない、ゴロツキだ。一體此の頃の労働者は生意氣だつたり、小積だつたり、そうでなければ、仕方のないナラズ者のゴロツキだ。従順な性格を持つた奴は一人もありやしない。奴等を一人宛所罰するのは手間で堪らないことだ。労働者が、これほど生意氣になるのは、法律が餘り甘やかすすぎるからだ。十五世紀から十九世紀までも英國で行はれたやうな、労働立法を制定して、額に烙印を捺すのが一等だ。鞭で打つた、耳を半分切り取ることだ。終身奴隷とすることだ。首に鐵の環を嵌めることだ。」

船長は、三上が續に障つて堪らなかつた。それはあり得べからざることだ。想像だもつかないことなのだ。奴隷に等しいものが、どうも、これは甚だ面白くない現象だ、さう云ふ

三上はかう考へた。船長は俺を屹度女郎買ひにやつて呉れる積りに相違ない。船長だつて俺が上陸毎に女郎買ひに行くのは、知つてゐるのだから、それに今夜は、あんな風に云つてたんだから、きつと「サンバンは續つといて、泊つて明朝歸ればいゝ」サアと云つて十圓は出すだらう。そこで、小倉は女郎買ひには行かないに違ひないから、奴を宿屋か何かに投り込んで置いて、それから……と彼はうつつかり笑つた。

「若し、萬が一、そのまゝうつつちやらかしてゝも行きやがつたら、その時は、屹度やつてやるから」と、凄い目附を、闇に向つて光らせて、『見せた。』

三上は、變態性慾的と云ふか、或は不飽性性慾的と云ふか、又は、彼の肉體が立派な様に、従つてその性慾も、船員のやうな性的に不都合極る條件の下に置かれては、あらゆる機會を血眼で探し、それを溺れる者が、藥を搦むやうに、確りと搦むのであつた。彼は、その原始的教養の持ち主として、又、其性慾に關する奇行の創造者として、船内に於ける人氣者であつた。

彼が、若しその執拗さを今少し制御することが能きたならば、彼の人氣は、もう少し深い意味に於けるものになり得た筈であつたが、何を云ふにも、その拗さには誰でも參つてしまつた。そして、彼の此特徴は、彼が遊廊に行く時に、最もよ

く發揮された。

西澤は、三上と一緒に遊びに上つたものだが、それは、いくら西澤が逃げて隠れても、三上が後から、附いて行くことに原因したのだつた。そして、三上は、西澤の室の前に、腹ばひになつて、西澤の寝物語りをすつかり聞いたたりなどするのであつた。それは、何の爲であるかは誰にも分らない。たゞ、西澤は、「俺と一緒に上つた晩、かう云つたと云ふのだ。詰り、西澤が相手の女に向つて、『お前はどうかしてお女郎になるやうな身になつたんだ。いづれ、深い事情があるだらう。』と、聞いた處が、その女郎奴『わしのうちは、お父さんが百姓で貧乏だつた處へ、不作が三年續いて、地主に掬米が收められずに、苦しみ抜いた揚句、遂に私が身賣りをして、地主に義理を立てることになつたの』と云つたんだ。そして、その女奴鼻聲になつて、『世の中に義理程辛いものはないわ』と云つたんだ。』

此話は三上の直接の、彼自身だけに關する露骨な淫猥な話よりも、聽衆に受けがよかつた。で水夫達は、西澤が全力を擧げて混ぜつかへすにも拘らず、三上を煽て上げて、その陸言の全部を繰返させた。

「さうすると、西澤のご助平奴、何と云ふかと思つたら『や、義理程辛いものは全くない。そして、その辛い義理を守るのには貧乏人許りだ。義理を守るから貧乏にもなるんだ。私の家

經驗を舐めて來てゐる。そして、小倉などは、一村の運命を擔つて志を立てやうとしてゐた。地理的に云つても、社會的に云つても、海は最も低い處で、そこへ流れて來た『人間の屑』共は、現社會の一切の呪を引き受けて、來てゐるやうに見えた。

女郎買をすることは、船員の常習であると云はれてゐた。殊に下級海員は、そのために、全收入を蕩盡するのだと、社會は例外なく考へてゐる。そして、それは、多くの場合事實である。が、それがどうしたと云ふのだ。

彼等も女郎買をしたくはないのだ。愛人が必要なのだ。だが、今の社會で口の開いた靴を履いて、油だらけの葉つ葉服を着て、足の踵のやうに堅い手の皮を持つた、金をその癖持つてゐない、『海坊主』を、誰れが一體相手になつて呉れるんだ！ いつ海の藻屑と消えるか、いつ片手を撈ぎ取られるか、いつ、遠洋航路につくか分らない、無細工な『海坊主』共を、どこの『娘』が相手になるか。

ブルジョア共は、その娘をダンスホールへ陳列し、プロレタリアの娘を、監獄のよりも高い煉瓦塀の取り繞らされた、工場の中に吸ひ込んでしまつて、その中の上出来なのを、自分等の玩弄物なる『妾』にしてしまふんだ。

ブルジョア共は、人間を、自分たちを除いた一切の人間たちを、字義通りの『馬車馬』的質銀奴隷にし度いと云ふ、本

も貧乏で、丁度お前さん位の妹がある。その妹も、矢張りお前さんの様に、この辛い商賣をして、私と一緒に信州の親達に仕送つてゐるんだ。私は妹からのたよりで、お前さんたちが、どんなに辛い境界を送つてゐるかよく知つてゐる。ま、年の明けるまで辛抱なさいね。決して短氣を起したりなんかしないでね』つてやがるんだ。畜生！ 馬鹿にしてやがらあ、そしたら女の奴しく泣きながら『あんたのやうによく物の分つた、親切な人はありやしない。妾は、あなたが妾の兄さんのやうな氣がする』と云ひながら、何かしてゐて後は聞えなかつたが、今度は、西澤奴、『俺もお前が、私の妹のやうに思へてならない』つてやがるんだ。それからもうほんのゴソ／＼話になつて分らんから、俺は障子に、指に唾をつけて、穴を開けて覗いてやつたんだ。そうしたらお前」と、三上一流の頭腦に映じた、その場の情景を、全く蔽ふところなく、すつかり、さすがの西澤も居堪れない程の、描寫を以て、そこに再現してしまつた。そして最後に、『よく／＼こいつには妹が澤山あつて、方々で女郎をしてやがるんだ。そして又、妹のやうに感じる女とどうして、奴はあゝ云ふことが能きなんだらう。ご助平奴だよあいつは』とつけ加へたのであつた。そして、此點に關しては三上の云ふことは眞實であつた。

わが兄弟たちは、船乗りになるまでに非常に多くの苦しい

能的な慾求を持つてゐるんだ。

そして、労働者は、生きたまゝ、何萬馬力の電動機に依つて運轉されてゐる『挽肉器』の中へと、スクルーコムペーヤで運び込まれるのだ。

かうして、質銀奴隷は最後まで、人間であり度いと云ふ希望と努力を挽き碎かれて、無機物か何そのやうに、ブルジョア文化の路傍へ投げ出されるんだ。そして、それは、ブルジョア道路を永久的にするためのコンクリート中の一石塊となつて、永久に、道路の一部をなすやうに、計畫されてゐるのだ。

だが、今はもうその計畫通りには行かないだらう！ われ等に教育がないと云ふことは、我等から、教育の機會を掠奪した奴等に責任はあるが、奴等に責任を負はせたとつてそれで、労働階級がどうなるんだ。今、我等自身で我等を教育するんだ。今、我等は、すべてを自分の手でやつて見せようと思氣込んでゐるんだ。我等を教へ我等を導き、我等の理想を作り、我等の戰術を考へ、我等の道徳を定め、人類共同の社會を建設する。それ等は皆、われ等自身でやるんだ。そしてわれ等とは、總て額に汗して働くものゝことだ！

一八

傳馬は亡つた。そして船長は寒くて、二人は汗まみれにな

つて、日本波止場へついた。
船長は、飛び上った。トランクも投げ上げられた。
小倉は、纜綱を波止場に纏った。そして二人ともその浮波止場に飛び上った。

船長は、未だ充分その権力が裏づけられてゐなかつた。船長は、ポケットから、その金時計を出して、機械マツチで今が一時四十分であることを知った。彼は自動車で十五分、二時には家へ歸りつける。で早く、『此の油断のならないナラズ者』共を、本船へ歸してやらねばならなかつた。

彼はポケットから、五十錢銀貨を二枚掴み出して、それが確に二枚であることを知つて、それを、小倉に渡した。

「蕎麥でも食つたら直ぐ歸れよ！ 晩くならんやうに」そう云ふと彼は、そのまゝトランクを持つてスタスタ歩き初めた。

「船長！」と三上は、思はず叫んだ。

船長はビツクリした。危くトランクを取り落さうとした程に立ち塞がった。

「どうしたんだ。分らねえや」三上は唾むやうに怒鳴つた。

小倉は、靜に、黙つて、成り行きを見てゐた。「俺は此場合すべき事を知つてゐるんだ。ものは初まつてからでなければ濟むものではない。だが、それは未だ初まつてゐないん

だ！」

「小倉に金を渡しといたから、あれで何か食べて歸れ！」船長は、自分の立つてゐる處が、未だ波止場であることは、非常に形勢を不利にすると、考へてゐた。——逃げるには逃げられぬわい——

三上は、黙つて、船長の前に突立つてゐたが、躓て、身を引いた。

船長はホツとしながら歩きかけた。三上は又突然その前へ行つて立ち塞がった。

——今度は何か起る——と、船長も、小倉も突嗟に感じた。三上は萬壽丸で、一番強力だつた。横痃のはじけさうな時でも、二人分の力持ちを、平氣でやつた男だ。

「忘れちやゐないね」と三上は唸つた。

「あ、さうか、さうか」と、船長は云つて、又ポケットへ手を突つ込んだ。そしてガザ／＼慌てながら、又五十錢銀貨を二枚掴み出した。「スツカリ忘れてた」

「未だ忘れてるよ。」三上は押つかぶせるやうに云つた。
船長は、五十錢玉を二つ掴んだまゝ、ブル／＼震へながら、そこへ突つ立つてゐた。早く歸りたいのになあ。チエツ！

「いくら要るんだね」遂々船長は胡魔化し切れなくなつて訊いた。

「十圓」三上は答へた。

「十圓！」船長は、すつかり驚いた。二圓出したことが彼にとつては、迎も思ひ切つた奮發だつたのに。三上は十圓を要求するのである。

「それや明日でよかないか」船長は明日は一切を解決することを知つてゐた。

「明日は明日だ。」と云つたが、三上の心中には、今、口から出した位では、とてもはけ切れぬ激怒の情が、その全身の中に爆發した。

「今夜歸れば途中で凍えるわい！」と、彼は、船長の頭の上から、ハマーでも打ち下したやうに怒鳴りつけた。

「手前は歸つて婢と寝る！ 俺達や歸りに凍えるわい！ 此汗を見ろ！」

暗に見えなかつたが、二人は外は波沫にかゝつて濡れ、内は汗で濡れ、乾いた處は、その衣類にも皮膚にもなかつた。彼等はそのまゝ、歸ると云ふことが不可能であることは、最初から感じた處であつた。その合羽は勿論、その仕事着さへもバリバリと凍つてゐたのである。

船長は十圓に非常な執着を感じたが、それよりも彼は矢張り、其の命の方に團扇を上げた。彼は内ポケットから、十圓札を出して三上に渡した。そして、何か云はうとしたが、ハツト口を噤んだ。

そして、彼はそのまま、波止場を出て、車の帳場へ行つた。

彼はそのまま、警察へ電話をかけやうとして又止めた。今夜かけると、俺は家で寝るわけには行かなくなる。それに俺は今夜は上陸してはならない筈なんだ。それは胡魔化しはついても、兎に角、今夜は家へ！

俥の帳場は、同時に自動車屋を兼ねてゐた。船長は、自動車によつて、その家へと宙を飛んで歸つた。そして、途中の計畫をすつかり忘れて、自分の家の前まで自動車を乗りつけてしまつた。

彼は、暖い家庭の人となつた。妻は、彼が遅くなつた事情は、「水夫の一人で三上と云ふ悪黨がワザとそうしたのであつて、おまけに主人から十二圓を強奪した。そのために主人は一時身が危険であつた。主人は、いつても、家から出て行くくと、全て、強盜殺人の中へシヨンポリ置かれてゐるやうなものだ」と思ひ込んでしまつた。その癖彼女は、いつも今まで主人の口から「俺は船中で一番えらい地位を持つてゐて、船員ならどんな奴でもフン縛ることまで能きなんだ。それで船では俺は、云はゞ陸で云ふ王様のやうなものだ！ 俺は自由な手足のやうに船員を使ふんだ。そして俺がゐないと、あの大きな汽船が、全て動くことができないんだ。兎まれ、萬壽丸では王様だ」と聞いてゐたのだ。で、今は、そのどちら

でもあるのだらう。「船の中には、まともな人間としては主人だけだらう。後はナラズ者が揃つてゐるのだらう」と考へた。

二人は床の中で夜の明けるまで話した。

一九

三上と小倉は、水から這ひ上つた犬のやうな格好で、サンパン小屋の前へ行つた。そこは、ルンペンプロレタリアがサンパン押しとして、虱のやうに、ウヨ／＼小さな家の中に詰り込まれてゐた。そこは、晝も夜もなかつた。そこに集つてゐる者は總てが、永劫の昔から、無限の未來まで、そこで寝轉んでゐると云ふやうな感じを與へた。彼等は、あらゆる悪徳と、自暴自棄と、そうして飢餓との頂點から、いつても、決して離れたことが無かつた。

死にかけた犬にも蚤やだにがついてゐるやうに、飢えたる彼等の周囲にも、飢えた小賣商人が大福餅や巴焼などを、これも殆んど時なしに賣つてゐるのであつた。

その夜は、それ等の夜店も見えなかつた。

三上と、小倉とは、その凍寒と、飢餓とから逃れるために、旅屋か、飲食店を探さねばならなかつた。彼等は、夫れ以上、寒さにも飢えにも堪へ切れないやうに感じた。彼等は、そのよく知つた地理によつて、夜晩くまで、或は徹夜で

も營業する飲食店が、どの邊にあるだらうとの見當はついてゐた。

それは彼等が今彷徨つてゐる海岸附近か、でなければ遊廓の附近であつた。

彼等は、大通りに出た。そして十五六間も歩いた時、その横丁に港町獨特の飲食店が未だ起きてゐるのを見出した。二人は直ぐ、そこに入つた。二人の異様な風態も、その凍えた濡れたところなども港町の飲食店は馴れてゐた。幸に、二人は、その一室へ、そのズブ濡れの靴を脱ぎ、その着物を乾かし得ることになつた。二十七八になる女中が直ぐに火鉢へ火を入れて持つて來た。

「どうしたの、ちよいと、今頃、今入港したの！ そうぢやない？ まあ！ 随分濡れてゐね。若いからよ、ホ、ホ、ホ、脱いで乾かしなさいな。ね、着物を持つて來て上げるわ、泊つてくんでしよう。勿論だわね。ホホ、ホ、ホ、」

彼女は今までの親切からのやうにそう云つた。そして、下へ降りて行つた。どてらでも持つて來るのらしかつた。

三上は勿論喜んだ。そして彼は勿論泊る氣であつた。小倉も一人で歸るわけには行かなかつた。それに彼は三上の今夜の事件を、どう云ふ風に處置をつけるか、考へねばならなかつた。——船長は明朝になつたら、三上を懲戒下船命令を發して、一年間或は三年間位は乗船不可能にしてしまふだらう。

それ丈でなく、それ丈で済めばいいが、事によると、恐喝取財位で告訴するだらう。これ等に就いても自分としては何とか考を纏めて置かなければならない。それに兎も角、こんなズブ濡れのガツ／＼の飢えでは仕様がな。そこで、二人は腹を拵へることを考へた。

「姐さん、晩くなつて濟まないがね、若し出來たらすきやきがやり度いんだがね。寒いんだから、すきやきてないと迎も暖らないからね」と小倉は注文した。

「え、出來るわ、きつと、あなたの事だから。ホホ、お銚子は？」と立ちながら、彼女は聞いた。

「酒を持つて來るんだ」三上が受けた。

「ホホ、一切合財皆勿論、——だわね」と唄にしながら、下へ注文を通しに下りて行つた。

二人は、どてらに着換へて、その着てたもの全部を、柱にかけた。

彼等は人が戀しかつた。殊に女が戀しかつた。どんな動機からであらうとも、彼等に優しい言葉をかけて呉れる女性は、此地上に、若し生きてゐれば其母か姉妹だけであつた。

けれども、彼等は、それ等を全て失つてしまつてゐたか、全で知らなかつたか、又は、それを遙に遠くへ残して來てゐるのであつた。

優しい女性！ それは、彼等には、何物よりも貴い寶玉で

あつた。一切の歴史から、虐げられて來た、哀れな弱い女性！ 彼等が反抗する必要のない、彼等によつてまでも愛護されなければならぬ、虐げられたる女性、それは、虐げられ苛まれて來た勞働階級と、よく似た運命を持つてゐた。

彼等は女性を慕つた。そして、それが娼婦と賣淫婦とに限られてあつた。女の中でも最も弱い階級と、男の中で最も虐げられた階級との間には、ブルジョアがそれ等に對する時と違つて、どこかに共通な打ち解けた點があつた。それは共同の敵を持つてゐる味方同志であつた。

表面的の關係は買ひ、賣つた、ことになつても、彼等に極めて僅に残された人間性が、それを、人間的に引き戻す機會もあり得た。そして彼等は、どちらも、プロレタリアであつた。

荒みに荒んだ心に、落ちる一滴の涙は、どんなに悲しいものであるか。

女は臙で牛肉を鉢に並べて持つて來た。そしてその後から今一人若い二十二三の女中がお酌のついた銚子を持つて入つて來た。

女が居たり、酒があると云ふことは三上を有頂天にした。彼は一人て頻りに飲んだ。女たちにも強ひた。少しは彼女等も飲んだ。

「どうしてあなたは少しも飲まないの」と、若い方が、小

倉に凭れかゝりながら聞いた。
「その代り食つてらう。」

「だつて、私たちも頂いてるんですもの。少しは飲むものよ、男つてものは、ね。」

彼女は小倉が生真面目で、肉許り食つてのを見て、少し陽気にしてやらうと考へたらしいのだつた。

「ところが、僕は酒が飲めないんだ。船のりらしくもないだらう。でも矢つ張り飲めないんだ。蟲が嫌ひと云ふんだらうね。」と云ひながら、小倉は肉や葱などをつきながら、頭は縦ひつ放しの傳馬のこと、三上對船長との未解決のままの問題との方へ許り向いてみた。

「彼は、三上が、頻りに女をからかつたり、例の變態的な性格で厭がらせたりしながらも、小倉の方に時々探るやうな眼を注ぐのに氣がつかないのだつた。」

三上は、矢張り、船長との一件で小倉の意見が聞き度かつたのであつたが、それよりも、彼は、その場の喜び、形式だけであるかも知れない、事實それに違ひない處のその淺い喜び、殆んど通常の陸上の人から考へると嘔吐を催すかも知れない、その女たちの風體、態度、その他一切の條件にも拘らず、それを、長い間そのために一切を捨て、探ねあぐんだ冒険者が、金鑛でも發見したかのやうに、其喜び、その樂から、一步も足を踏み外し度くなかつた。實際三上は、若し、ほんと

なつたのである。

三上は小倉を盗み見しては飲み、且つ、その年増の女を捕へて、悪冗山戯してゐた。が、小倉は黙つて食つてゐた。小倉の相手の女はとりつき端がなく、困つてゐた。三上が便所に立つて、相手の女も續いて案内に立つた後で、小倉の側にゐた若い女は、「どうしてあんたはそんなに黙つてるの。何か面白くないことがあつて？ も一人の人はあんなにはしゃいでるぢやないの、それとも、もうあんたは眠いの？」とその膝に凭れながら小倉に訊いた。

「あの男はね、可哀相な男なんだよ。あの男の事を僕は心配してゐるんだ」と小倉は答へた。

「どうして、あの人が可哀相なの、私ならあんたの方が可哀想だわ」と女は、泌んみりと云つた。

「陽氣に見えたからつて、その人間は何もかも苦勞が無いわけぢやないだらう。あれはね、淋しくて堪らないからはしやいでるんだよ。それにあの男にはね、苦勞があるんだ。私もあの男のために一つの苦勞を持つてゐるんだ。」と小倉は女が、強ひて彼の機嫌をとるに及ばないことを暗示しやうとした。

「まあ！ あんたは若いおじいさんね。あの人より若いんでしよう。だのに息子の事でも氣にするやうに、あの人のことを氣にしてゐるわ、でも、あなたは、いい人ね。」と、だんく

うに三上を愛する女があつたら、彼はその女のためにどんなことでも虚心平氣にやつてのけたに違ひない。彼は、生れてから、直ぐにその生の母親に死に分れて、それつ切り、人間に愛があると云ふことはおるか、子供に乳があると云ふことすらも知らずに育つたのであつた。彼は極めて幼い時から、海邊へ出て、漁夫の手傳をした。そして自分の食ふ分は五つ位の時分から自分で稼いだ。そして彼は小學校へ行く代りに艦船で太平洋に乗り出した。沖を通つて、山のやうな船の中に『洋服』を着た人間が働いてゐるのを見て、「自分も洋服を着て働きたい」と云ふので、艦船を捨て、汽船乗りになつたのであつた。彼は、誰からも、ほんとに愛されたことのない人間であつた。又誰もほんとに心から三上を愛する氣にはなれないだらうと思へるほど、彼は異様にひねられてゐた。

そのくせ、彼は、誰かゞほんとに俺に親切にして呉れたら、と、どんな時間にも思はぬことではないのであつた。従つて、彼は、西澤が女郎に愛されたと云ふ話を聞くと、屹度、彼はその女の名前を聞き出して、次航海には、ソーツと一人で、『愛』とはどんなものかを探りに行くのであつた。三上の此心の秘密は、誰も知らなかつた。であるから、彼は變態性慾者と、その眞實の『愛』を求める原始的巡禮の狀態を名づけられたのであつた。で、彼は自分が、他にとつて、決して眞摯な愛に相當しないことを覺つて、自らもジョーカーと

眞面目になりながら、女はそれでも『ひやかすのよ』と云つた調子を含めて云つた。

「どうしたんだ。大變遅いね、便所が」と、小倉は女に聞いた。

「あら！」と女はわざと驚いて見せて、「もうお寢みになつたんだわ、あなた未だ廁にいらつしやらない。」

「もう幾時頃だらう。」

「三時よ、もうぢきに。やすみませうよ。ね。」

「だけど、僕今夜中に船にあの男と一緒に歸らなければならぬんだがなあ。」小倉は困つたやうに云つた。

「何故？ 私がいやなの、だつたら私代つてもいいわ。そんなこと云はないでね。後生だわ。」

女は、小倉が自分を嫌つて黙々をこねてるんだと思つて、困り切つてゐた。

「姐さん。間違つちやいけないよ。僕、姐さんが、嫌ひでなんかないやしないんだよ。たゞ、船長がね、今夜中に船に歸れと云つて、歸つちやつたんだよ。それにね、船ちやあ、みんなが、此暴化だらう。だから氣づかつて待つてるだらうと思ふんだよ。船長の云ふことは、僕はどうでもいいけれど、船にゐる僕たちの仲間がね。寢ずにもちや氣の毒だらう。だから、あの男と二人で夜の明けない中に歸り度いと思つてるんだだけだね。」

「ぢや、あたし、そんな譯ならあの人に聞いて来て上げますわ。どうなさるかしてね。だけど、ずる分しけてなくつて？危いわね」と云ひながら障子を明けて出たが、それを締める時に一寸振りかへつて、「一寸待つてらつしやいな」と云つて三上の方へ行つた。

「無産階級には共通な感情がある」と小倉は思ふと、急にセンチメンタルな氣持になつて、その女が歸つて來たらいきなり熱いキツスを與へてやらうと思つた。

歸つて女は歸つて來た。そして、小倉の側に遠慮勝ちに座りながら、

「ねえ、あの方、三上さんてえの、あなたが小倉さん、ね、小倉さん。三上さんはね、あなたを捲添にして濟まないけどわ、迎も今夜は歸れないんですつて、明日になつたつて、どうだか分らないんだなんて云つてよ。そして、濟まないが兎に角明日の朝まで待つて呉れるやうにつて云つて、そのまま寢てしまひなすつたわ」

「あ、いいよ。それぢや僕も泊らせて貰はうか。姉さん、僕はね。姉さんが嫌ひでなんぞないんだよ。抱きしめて、キツスしたい位だよ。だけど、僕にはね。僕が愛してゐると同じやうに僕を愛してゐる人があるんだよ。だから、僕は一人で寢るから、姐さんは、帳場の具合が悪かつたら、床を二つ敷いて、並んで寢やうね。そして寢物語りに、姐さんのほんとの戀人の

二〇

寢床はそこへ敷かれた。それは一つであつた。枕も男枕が一つツ切りであつた。

「どうしたんだい、お前さんは何故泣いたりしたんだね」と小倉は、そのまゝ床の中へ潜り込みながら、氣の毒さうに聞いた。

「妾はね。この家へ來てから、あんた見たいな人に會つたのは初めてなの。初めの間は、妾もあなたを「お客」だと思つたの。」と云ひながら、彼女は枕下の火鉢の前へ、生娘がするやうに、慎しく座つて、はにかみながら話した。

「だけど、だん／＼話したり、聞いたり、見たりしたりしてゐる中に、あなたは船乗り見たいぢやないやうに思へて來たの。妾ね、こう思つたのよ、此の人はきつと間違へて茲へ入つたんだ。そうでしょう。ほんとに牛肉のすきやきだけしか食べられない處だと思つて來たのでしよう。そう云ふ人の前へ出ることは私たちには恥だとはあなたは思はないの。相手が野獸であるときだけ、妾達だつて野獸にもなれるのよ。私達は、何でも呪つてやるわ、何でも、神様や佛様なんて、夙くの昔に、呪つて、私は側に寄せ附けないやうにしてるわ。だけでもね、私達の家に、私達の肉以外のものを、全て坊ちやん見たいな、素直な氣持ちで求めに來たあなたには、私達

話でも聞かうか。」と云つて、淋しく氣の毒さうに小倉は笑つた。

「まあ！」と立つて床を延べやうとしてゐた女は、急に小倉の膝の上につつ伏した。そして泣き入るのだつた。小倉はびつくりした。

「どうしたの。一體、え、そんなに帳場に都合が悪けりや一緒だつて。些も構はないから、泣くのはお止しよ。ね」

小倉は女を起さうとした。女は起きなかつた。そして猶も泣き續けるのだつた。

「およし、ね。泣くのはもうお止し。どんな、苦しい事情があるか知らないが、聞かなければ分らない。泣く程の事があるんだつたら膝とも談合つてこともあるから、僕にでも話して氣が紛れないこともないかも知れない。迎も力にやなれまけれど、若し役に立つことがあつたら、役に立つから、泣いて許りゐないで話して御覽な。ね、僕明日の朝早く歸らなから毎日にも來るから、ね。サア、床を敷いてお呉れ」と云つて、小倉は女を其膝の上から抱へ起した。「え、今、床を敷くわ、一寸待つて、ね、片附けるから」ハンケチで眼を押へて淋しさうに彼女はそこらの食べ散らしを片附け初めた。小倉も彼女に手傳つて、七輪などを傍へ寄せた。

の氣持は分らないでせうね。

私達はね、あなたのやうな人を見ることはないのよ。監獄に入つてゐる女の人、男の人を見ることよりも、もつと、ずつと、私たちが、あなた見たいな人を見ることの方が妙のよ。それはね。男の人は、皆獸だからなのよ。

え、全く獸なのよ。私はそう斷言能きてよ。だけどね。それや男の人の罪でもないんだわ。それはね、神様や佛様の罪なんだわ。そうでしょう。ね、自分で人間を作つて置いて自分でこれはい、あれは悪いと決めて置いて、そして、自分の作つた人間を、自分の作つた罪惡の中へ、全て陥罪にでも落とすやうにして、嵌め込んでしまふのは、それや神佛の責任だわ。だから、私の恐いのは、神佛ぢやないの。」

「ぢや何が恐いんだね」小倉は眠くて堪らなかつたが、女の珍らしい言葉につい昂奮さされて起きてゐたのだつた。「私寒いから、あなたの傍へ入つてもいいでせう。ね、たゞ入るだけなのだから、ね、いゝこと」といひながら、女は帯も解かず小倉の寢床へ入つて來た。そして床の隅に小さく黄金蟲のやうに固まりながら、

「私達はね。ほんとに心から『愛さう』と思ふ人を見附けることが能かないのよ。

妾たちが、第一、選り好みする事がいけないつて、あなたも考へて？ 妾たちだつて、何かを見分ける力を持つことが

悪いつてことはないでせうね。よし悪くつても、それはあるものなんだわ。だから妾達は、心から人を愛すると云ふことは能きないのよ。だけでもね、それは妾たちの愛する丈の『價值』のある男が此世の中にないつてことぢやないのよ。そう云ふ人もあるのよ。え、そう云ふ人もあるのよ。そしてね。随分積にさはることはね、それは全く腹の立つ、積に障る生意氣なことなのよ。そう云ふ男はね、妾たちが、ほんとしんみりして、その人と愛し合ひ度いと思ふ様な、そう云ふ人はね、いつでもきつと極り切つて馬鹿なのよ。馬鹿てのろまで、ぼうつとしてるの、でそう云ふ男はね。妾たちがその男を愛してゐることが分らないのよ。そしてまた、その男は随分馬鹿ね。妾たち見たいな女は、男性を愛することは職業的以外に能きないとも云つたやうに、無關心なのよ全く、馬鹿につける薬つてもものは昔から、どこにも無かつたのね」

彼女は、全て夢遊病者か何かのやうに、天井を向いたつきり、その大きく開いた眼を、自分の頭蓋骨の内部でも凝視してゐるやうに、じつと据えて、熱に浮かされてるやうに、早口に、熱心に、そして、一人で小火を消してもしてゐるやうに焦つて、慌て、話した。そのくせ、彼女の體はそこへ傾てねぢつけられてもしたやうに、動かなかつた。

小倉は、よく話が分つた。そして、自分が、氣取り屋で馬

ないことよ——それつばかしだけやつて、女と云へば、おかみさんだけしか知らないで、それも、全て家の雑巾と同様に無趣味に乾し上げて、ね、若い中から、決して女郎買などしないで、その代り、小倉さんは航海學を讀んでるでしよう。そして、高等海員の免状を受けやうと目論んでるわね。勉強してることね、あんたは。ね、いいの、あんた見たいに、勉強して、そして、階段を上らうとして骨を折るのよ。だけどね。その階段はね、滅亡への階段つてのよ。分つて、それをうまく昇つても、その階段自身が滅亡する運命になつてゐるそれが又在る間は、その階段を支へる土臺の方で、無数の人間が失はれる滅亡の階段つてのよ。その階段つてのよ、一切の原なのよ。ね小倉さん。實は、ありもしない幻の階段のために、實在してゐる人間が、永劫に苦しむつてことはいふことなのよ。あんたには分るはずだわ、あんたは、その階段から宛てその焼けつくやうな眼を放したことがないんだもの。それは、あなたには分らねばならないんだわ。あんたは、妾や、その他ありとあらゆる不幸な、あんた自身も、その不幸者の第一人よ。よくつて、その澤山の不幸な人間をもつと、殖やす爲に、あんたは、大骨折で勉強して、そして一廉善人振つてるのよ。ホホ、、、、遂々、私、あんたを、大馬鹿者にしてしまつたわね。御免なさいね。だけど、それはほんとに、あなたは大馬鹿なのよ。ホホ、、、、女は全速力の、船の、

鹿であることを、充分にこつびどくやつ、けられてゐることも知つてゐた。けれども、それにしても、何と云ふ聰明な女だらう。と、彼はもうすつかり眠氣を奪はれてしまつて、女の言葉の方向の動くがまゝに、その疲れ切つた意識を引摺り廻され、血みどろにされるのであつた。

「そして、ね、そんな馬鹿氣たことは、ある筈がないのだけれどね、妾たちも、又、馬鹿なのよ。何故だと思つて？ それね、私達はいつでも極り切つて馬鹿だけに惚れるのよ。その馬鹿はね、いつでも極り切つて、戸惑ひした雀のやうに間違つて飛び込んで来る丈けなのよ。ホホ、、、、ね、小倉さん、あなたは御自分が賢くつて品行のいい、船のりには珍らしい、堅い、善良な、そして一つあるのよ、人類のためになる人間だと思つてるのね。わ、さうでしよう。そうよ、そうよ私にはね、あなたが自分で知らないことまで分るんだわ。だから、まあ聞いてらつしやい。だけどね。小倉さん。あなたは、それ丈けぢや三上さんよりも、未だ駄目な、役に立たない穀潰しよ！ 分つて。世の中にはね。此汚れた世の中を些も良くしようとしなくて、益々悪く、腐らせて行くためにだけ努力してゐて、それでゐて自分は點の打ち處のない善良な人間だと思つてる人が澤山あるのよ。帽子をキチンとかぶつて、几帳面な、ガキ／＼と歩いて、一錢も人から借り倒さないで、乞食には、きつと一錢——一錢より少くも多くも

スクールンヤフトが廻轉してゐるやうだつた。

「あ、それはほんとの事だ」と、小倉は口走つた。

「僕は、社會の、秩序と云ふ大きな看板に隠れて、自分の利慾のみを得やうとしてゐた。それは全くだ」

「ほうら、白狀してしまつたわ。あなたわね。高々船長位になつて、三上さん見たいな人を苛めて、御自分は又、自動車か何かに乗つた耄碌爺から譯も分らない事を云つて苛められ度い、お止しなさい。仰向いて唾を吐くのは止めるものよ。だけど、あんたが船長になると、今度は、ほんとに純粹な生娘があんたに惚れてよ。そして、船が着くたんびに、あんたに、ダイヤモンドの指輪を『愛の表象』として強請ることよ。ホホ、、、それは、あんたに幸福を齎すわね。妾見たいな、え、妾は淫賣よ、それが、どうしたつての、小倉さんあんたは淫賣よりも、一生涯を通じての娼妓がお好きな一人でせうね。ホ、、、だけど、あんたは、さつき僕が愛してゐると同じ様に僕を愛してゐる女があるつて云つたわね。妾、妾、妾だつて誰にも劣らない愛を持つてゐるんだわ、だけど、私は前科者なのよ。ホ、、、世の中の人間は、自分を縛つてゐる鐵の鎖が、人をも縛つてゐると思ふと、安心して自分の鎖が軽くてもなるんだと見えるわ。それはね、奴隷道德の鎖よ。因襲の鎖つてのよ。だけどね、小倉さん。私には、そんなこととはしないのよ。妾そんなこと、夢にも思はないんだけれど、

例へばね、若しか、妾があんたを愛したくつても妾が淫賣ならその資格が無いとでも、あんたは云ひ度いんだわね。いいえ、そうよ、ま、黙つてらつしやい。彼女は、小倉が何も云はうとしてもあないのに、慌て、彼の云ふのを遮つた。「私はあんたに愛させて呉れるやうに、頼む資格も無いと思つてるのね。だけどね。小倉さん。私は幻の階段を追ふやうな利己主義者は、妾の方でいくら頼まれてもいやなのよ。それは意氣地なしの考へる生き方なんだもの。それは妾たちが、こんな恥しい商賣をするのより、もつとく恥づかしい墮落した、外道のやり口かよ。」

「だけどもね。小倉さん。若しあんたが、そうでなかつたら若しあんたが立派な人間で階段なんぞ認めない人だつたら、妾は、妾は、あんた見たいな人に初めて會つたことを白狀してよ。そして、私は、あんたを、世界中で一番強い、弱い者の味方としてなら、私はあんたを愛したいの。だけどもね。何だつて私は馬鹿なんだらう。あんたにはいゝ人があつたのね、妾、妾、妾だつて妾はね、小倉さん。あんたが高等海員の試験を受けて、船長に立身するやうに、試験を受けても願つてどもなく、此商賣に、無理矢理に放り込まれたんだわ。妾の云ふことが分つて。ホホ、、、妾の云ふことはね、こんな商賣して、それは妾の知つたことぢやないつて積りなのよ。あなたが船乗りをしてるのも、私がこんな汚

はしいことをしてるのも、性質は同じなのよ。そしてね。私の方が、ほんとうは、もつと尊敬して貰はなければならぬ程苦痛な部分を引き受けてるのよ。分つて？ 人間が生きるためには、どんな苦痛でも忍ぶもんだわ。生きるためには、より早く死ぬ方法までに、飛びつくものよ。」

妾なんぞ死ぬまでに、ほんとに自分のしたいと思つたこと、反對のこと許しさせられて遂々死んぢやうんだ。自分の思ふ通りになることは一つだつてありやしないんだわ。妾はね初めはね。あんたをたゞのお客と思つたの、そして次には坊ちゃんと思つたの、その次はほんとに物の分つたおとなしい人だと思つたの、そしてね。今ではね。あなたは、そうね何だらう。何と云へばいゝだらう。妾のお父さんだわ。妾を産んだ、妾の知らない、ほんとの妾のお父さんだわ、ホホ、、、、妾のお父さんに……………」

二

その夜は全く悪魔につかれた夜であつた。人間の神経を鋭で焼くやうに重苦しい、惱ましい魅惑的な、夜であつた。極度の歡と、限りなき苦しみの、どろ／＼に溶け合つたやうな一夜であつた。

三上にも、小倉にも、それは回視するに忍びないやうな、各々の思ひ出を、その夜は焼きつけた。それは永劫に覺める

ことのないほどの夜であるべきであると思はれた。それほどその夜は二人にとつて大きな夜であつた。

人間の一生のうち、その人の一切の事情を、一撃の下に轉倒させる様な重大な事件があり、社會に於ては、全社會を聳動せしめるやうな大事件がある。そして、それ等の事件が必ず夜か晝かに行はれ、その事件とは全て關係なしに、夜になつたり、朝になつたりすることは、個人として、社會として、その事件に當面したものに、馬鹿げた、不思議な感じを屹度起させるものだ。中には「あゝ、俺にとつて、あれほど重大なことがあつたのに、どうだらう、夜が明けた」と思はせるのである。

三上と、小倉とは、各々が、そんな風な感じを以て、朝の六時に起きた。二人とも腫れぼつたい眼をしてゐた。

一夜は明けた。そして、重大なる事件は未解決の儘に、夜を持ち越して、明けたのであつた。それは、一夜を持ち越したために、事實の形を千倍もの太さにしてしまつた。一夜――五時間――傳馬繫留――水夫睡眠――何でもないことであつた。それは全く極めて平凡な詰らないことであつた。

處が、その舞臺を、社會から、萬壽丸にまで縮めると、問題が由々しく大きくなるのだつた。

兎まれ、小倉は『階段』のことは忘れたにしても、一應は、本船へ歸つてから、萬事を解決した方がいいと考へた。處が、

三上は、それは馬鹿なやり方だ、と考へた。そこに、三上と小倉との差違があつた。

二人はその家を出た。そして、海岸を傳馬のある方へ逆に歩きながら、その事件の締めく／＼りについて考へ合つた。

「俺あ歸らんよ」と三上は、さつきから云ひ續けてゐた。

「でも歸らなきや様子が分らないぢやないか」これは小倉の云ひ草だつた。

「様子は分らんでもいゝよ。あの傳馬を叩き賣るか、質に入れるかして、俺達はどうかへ行つた方がいいよ。」三上は自分の計畫を初めて口に出した。

「でも、そいつあ困るなあ。僕は海員手帖が預けてあるし行李もあるしそいつあ弱るよ」小倉は全く困るのだつた。彼は船長免狀を取る試験のために、二度も沈没したりして、それに必要な履歴が實地として取つてあつた。それは海員手帖に記入されてあつた。

「だから、さようならつて僕がさつきから云ふのに、いつまでも君が愚圖／＼、ついて来るからよ。君はサンパンを雇つて歸れ。そして、三上が傳馬を盗んだとでも、何とでも云つて、置けばいゝぢやないか、僕はこれを賣つて、どこかへ行くんだから。行李や、手帖なんぞ欲しくもないや。早く君は歸れ！」

三上はクルツと反對の方を向いて、棧橋の方へ歩を返し

た。小倉も無意識にそれに従つた。
「だつて、些も君だけが悪いことはないぢやないか、大體船長が無理なんぢやないか、だから、歸つて何ともないよ。歸つた方がいゝよ」小倉は、頻りに穩便な方法をとることを三上にすすめた。

「何でもかんでもいやだよ、俺は。若し歸る氣になつたら、出帆間際に歸る。それまで俺は隠れて船の様子を見ることにするよ。」

彼はこう云つてズン／＼歩いて行つた。

小倉は夢でも見續けてゐるやうに、ボンヤリしながら、三上の後から無意識に歩いた。

三上は波止場に来て、昨夜繋いだ船の傳馬にヒヨイツと飛び乗つた。小倉も乗らうとすると、手を振つて「みんなに、出帆間際にこれ——と云つて傳馬を指さして——で歸るからと云つといてくれよ。なあ」と云ひながら、グーツと波止場を押して、離れてしまつた。

小倉は失心したやうに佇んでゐた。

三上は、その五人前もあるやうな腕に力を籠めて橋の下を潜つて見えなくなつてしまつた。

「なるほど、三上は歸れない筈だ。船長を脅かしたんだもんナア、それを歸れと云つて、昨夜一晩泊つた、俺は何と云ふ白痴だつたんだ。三上は、たとひ理由があらうがあるまいが、

二二二

小倉は萬壽丸へ歸つた。當番のコーターマスターは、梯子を昇り切ると、すぐに、小倉を取つ捕へた。

「どうしたんだい、心配したぜ、昨夜は、流されやしなかつたかつて。そして傳馬はどうしたんだ。矢張りやられたのかい」

船に残つた者は、なるほど一切の事情を知らない筈であつた。そして、サンパン止め位の荒れに夜中のことだから、傳馬をやられた爲に、夜歸れなかつたんだと、船員達は勝手に想像して氣を揉んでゐたのだつた。傳馬は、船長を上陸させて置いて歸りに、橋を潜る時に、打つ衝けて、壊れた——それほど古くも弱つてもゐないんだが——と云へば、船員たちには、どうにかかうにか、三上が歸つて來ないで、サンパンの船頭が喋舌らない限り分りはしないんだが、偕それでは三上はどこへ行つたと云ふことになるし。何も隠し立てする必要もないから、すつかりぶち撒けた方がいゝだらう。それで悪かつたら、又其時のことだ」と、小倉は突嗟の間に考へた。「ナアに、やられはしないんだよ。妙なことになつちまつて困つたんだよ」小倉はほんとに、今そのことについて、口を切つて、實際これは俺の考へてるやうに簡單に片のつく問題ぢやない、全く困つたことだ」と云ふことを痛切に感じた。

どのみちやつつけられるに決つてゐたんだ。三上は、傳馬を質に入れるなんて、奴一流の計畫を立て、行つちやつた。が、それがどんな滑稽なやり方であらうが、奴が、のこ／＼船へ歸るよりは遙にましなこつた。知つてゐて、陥穽に首を突つ込むにや當らないもんなあ」小倉は行先を忘れた田舎者のやうに當惑氣にそこへ突つ立つてゐた。彼の役割は、此上もなく奇妙な、滑稽な云ひ様のない不思議なものになつて來た。

「船の傳馬に乗つて來て、サンパンを備つて歸る！一體どうしたんだ。そして此責任は、三上と僕とに、あるんだからなあ。どうなるんだ、一體。まゝよ！ 歸つて見れやどうにかなるだらう。」

彼はサンパンを備つて、萬壽丸へ行くやうに頼んだ。

「萬壽丸はいつ入つたんだい」と、虱小屋から、這ひ出した兄弟が訊いた。

「昨夜晩くよ」彼は答へた。

「今朝此處へ續つてあつた傳馬は、萬壽のぢやなかつたかい」と、船頭は訊いた。

「こいつ等も知つてら。へ、知つてる筈だ、七時だもんなあ、だが、一體昨夜のことは、ほんとに此俺が経験したことたらうか、それとも、……全く不思議だつたなあ」小倉は昨夜の女のことを考へてゐた。彼女は賢いそして「純潔」な女だつた。

「どうしたんだ。一體、そして三上は？」

「三上が傳馬で、今朝歸つて來てる筈なんだよ」小倉は、三上が傳馬を賣り飛ばすか質に入れるかすると云つた、その、迎も實現出來さうもない、彼の計畫だけは云ふまいと決心した。

「冗談云つちやいけな。誰も歸つて來やしなせ」
「それぢや、おもてよく、すつかりの事情を委しく話さう。一寸困つたことが起つたんだ。船長と三上とが喧嘩したんだ。それを、今おもて話さう。皆あるかなあ。小倉はかう云ひながら、もうおもてへのトラップを降りて、驅けて行つた。

おもてでは、ボースンから、大工、水夫たち、全部が、いつでも入港の能きるやうに、準備を整へて、船長の歸るのを待つてゐた。それよりもつと、三上と小倉との消息について待ち切つてゐた。

「どうも濟まなかつた。只今」と叫びながら小倉はそこへ駆込んで來た。

「どうしたい三上は？」

「偕では女郎買ひをしやがつたな」

「傳馬で歸つたのかい」

「うまくやつてやがらあ」

各人が考へ、想像してゐたことの最初の言葉が、彼のまはり、棧橋から船に落ちる石炭のやうに轟然と、同時に飛び

かゝつた。
 小倉は、かいつまんで昨夜の困難な航海から、船長の態度から三上の行爲から、宿屋へ——曖昧屋とは云はなかつた——泊つて、凍りついた服を乾かして、今朝まで乾くのを待つてゐたこと、三上は、黙つて、宿を先へ出て、宿の者へは一足先へ船の傳馬で歸るからと云ひ置いて行つたこと。慌てて飛んで出て、波止場へ来たときには、もう三上は影も見えなかつたこと。船長はどんな措置をとるか、打つ捨つては逆も置かないだらうと云ふことなどを、簡単に、然し要領を摘んで話した。

セイラーたちは黙つて聞いてゐた。そうして、三上が一足先へ出て、未だ歸つて来ないと云ふことを、小倉ほどに心配しないのみならず、寧ろそれをひどく痛快がつた。「いつそ本船へ乗つて逃げたら面白かつたな」などと茶化しさへした。一向誰もその事に對して「さうしたらいいだらう」と云ふ意見を持ち出す者は無かつた。誰もが、その單調でない、奇抜な話を聞いて、その話と、事件とに満足してしまつた。

小倉は、此處でも又彼が事柄を餘り簡單に見過してゐたこと、今では彼一人丈けが、當の責任者に轉化したことを痛感した。

小倉は、非常に善良ではあるが、意志の弱い、そして所謂

かゝつて来やしないかと思つて心配してゐるんだよ、そら僕にも責任はあるんだけど。どうしたらいいだらうか、船長が歸つたら、直ぐに謝りに行つたらどうだらう。ね」

小倉は途方に暮れてゐた。彼はその事柄が帳消しになるためなら今から、裸になつて、海へ飛び込めと云はれ、ば、そうすることの方を遙かに喜んで、且つ安心したであらう。彼は「これほどの問題が、未だ片附かない」と云ふ、宙ぶらりんの状態であることを極度に恐れた。彼は、此問題が、いつかは現はれるが、未だいつかそれは分らない、やうな状態では、一、二ヶ月も續くとすれば、彼は自分と三上との二つの行爲を括めて、道徳的にも、法律的にも——若しありとすれば物質的にも、一切合財を自分で責任を負つた方がどの位樂だつたか知れなかつた。

「俺はもう、これが三年越し引き續いた事柄のやうに考へられる。小倉は、ヒステリーの女のやうに「傳馬」の事以外から頭を持ち出すことが能きなかつた。

「船長に謝りに行く？ それもいいだらう。だが、お前、何を一體謝る積りなんだい。雇入れもしないボーイ長の負傷を打つ捨らかしといて、自分丈けは、夜中に上陸したことをかい。難破船の側をスレ／＼に涼しい顔をして通過したことをかい。謝る理由と、事柄とがあるなら進んで謝るがいいさ。だが謝ることの無い時に謝るのは、自分の正しさを誇示する

冷静な、分別のある若者だつた。それで従つていつても「事勿れ主義」であつた。その逃避的な彼が、旋風の事件の中心に捲き込まれたのだから、堪らなかつた。彼は何をどうしていいか、自分自身が何であるか、一體全體どうしたらいいんだか、薩つ張り一切が分らなかつた。

誰もがそれまで打ち明けてもゐないのに、いつでも、その人間の最も重大な祕密なことになつて、自分の手で收まりがつかねさうになると、誰もが、決して普段それ程親密でもないやうに見える、藤原へ、相談を持ちかけるのが極り切つた例になつてゐた。小倉も、此例に依つて、藤原へ意見を求めやうと決心した。

藤原は、今まで自分が中心になつてゐた、その話から、避けて、一方の隅で、黙つてその事件の話を聞いてゐた。そして、煙草を「尻からヤニの出る」ほどに、やけに喫かしてゐるのだつた。

「藤原君。君はどうしたらいいと思ふかい」と、小倉は藤原と向ひ合つて腰を下しながら訊いた。

「よくは未だ分らないけれど、僕の知つてる範囲では、君にも、三上君にも何等の責任はないと思ふよ。」と彼は答へた。「そうだらうか、だけど、三上は十圓無理強ひ見たいにして借りたものなあ。それに、昨夜は歸らないで、今日は傳馬をどつかへ持つてつちやつたしね。僕は今、一切が僕に責任が

ことになるか、又は、單なるオベツカに止まるよ。そんなに君慌てることはないだらう。事の起りから、終りまで、冷静に考へて見給へ。勝敗は別として、理由の正邪はどつちにあるか、直ぐ分ることぢやないか。港務の許可なしに夜陰に乗じてコツツリ上陸したり、檢疫前に上陸したりすることは、よし、どんな風の晩の宵の中であつても悪いことに相違はないだらう。だから順序として、その點から先づ謝るべきだらうよ」

藤原は、全つ切り俺とは違つた見方をしてゐる。だが、あれも一つの見方だ。随分亂暴な見方だが眞實の見方だ。どうだらう。本とうに、本とうのことをやつても構はないだらうかと、小倉は未だ考へを決め得ずにあるのだつた。

「藤原の云ふことは、昨夜の女の云つた處と、どこか似てる處があるぞ」と、小倉は、此時フト思つた、「あの女は寶玉だ！ だが、今はそれ處ぢやない。だが、あの女が俺のことを「三上さんよりも殺潰しよ、あんたは」と云つたつけなあ、だがそれや全くだつた。俺はどうだ、自分のことさへ自分で考へが全つきりつかないぢやないか、三上は一人で立派にやつて行つた。俺には、俺の頭に反いて、尻尾を振るブルジョアの取引氣分があるんだ。それが、すつかり、俺を臺なしにするんだ。俺は何故藤原君の云ふやうに、頭の命する通りに動かないのだらう、あゝ、矢つ張り俺は蝮蛇なんだ！

俺は、労働者階級の悲慘を、決斷と勇氣と犠牲のないことに歸してゐるが、就中、この俺が其中の最なるものだ。労働者階級を、裏切る唯一の卑怯者の典型を、俺は、俺自身の中に見出した。俺は、思想として全體を憤慨する前に、俺自身の恥さらしな、臆病者の、事大主義者の、裏切者、利己主義者の、資本主義の番頭の俺を、先づ血祭に上げねばならぬ。俺は、俺の村を、ブルジョアの番頭になれば、救へると云ふ謬見を捨て去るべきだ。俺の救はなければならぬのは、俺の村丈けぢやなくて、此地上の一切だ。

小倉は元氣よく、全て今にも、ブルジョアに出つ會しさへすれば飛びつきそうに、かく考へたが、それは彼には絶對に不可能な事であつた。彼は、依然事大主義者だつた。一切が腐つてしまつても、圓くさへあればそれで、「安心」なのだつた。

小倉は其性格が煮え切らない處から、此事件の進展に對し、何等の役目を勤めることの能きない一の木偶の坊に過ぎなかつた。

三上が船長に與へた、侮辱は、下級船員全體への復讐の形を船長によつて取られた。

そして、此事が、此に述べる處の、同盟罷業を惹起した。ブルジョアの番頭對、プロレタリア！ 船では、ブルジョアは決して僱主としての其姿を労働者の前へ現さなかつた。

許り前から、やもめの、こゝのおやぢのところへ、飲炊きに来て、亭主の歸るのを「網を張つて待つて」るのであつた。

「まあ、三上さんだつたわね。どうしたの、いつ入つたの？」

三上が、のつそり入つたのを見たおばさんは、長火鉢の前に吸ひかけの長煙管を置いて、くるりと入口の方を振りかへつて、さう云つた。

「おやぢはチャンス取りか」三上はブツキラ棒に訊いた。

「え、不相變、急いでるの？ それとも悠くり出来て？」とおばさんは訊いた。

「急がねえよ、上らして貰はう」と云つて、彼はもうそこへ上つてゐたが、長火鉢の前の座布團の上へ、「上らして貰つて」おばさんの長煙管で、スパクと煙草を吸ひ初めた。

「随分御無沙汰ね、三上さん。あつちにはこんな御無沙汰しやしないでせう。憤られるからね」

「眞金町？ 毎航海さ、おやぢは遅くなるだらうね。今幾人ゐる？」

「十一人、暮に迫つて、口はないし、入る處はないし、親爺さん、困つてよ」

と指て丸を拵へて見せた。十一人の船員たちが今休んでゐるのであつた。

「おばさんの御亭、未だ歸らないかい？」三上は訊いた。

二三

三上は、傳馬を押して、一度神奈川沖まで出たが、又引きかへして、堀川へ入つた。彼は、神奈川沖へ出た時に、傳馬にペンキで書かれてあつた萬壽丸を、シーナイフで削り取つてしまつた。

彼は、翁町の、彼が泊りつけのポーレンの、サンパンの繋がる場所へ、その傳馬を繋いだ。そして、小林と云ふ、そのポーレンへ、のこく上つて行つた。

ポーレンの親爺は、策のやうな彼の唯一の財産なるサンパンに、チャンス取りに泊つてゐる宿料なしの水夫を船頭にして、沖へとチャンスを取りに出かけた留守であつた。

おばさんはゐた。下手な田舎芝居の女形を思はせる色の黒い、瘠せたヒヨロ／＼の、南瓜の萎びた花のやうな、女郎上りのおばさんだつた。一口に云へば「サンマ」のおばさんだつた。此のおばさんはゐた。

此のおばさんは親爺のおかみさんではなかつた。おやぢの世話で船に乗つて、今外國船に乗つて、玆四年程前ハンブルグから、近い中に歸ると云ふ手紙と、金二百圓とを送つて寄越した水夫の、おかみさんだつた。

そのおかみさんが、今歸るか、今歸るか待つてゐる中に、二百圓と一年とが消えて失くなつてしまつた。そこで、三年

「歸らないよ、未だ。向ふて髪の水の赤い、青い眼の女房でも持つてゐるだらうよ」

「その積りて浮氣をしてると、えらいことになるぜハツハ、」

「相手さへあればね。ホホ、」

「僕は下船したんだから、當分又厄介になるよ。頼むよ、いかに。チョツと出かけて来るから、親爺が歸つたらさう云つといとおくれよ」三上が靴を履いてると、

「そして荷物は何？ 小屋？ 親爺さん此頃工面がよくないんだから、十でも十五でも入れないと、駄目だよ。分つてゐね」と、おばさんは、駄目を押した。前金を十圓か十五圓は入れなかりや、迎も置かないと云ふのであつた。

「大丈夫だよ。そんなことあ、云ふだけ野暮さ。ヘツヘツへ、」三上は表へ出て行つた。

彼は近所の質屋へ行つた。それは彼れの常取引の質店であつた。

「いらつしやい、暫くて、お品物は？」と主人は訊いた。

「實はね、品物は此處まで持つて來られないんだが、二目だけ、傳馬で金を借りたいんだがね。ポーレンが、融通して貰つたところへ、現金を返すんだが、それが今足りないんだ。船は今ドツクに入つてゐる××丸だから、傳馬を泛してあるんだ。それで、二日許り借り度いと云ふんだがね。利息はいくら高

くても構はないつてんだ。どうだらう。見に行つて貰へんかね。そこに繋いであるんだが」三上は、これを昨夜傳馬に乗る前から計畫してゐたのであつた。そして彼は、其計畫を完全に信頼してゐたのであつた。

「傳馬ぢやちよつと困りますね。藏に入りませんからね。それに船の傳馬ぢや猶更、何とも仕方がありませんね。どうぞ、それはまあ、何かまた別な品で、も御座いましたら」主人は一も二もなく斷つてしまつた。

三上は、驚いた。彼は驚いたのである。彼は、未だ今度の事ほど綿密に、長い間かゝつて、企てたことは無かつた。それは室蘭に碇泊してゐる頃からの計畫であつた。その計畫は、サンパンを占領すると云ふ點までは、彼の計畫通りに進行したのである。であるのに、最後の點に至つて、是れほど何でもない問題が拒まれると云ふ、その事が彼を驚かした。「だが、此家は傳馬を扱ふのに馴れてゐないと見える」と、すぐ、彼は思ひかへした。

「さよなら」彼はそこを飛び出した。そして今までより少し彼は慌てゝ歩いた。彼は歩きながら、これほどの船つき場でありながら、一軒もサンパン屋が店を出してゐないことを不便がつた。「靴でさへ中古の夜店を出してゐるのに——」彼は全く残念であつた。

彼は其日一日、ありとあらゆる質屋で斷られ、貸舟屋で斷

「さうか、遠洋航路もいだらう。だが、遠洋航路は履歴が美しくないといけないな。おまへの手帖を一寸見せな、預つとかう」

手練の手裏剣見事に三上の胸元を刺した。

「あ！ 船員手帳！」と驚いて三上は膝を叩いた。「船に忘れて来たぞ」

「冗談云つちやいけない。三上、俺は今日萬壽で、すつかり様子を聞いて来たんだぞ。いい加減にしろ、傳馬まで乗り逃げやりやがつて。どうしたい傳馬なんか」

「えー！ かうなりや糞だ、云つちまへ、畜生！ 傳馬は繋いであるよ。」

「どこにあるんだい」

「おやぢのサンパンの繋いである處さ」

「何だつてあんな邪魔つけなものを、のろ／＼と漕いで来たんだい」

「賣り飛ばす積りなんだ！」

「買手はある積りかい」

「賣り物だつたら買手もあらうぢやないか」

「親爺はもう三上と「眞面目」な話をする事は「止めた」と決めた。が、それにしても、こんな野郎に「踏み止まれちや」商賣が上つてしまふのだつた。

「お前もう横濱ぢや迎も駄目だから、神戸へでも行つて見た

られ、全く惨めな氣持になつてしまつた。

「傳馬は賣れねえや、急には駄目だな、だが、親爺になら賣れるだらう」小突きまわされた犬のやうに、身も心もへトへトになりながら、彼はボーレンの親爺を目標に持つて来た。彼には絶望がなかつた。

彼は夜十一時頃、ボーレンの表戸を開けた。

「おやぢは起きてゐた。そして、彼が上つて行くのをじろりと眺めた。三上は、長火鉢の前へ、坐つて、煙草に火をつけた。そこは六疊の間であつた。隅の方には、船員が二人寝てゐた。

「おやぢは暫く黙つて、これも煙草を吸つてゐた。

「おやぢさん。俺あ今日下船したぜ。又、暫く頼むよ。」三上は切り出した。

「下船した。で、又船に乗る氣なのかい」おやぢは妙な風に返事をした。

船乗りが、下船してボーレンに休めば、次の船に乗るまでの間、そこに休んでその間に、口を探すが、その唯一の道であつた。

「あ、萬壽丸にやもう倦きたからなあ、今度は本とうの遠洋航路だ。」どうも、だが、おやぢ奴様子が怪しいぞ、今日萬壽に行つたんぢやないかな、と思つたが、能きるまで空つ惚けた方がいいと思ひついた。

らどうだね、そのサンパンに乗つてさ。え」

「俺あ、萬壽が歸つて来るまで待つてるよ。濱で。船員手帳は俺のもんだからなあ。」

「萬壽の船長は、お前を監獄に放り込んでやると云つてたさうだぜ」

「船長が、然しさうはしないだらうよ。俺が監獄へ放り込まれる前に、奴が海ん中へ叩つ込まれるだらうよ。」

「お前は、船長を、おどかしたつてえぢやないか、『海ん中へ叩つ込むぞつ』で。どえらいことをやつたもんだなあ、だが、おもてはみな大喜だつたぜ。『何だつたつて三上はえらい、やる時になりやあの位やる奴あない』つてさ。だが、少し氣をつけないといけないぜ。暫くお前は横濱を離れてた方がい

いんだがなめ。どうだい神戸が長崎へでも行つて見ちや」

「おやぢが海員手帳を取つて呉れるかい？」

「それや取つてやつてもいいが、渡さねえだらう。俺んところに、あれよりもよつぽどいい履歴があるから、それを持つて行けよ。」

三上は、別人の手帳を持つて、別人になつて、神戸へ行つた。傳馬は、ボーレンのおやぢが預つて、萬壽が入港したら返すことにした。

海員の雇入れは、その手續が全く面倒であつた。極めて、嚴格なる手續の下に、極めて嚴格に取締られて、そして、彼

等程搾取される労働者は、多く他に例を見ないのであった。例へば、三土は五年間汽船に乗つてゐて、漸く月給十八圓になつた許りであつた。話にならないのだ、全く！
然も、それに對して、命はおほつびらに投げ出してあるのだ！

二四

北海道萬壽炭坑行ききのボイラー三本を、萬壽丸は、横濱から、室蘭への航海に、そのガラン堂の腹の中に吸ひ込んだ。それは甚だ手間の取れる厄介な積込みであつた。だが横濱には、そんな種類の荷役に馴れた仲仕は澤山あつた。従つて、水夫たちも安心して、その作業を手傳つた。それに、チーフメーツもそれ等のことを知つてゐたから、それほど昂奮もしなかつた。

珍らしい荷物であつたので、退屈を紛らし、單調を破つて、その積込みの終へた時は、何だか、愉快なことでも爲し遂げたやうに、水夫等は感じた位であつた。

横濱から、室蘭へは、萬壽丸は、その船體が室蘭から横濱への時の三倍の大きさに見えた。と云ふのは、荷が無いから、全てその赤い腹の殆んど全部を剥ぎ出して、スクルーで浪を蹴つ飛ばしながら遊んで行くのであつた。従つてデツキから水面までの距離が、うんと遠くなつた、おもての海水ポンプ

と、萬全の用意とてなされた。彼は、それだけの作業、バケツを持つて下りて、這らぬやうに洩さぬやうに、昇つて来る、それだけの作業を、夏の土用よりも熱い思ひて汗を垂らし、罐場を一足出るとすぐに、凍つた便所の作業に移らねばならなかつた。

彼は熱湯と竹の棒とで、化學的及物理的作用を應用して、頑固に凍りついた兄弟たちの汚い物を排除する。

彼は熱湯を打つかける前に、竹箒の柄を以て、猛烈に物理的操作を試みた。——物理的操作とはセコンドメイトの口吻を借りたのである——そして、糞の分子と分子とが稍空隙を生ずる時に於て熱湯を——此時決して物惜しみしてチビ／＼空けてはならない、思ひ切つて——どつと一時に打ち空けるのである。

と、忽ちにして、甚しい臭氣が、發煙硝酸の蓋でも開けたやうに、水蒸氣と共に立ち昇る。そして此水蒸氣が發煙硝酸と同じく、その煙までも黄色であるやうに感じられる。そして、此濛々たる蒸氣と臭氣とに伍して、ドーツと音がすれば、それは、汚物が流れ出した證據である。若し不幸にして音が伴はなかつた場合は、波田はそれと同じことを、幾度か繰り返さなければならぬ。

波田は、その熱湯を汚物の壺の中へ注ぐや否や、彼は棒もバケツもそこへ打ち捨て、置いて、サイドから、汚物の飛び

は、まるで空氣ポンプのやうに、シュー／＼云ふ許りになつて終ふのだつた。

かうなると、便所掃除人、波田は實に、其作業を百倍の困難にされてしまふのであつた。彼は一々ともまで、淡水ポンプを汲みに行くか——それは見附かると大變入釜しかつたから、其方法は餘り取れなかつた——又は、石油罐にロープを結びつけて、海から釣り上げるのであつた。これは全くいやなことだつた。僅か石油罐一杯の水が、それ程重く、それ程いつまでも途中で、愚圖／＼してゐなくてもよささうなものだと思はれるのだつた。これを釣り上げるのが憶劫さに、夕方一度便所に水を通すことを怠けると、パイプに一杯の糞が凍りついてしまふのだつた。それが凍りついた日には、波田は字義通りに「糞を掴む」——船では詰まらない目に合ふことを糞を掴むと云ふのであつた。

パイプ——直徑一尺位の鐵管——は下水溜が、その儘凍つたやうな形に於て凍るのであつた。それが凍つた際は、波田は、何よりも先づ機關場へ下りて行つて熱湯を貰つて来るのであつた。機關場から、おもてまでの距離の遠さよ——第一、罐場までの上り下りが、大變であつた。殊に、熱湯の四杯入つた石油罐をブラ下げて、それを一滴も漏さないやうに、洩すと下で火夫がやけどするのだ。その迂る鐵の油だらけの梯子を昇らなければならなかつた。これは周到な注意

出すスカツパの活動の状態を眺めに行く。

それは汚ない仕事であつた。そしていやな、困難な仕事であつた。それは丁度われ等が便所へかゝむのと同様不愉快なことであつた。それは又、勢よく、一切が飛び出すことは、われ／＼が便所へかゝんだ時と同様、腹の中が奇麗になることを意味し、且つ快いことであつた。

波田はスカツパーから、太平洋の波濤を目がけて、飛び散つて行く、汚物の漉を眺めては、誠に、これは便所掃除人以外に誰も、味へない痛快事であると思ふのであつた。

「これで俺も氣持がいいし、誰もが又氣持がいいわい」波田は、その着物を洗つて乾すために、罐場へ行つた。

そして彼は、その汚れた着物を洗ふ間に、「若し神が在るなら、糞壺にこそ在るべきだ」と思つた。

「何故ならば、若し神や佛が在るとしたならば、彼等が愛する處の人間が豚小屋に住み、或は寺院の床下に、神社の縁下に住む時に、どうして、自分だけが、其だ／＼つ廣い場所を獨占することが能き得やう？ 若しさうしてゐる神佛でもあるならば、それは岩見重太郎によつて退治されねばならない神佛であつて、決して眞物ではないのだ。今は、神佛よりも一段下であるべき人間でさへ、『萬人がパンを得るまでは誰もが菓子を持つてはならぬ』と云つてゐるではないか、神は正に糞壺にこそ在るべきだ！」

波田によると神は恐ろしく、汚ない處にもぐる必要があつた。

「俺は便所に神を見た。それ以外で見たことがない」と波田は、いつ、どこでも主張するのであつた。

「で、その神様は、俺のによく似た菜つ葉を着て、俺より先にいつでも便所を掃除してる！ それは労働者だつた。賃銀を貰はない労働者の形をしてゐた！」と。

「で、若し、神様が、労働者でもなく、便所にもゐなかつたら、俺は、逆も上陸して寺院や社祠などへ、のそ／＼探しになんぞ出かけてはゐられないんだ。人間から現實のパンを奪つて精神的な食べられもしない腹も膨れない、パンなんぞやると云つてごまかすのは神ぢやないんだ。それやブルジョアか、その親類だ」

これが波田の宗教観であつた。

「その神様が賃銀を月八圓宛さへ得てれば、そのまゝ波田君なんだがなあ。惜しいことには、たつた一つ違ふんで困つたね」藤原はさう云つて笑つたものだ。

船には、宗教を信ずるものは一人も居ないと云つてよかつた。ポースン、大工、この二人だけが、暴化時だけ寢臺の下の抽出しの中から、金刀比羅大明神を引つ張り出して、利用した。彼等は若し、それがいくらかでも役に立つなら、利用しなければ、「損だ」と習慣的に考へたのであつた。

く、デツキから、ポツトム迄、どちらを向いてもガララン堂で、支柱がないためなのだつた。それはフットボールの内部のやうなものだつた。

冬期の北海は霧が甚しかつた。汽船で鳴らす霧笛、燈臺で鳴らす號砲のやうな霧信號。海へ轉がり込んだフットボールのやうな萬壽丸は、霧のために、目隠しをされたものであるから、九哩の速力をどうしても、もつと下げなければならぬ筈であつた。けれどもそれは、正月のことを考へる時に、船長はこれから上速力を下げる譯には行かなかつた。その代り彼は無暗矢鱈に霧笛を鳴らした。

それは何かの事變の前兆を知らせると云ふ、犬の遠吠に似てゐた。夫を聞くものに、きつと不安な豫感に似たものを吹き込まねば置かぬ音色であつた。同じ汽笛でも、出帆の汽笛は寂しく、入港の汽笛は、元氣よく勝ち誇つた様に聞えるものだ。霧笛の場合は同じ汽笛でも、不吉な、落ちつかない、何だかソワソワした氣持に人を引き込んだ。自らその糸を曳いてゐる船長自身が、その音色に追つかけられるやうに後から後からと、糸を曳いた。霧笛は、益々深く、人から景色を奪ふ霧のやうに、その心から光と落付とを奪ふのであつた。

精密なる海圖と羅針盤とがあるとは云へ、又それが、目高が湖に泳ぐやうな比例で海が廣いと云へ、兎まれ先が見えないと云ふことは、安心のならないことであつた。殊に水夫

板子一枚下は地獄である。超人間的な「神か佛」のやうな「物」に頼りたい氣は、人には、特に船員などにはあり得たのであるが、然も彼等は餘りに馬鹿々々しい、それ等のものを信じる氣にならなかつた。宗教は今では全く下らないものであるか、又は、其正體を胡魔化するための神學や經典で、曖昧に詭辯的に職業化されてゐた。宗教は今や高利貸や、マーダラーの手先になつたり辯護人になつたりすることに依つてのみその生命を辛うじて保つてゐるにすぎなかつた。

話は飛んでもない傍路へ外れたものだ。

二五

萬壽丸は、室蘭の荷役を早く済まして、碇泊中そこで船のラストや何かをすつかり塗つて、横濱へ歸つて正月をする豫定であつた。そしてその豫定は、一切のプログラムを最大速度でやつて、順當に行けば、辛うじて大晦日の晩横濱へ着くのであつた。

そんなわけであつたから、わが、團扇の様な萬壽丸は、豚の様な體を汗だくで、其全速力九ノツトを出してゐた。そして此大速力の爲に、船體はパシフィックラインのエムロシアが、全速を出した時の様な、自震動をブル／＼と感じながら飛んで行くのであつた。何故、たつた九ノツトの速力でゆれるかと云へば、わが萬壽丸は、なるべく多く石炭を頼張るべ

等にとつては、全て盲人が杖を擔いで、文字通りに盲滅法に走つてるやうに思はれるのであつた。

西澤と波田とは、ブリツヂに上つて、小倉の舵取りを見學してゐた。

自動車の運轉手がそのハンドルを絶えず、廻してゐるやうに、汽船の舵機も、前のコンパスと睨めつくらをしながら、絶えず、廻され調節されてゐた。

一時間九ノツトの速力も、此船全體をその權力の下に支配する、船長の心理に及ぼす影響は、此ブリツヂに昇つて、一望唯海波であり、一船これわが配下である時に、決して緩い速力ではなかつた。團扇のやうな此小さな船も彼にとつては偉大であつた。殊に斯く霧の濃くかけた時は、船長は、二千噸の此船を、二萬噸に擴大して見ることも能きた。何故かならば、船全體が霧のために、漠然たる輪廓を以てぼかされ、それを想像を以て擴大するからであつた。

暗がりの中で、誰も見てゐないと知ると、急に二歩許り威張つて、警察署長のやうな格好に歩いて見ることが、大抵誰にもあるやうに、萬壽丸は、巨船の如くに氣取つて航行してゐるやうに見えた。

が、それにしても不思議であつた。室蘭港口に栓をしてゐる大黒島は、もうそこに來てゐなければならぬ筈の時間であり、コムパスであり、海圖であつた。にも拘らず事實は、

大黒島の燈臺も霧信號音も、見えも聞えもしないのであつた。

わが萬壽丸は九ノツトのフルスピードを以て、船長自身ブリツヂに立つて、小倉の舵を命令してゐた。

波田と、西澤とは各々熱心に如何にして汽船の舵を取り、其の方向を保つて行くか、と云ふことを眺め、心で研究してゐた。

彼等は、何も見えない濃霧の中を、コムパスと海圖とだけで、夢中になつて飛んで行く船が不思議で堪らなかつた。

萬壽丸は、その哀れな犬の遠吠を、絶えず吹き鳴らしながら、斯くして進んで行つた。

霧の上に、夜の闇が、その墨を撒き初めた。一切のものが今にも失明しやうとする者の、最後の視力のやうにボンヤリしてしまつた。

と、突然、ブリツヂに立つてゐる者は船長から、波田に至るまで急に飛び上つた。怖ろしい速力を持つた巨大な軍艦が、その主砲を打つ放して、その轟音と共に、此哀れな萬壽丸の軸を目掛けて、突進して來たのであつた。それは全く突進の場合であつた。

「ハールポール」と船長は、舵機を操つてゐる小倉の前へ來て、飛び上り様叫んだ。その聲は絶望的にブリツヂに響き互つた。

て來る船を認めたので、危険信號を亂發したのだつた。幸にして此の無法者は、間際になつてその亂暴を思ひ止まつた。

萬壽丸は「動いては危ない」と許りに、立ちすくんだ盲のやうに、そこに投錨して一夜を明すことになつた。

奇妙奇天烈なる一夜であつた。船も高級海員もソワ／＼してゐた。おもてのものだけは、一夜を樂に寝ることができた。

二六

翌朝萬壽丸は、雪に照り映えた、透徹した四圍の下に、自分の在所を發見した。それは頗る危険な處へ、彼女は首を突つ込んでゐた。

船員達は、自分の目の前に、手の届きさうな處に、大黒島の雪に蔽はれた、鷲の爪のやうな岩石に向き合つて居り、左手に一體に海を黒く、魔物の眼のやうに染める暗礁を見出した。

彼女は、其醜體を見られるのが恥かしさに、抜き足さし足で早朝、何食はぬ顔をして、室蘭港へ入つた。

直ぐに石炭積込用の高架棧橋へ横付になるべきであつたが、ポイラーの荷役の濟むまでは沖がかりになるので、室蘭灣の殆んど真ん中へ、今抜いた許りの錨を何食はぬ顔をして投げた。

機關室への信號機は「フルスピードゴースタイン」全速後退を命令して、チンチンチン／＼とけた、ましく鳴り互つた。船長初め、小倉等ブリツヂにある總ては「打つ衝けた」と覺悟してゐた。

波田に西澤は、何だか全て譯が分らなかつた。

これ等は息をつく間もない瞬間に一切が行はれた。そして、本船はグツと廻つた。波田も西澤も、船長までもが、その馴れに拘らずよろめいた程急速に。そして、今にも衝突しさうに思へた、山のやうな怪物、それは軍艦だと波田と西澤は思つてゐた。は全速力を以て、全て風のやうに左舷の方へ消え去つた。と、その怪物からは續け様にドンドン／＼と轟然たる砲聲が放たれた。

哀れなる小犬の様な、わが萬壽丸は、今は立ち竦んでしまつた、云はゞ、腰を抜かしたのである。無暗に非常汽笛を鳴らし、救を求め、そこへ錨を放り込んだ。

今、これほど萬壽丸を驚かした、軍艦のやうに速力の速い怪物は、百年一日の如く動かない大黒島であり、大砲は霧信號であつた。

わが萬壽丸はその二十間手前まで九ノツトの速力で、大黒様のお尻の邊を覗つて眞つしぐらに突進して來たのだつた。危なかつた。錨が入ると、皆は、期せずしてホツとした。大黒島の燈臺では、亂暴にも自分を目掛けて勇敢に突進し

萬壽丸が屬する北海炭山會社のランチは、直ちに勢よくやつて來た。

とも、おもてのサンパンも、赤毛布で作られた厚司を着た、囚人のやうな船頭さんによつて、漕ぎつけられた。沖賣らうの娘も逸早く上つて來た。

水夫達は、ポイラー揚陸の準備前に、朝食をするために、おもてへ歸つて來た。

食卓には飯と味噌汁と澤庵とが準備されてある。一方の腰かけの隅には、沖賣らう——船へ菓子や日用品を賣込みに來る小賣商人——の娘が、果物や駄菓子などの入つた箱を積み上げて、いつ開かうかと待つてゐるのであつた。

船員は、どんな酒好きな男でも、同時に菓子好きであつた。それは、監獄の囚人が、晝飯の代に食べるアンパンを持つて通る看守を見て、看守はアンパンが食べられるだけ、此世の中で一番幸福な人間だと思ふのと同じであつた。監獄と、船中に於ては、甘いものは、ダイヤモンドよりも貴かつた。

波田は、其全収入を擧げて、沖賣らうに奉公してゐた。彼は、船員としての因襲的な惡徳には浸みない性格であつたが、「菓子で身を持ち崩す」のであつた。彼は極めて貧乏——月八圓——であつた。それなのに、彼は金つばを三十位は、どうしても食べないではゐられないのであつた。然し、財政の方が夫れほど食べることを許さないのであつた。彼は沖賣

らうがいつそのこと来ねばいゝにと、いつも思ふのであつた。そのくせ沖賣らうの来ない日は、彼は元氣がないのであつた。全く彼は「甘いものに身を持ち崩す」のであつた。

此場合に於ても彼は、ソーツと、自分の棚から、状態を出して、その中に五十錢玉が一つ光つてゐることを見ると、非常な誘惑を菓子箱に感じた。

「どうしても俺は仕事着と、靴が一足要るんだがなあ」と考へはした。彼は、その全収入を菓子屋に奉公する爲に、仕事着は、二着つきり、靴はなく、如何な寒い時もゴム裏足袋の、バリバリ凍つたのを履いてゐた。そして、ポースンの、ゴム長靴のペケを利用して、その際の部分だけを、ゲートル流に履いてゐるのであつた。も一つ、彼が菓子以外に如何に金を出さないか、——出せないかと云ふことを知るには、彼の頭を見ればよかつた。全てそれは「はたき」のやうに延びて汚れ切つてゐた。ポースンはそれを氣にして、彼に、特に、一圓を理髪代として貸した——菓子屋の來た時に彼は月二割の利子を取る處のポースンの金を、一圓借りたのである、ポースンも彼には菓子代は決して貸さなかつたが、波田は理髪代と云つた——彼はそれで、一度に金つばを食つてしまつた。

彼は、神様を便所から見付けたが、菓子箱には貧乏神があると思つてゐた。然し、正月になれば、それも何とかなるだらうさ、くよくよしたものでないや」

彼ら自分と言ひ譯をしながら、沖賣らうの姐さんの所有に

「どうだね、うまい菓子があるかね」

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

波田は、うまさうな菓子を一種宛取つて食べた。そして、そのたんびに計算を腹のなかで忘れなかつた。金つばが食ひ度かつたが、これは沖賣らうは持つて來なかつた。

憎な位に醜い女であつた。年は二十三四位に見えた。彼女は、女に生れたことが全く不都合な事だつた。彼女がその髪を延ばして置いて、鏡に向つてその髪を結ぶ時に、きつと彼女は自然を呪ふだらうと思はれた。彼女と一緒に本船の火夫室へ來る沖賣らうは、彼女とは全く違つてゐた。年は同年位であつたが、彼女は北國に見る美人型であつた。

彼女は、水夫たちから、殊に、彼女を見るも氣の毒な位に恥しめる、ポースンや大工等は、彼女が、「印度猿」によく似てると、むきつけて、そうであることが、不都合極まることのやうにほんきに、彼女を罵倒し、そして恥しい目からかつた。

彼女は、それでも一緒になつて、キヤツキヤツとはしやぎながら、自分の商賣の菓子箱の覆るのも忘れて、抵抗したりふざけたりするのだつた。

彼女は、薄暗いデツキの上を、小犬のやうに轉がり廻つてふざけてゐた。彼女が菓子の外に、彼女の肉をも賣ると云ふことを、波田は耳にしたことがあつたが、それは想像するだけでも不可能のやうに思へた。彼女は女性として男性に持たせ得る、どんな魅力もないやうに見えた。汚ない男よりも醜い彼女であつた。

だのに、彼女は、矢張り、噂のやうに菓子以外のものも、提

供することが、ズツと後になつて波田にも分つた。それはポースンの部屋であつた。

これは、蜘蛛と蜘蛛とが、一つ瓶の中で互に食ひ殺し合ふのによく似てはゐないだらうか。

だが、その日は、それ等のことは一切起らなかつた。彼女の菓子は、食事の濟んだ水夫等によつて一つ二つ摘まれた。

ポースンと大工とは、彼女を、波田の寢箱の中へ押し倒すことだけは形式的に忘れなかつた。波田の寢箱の隣では、負傷のために、弱り、瘡せたポリーイ長が、未だ唸いてゐるのであつた。

波田は、ポリーイ長に、朝鮮飴を二本買つてやつた。ポリーイ長は涙を流して喜んだ。

疾病や負傷や死までが、生活に疲れ、苦痛に馴れた人々たちにとつては輕視されるものだ。生活に疲れた人々は、その健全な状態に於てさへ、疾病や負傷の時と餘り違はない苦痛に充されてゐるのだ。人間がそれ程であることは何のためか、誰のためか、何故それ程に人間は苦しまねばならないのか、それはここで論ずべきことぢやない。

面白いことは、此沖賣らうの娘は、おもてのコツクと後になつて、——四年も此れの書かれた後——二週間丈け一緒に賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コツクは世帯道具を賣つ

賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コツクは世帯道具を賣つ

賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コツクは世帯道具を賣つ

賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コツクは世帯道具を賣つ

賣り飛ばされて、夕張炭田に行き、コツクは世帯道具を賣つ

て、ある寡婦の家へ入り、婿となつて、彼れ自身沖賣らうになり、日用品や、菓子などを舟に積んで、本船へ持つて来るやうになつたことだ、が、これはズツと後の事だ。

水夫達の食事が終ると、ポースンは、チーフメイツの處へ仕事の順序を聞きに行つた。

チーフメイツは、グレキンが来るから、それまでのあひだに、ポイラーの方を用意して置いと命じた。

ポースンはおもてへ歸つて来て「今からハツチの蓋をとるぞ」

そこで水夫等はデツキへと出て行つた。

二七

おもてはストキから、ポースン、大工まで、全部出て行つたので、後は傷を負つて、空しく一週間餘りを暗室——それは殆んど暗室であつた——の、寢箱の中で悶え苦しんだ、ポイ長は安井と、おもての通船のおやちと、それから、沖賣らうの其娘と丈けになつた。

沖賣らうの娘は、波田の寢箱の縁へ腰かけてゐた。サンパンの船頭は、ストーヴの前へ腰を卸して、皆黙々としてゐた。

おもての、デツキでは、ビームがデツキへ打つ突る音や、ウキンチの廻る音などで、全て船全體が大鼓でもあるやうに響き互つた。

は、何としても船長さんに願つて、病院へ入院させて貰はにやならん。私の體は、私が大切にしないで、誰が大切にしてくれやうか、私は船頭さんに病院まで負つて貰はう。私はもう、何から何まで自分でやらなけりや駄目だと知つたんだ。

「船頭さん、室蘭にいい病院があるの？」ポイ長は訊ねた。

「あゝ、いい病院があるよ、室蘭病院でのが、山の手の高い處にあるよ」

「そこまで、波止場から、どの位の道程があるの？」

「さうさなあ、十二三町位なもんだらうな」

「それでは迎も一人の力で負つてなんぞ行けない。と云つて、此處では櫓でもなければ迎も駄目だが、それも一寸あるまいし、もし船長が身を入れて呉れないと、今度こそは、自分は航海中に死なねばならぬだらう。」

「市立病院かいそれは？」ポイ長は訊ねた。

「市立ぢやないけれど、公立だよ」船頭さんは答へた「けど、どうしてまた怪我などしたのかい」と訊いた。

「ほら此前の航海ね。室蘭を出帆する日からしてえらい暴化だつたらう。あの航海に、舵機の鎖とカベの間に食ひ込まれたんだよ」ポイ長はその時の様子を、茲で初めて語り初めた。

「その日、私はともの倉庫にキヤベツを出しに行つたんだ

ポイ長は、自分では大して自由にならない體を持ち扱つて退屈し切つてゐた。

「姐さん、わしに少し菓子を呉れないか」ポイ長は勞れ切つた聲で囁くやうに云つた。

「ア、びつくりしたやう。だれかをるだがよ、ここに」と

彼女は飛び上つて、ポイ長の暗室を覗いた、そこにはポイ長が確に寝てゐるのであつた。

「あ、見習ひさんでねえか、びつくりしたやうがよ」彼女は菓子箱を持つて来て、ポイ長の前へ擴げて見せた。

ポイ長はそれを三十錢買つた。そうして、うまさうに、貪り食べるのであつた。

「船頭さん！ 俺今日陸へ上りたいが連れてつてお呉れよ」

ポイ長は船頭へ聲をかけた。

「ア、いいとも、お女郎買ひかい？」船頭は素晴らしく大きい體の、氣のいい五十裕好の爺さんだつた。

「うんにや。わしや怪我したので、病院へ行くんだ」彼は今度こそ病院へ行けると思つた。

ポイ長は思ふのであつた。「わしの怪我をしたと云ふことは、もう誰も彼もみな忘れてしまつてゐるのだらう。わしの怪我をしたことは、全く他の人たちに取つては些細な事なんだらう。だが、それや餘り不人情だらうと思はれる。殊に、私の足は腫んでしまつて、痛くて堪らないんだ。わしは今日

よ。おもてのおやちが、とつて来いと云ふからわ。で、キヤベツを三つ策へ入れて、コック部屋の方へデツキを歩いてると、船が急に傾いたんで、左の足をウンと踏ん張つたんだよ。それがね丁都合悪くデツキが凍つてたもんだから三つて、つい鎖の方まで入つてしまつたんだよ。その時に舵機ががらがらと動いたもんだから、私や鎖に食ひ込まれてしまつてカベの中へ體を半分入れたらしいんだよ。そして俯向けに引きずられたもんだから、胸をひどくデツキへ叩きつけたらしいんだよ。わしは、ポイツとして氣を失つたから、足を食ひ込まれて、ひどくやられたことだけは知つてゐただけだけど、こんなに胸や手やなどが痛むとは、助けられてからでも思はなかつたんだよ。だけど、足はもうすつかり癒つても、デツコをひかなければ歩けないだらうと思ふと、どうしていか分らなくなるよ。俺あ、體より外にもとてがねえからなあ、びつこを曳くやうになつちや、車も曳けないからねえ、そうかつて學問をする學資はないしね、家にや未だ子供が八人も居て、小作の親爺はおふくろと一緒に、それこそ眞つ黒になつて働いても、どうしてもやつて行けねえで、小さな子まで子守奉公に出してあるんだよ。だから俺、少しでも稼いで家に送らうと思つて、収入がいいと云ふ話を聞いたから、船に乗つたらこんな始末だらう。今後どうしてやつて行くか全で分らなくなつてしまつたよ。こんな時いくら貧乏しても

矢張り、父さんや母さんがあると、氣強いけれどもなあ」と語つて彼はホロリとした。

労働力を賣つて生活する此青年も、今其賣らうとする労働力が、大きな障害を與へられたことについては、どこかはつきりしない憤懣を心の底に感ずるのであつた。彼は、負傷後イヒチオールを二三回塗布され、足のガーゼを三度自分で取り換へたゞけてあつた。彼は傷の疼痛のために、非常に瘠せてしまつた。彼のその疼さは、彼の神経を極度に疲労させた。

水夫たちが、仕事に出て行つて、おもてに誰もみなくなる、彼は、今まで貯めてゐた苦痛の叫びを擧げるのであつた。彼は、出任せに何でも叫んだ。そして自分の聲に一生懸命聞き入つた。彼の足の痛みは負傷五六時間を経て、甚しくなつて来た。彼は、その濡れた鉄のやうに力なく疲れた體を、寢箱の中から危くデツキへ落ちさうにまで悶え狂つた。

彼は狂人のやうに叫んだ。そして、それは、彼自身でも、疼痛に對しては、非常にハツキリした意識を持つてゐたが、餘りに、そちらの方へのみあらゆる神経を集めたので、自分の悶えや叫喚には、ボンヤリしてゐるのだつた。

水夫等は歸つて来て、此苦悶の様を見ると「餘り暴れると、却つて傷が悪くなるから、じつと我慢してをれ」と、慰さめるより外に道がなかつた。水夫等はボーイ長の負傷に對

の時の彼の努力は全く夥しいものであつた。彼は、用を達した後は、疲労と疼痛とで失心したやうな状態に陥るのであつた。

彼は、一切のことが、二度目であると云ふやうな幻覺に囚はれるのであつた。それは丁度、濁つた方解石を透して物を見るやうに、一切がボンヤリして二重に見えるのであつた。彼は、ズツと遠い以前からの歴史も、また、たつた今何か考へた刹那的な考へも、二度目であるやうに思つた。その一度は、どこで経験し、どこで考へたかと云ふことを、彼は考へたのであつた。そうして、そこには、彼の以前の生活があつた。飢い、寒い小作人の子としての絶え間なき窮乏の生活が、それも、二重の形を以て展開されるのであつた。小學校時代の暑中休暇のことが、彼の今の負傷して寝てゐる状態と、ゴツチャになつてしまつたりするのだつた。恰度俺は二度目だ」と彼はぼんやり怪我のことを考へてゐるのであつた。「俺はあの時、外の誰もが休んでゐるのに俺だけは、父さんと二人で田の草をとりに出かけたつた。休まねばならぬ時に、俺は、煮え沸る田の水の中草除きをしたつた。俺は休む時を持つて生れなかつた。だが、あの時俺は怪我をしたつた。そして休んだつた。それから、彼の哀れな、疲れ切つた意識は、彼を暑中休暇の田の草とりから、彼を嚴寒の萬壽丸へ引き戻してしまつた。そして彼はまた呻き悶え狂はねばな

して、非常な嫌惡の念を一様に感じてゐた。それは、彼が怪我をしたのが、彼の過失だからと云ふのではなかつた。又、負傷したのが彼だからと云ふのではなかつた。それは、ボーイ長が自分の負傷について、神経を全く疲労させ、身を呪ひ世を呪ひ、遂には絶望的に自分の足までも呪ふやうな、それと全く同じ感情が、水夫等にあつたからであつた。水夫等は、それを意識するとなしに拘らず、そこに、泣き喚き、狂ひ叫び、のた打ち廻る自分自身の運命を、朝も夜も、食事に眠りにも、焼けた鋸でも當てられるやうに、ジリ／＼と感ぜないではゐられなかつたからである。それから逃れる術はなかつたのである。

水夫等は、自分の負傷のやうに、ボーイ長の負傷によつて陰氣にされてゐた。そして自分の負傷のやうに、いら／＼させられた。彼等は、それから逃れやうとして、焦つてゐた。冷淡な、無關心な態度は、彼等が鈍らされた神経を持つてゐることも、も一つは「馴れてゐる」こと、今一つは、その自分自身の運命を、あまりにハツキリ見せつけられることから、免がれようとする心から出たことであつた。

波田は、石油罐の二つに切つたので、便器を拵へて、彼と、ボーイ長の寢箱とが「形をなしてゐる隅へ置いてやつた。

安井は、誰も見えなくなると、その便器へ用を足した。そ

らなかつた。

彼はその疼痛の絶頂に於ては、感ずるのであつた。

「こんな苦痛をハツキリ味は、ねばならないつてのは、何て慘酷なことだらう。それよりも、もつとひどい苦痛を、もつとぼんやりの方がいいのに」など、會體の知れぬことを感ずるのであつた。だが然し、必要もないのに、彼に、これほど長い間苦痛を、わざと見せつけることは、明に、船長の冷酷から来たことであつた。

船には、その船に對して、會社から、傷病費の豫算が請求に應じて提供されてゐるのだ。だがそれは、高級海員の家族の病氣療養費、或は特別収入と云つた方が正當であつた。そして、そのための支出から、かくの如き場合の負傷は、船長によつて「節慾」せられるのであつた。

船に於ける一切の事は、船長だけが土耳其の回教の殿堂内に於ける、サルタンと同様に知つてゐる丈であつた。よ

り緊密でないことが高級海員に知られてゐた。そして、労働者たちは、自分たちに會社から支拂ふ處の食糧費がいくらであるか、それすらも知らなかつた。

若し搾らうとするならば、搾られる者が「何か」——それは極めて詰らぬことだ、二と二とを加へると四となると云ふことでも——知つてゐると云ふことは、それより悪いことを、搾るものが見付けるのが困難であらう。詰り何でも知

らなきやいのだ。知つてみると理屈が多くて困るのだ！
かくておもての「ゴロツキ」共は、完全に何も知らなかつた。自分の手帳まで事務所に取り上げられて仕舞ふのであつた。そして、序に判も。かくて、彼等は、ゴロツキにされてしまふのであつた。

そこでは、何でもふんだくる者が紳士であることは、十八世紀の英國のゼントルマンと些も變ることにはなかつた。そして奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 全く奪はれるものは、いつでも、ゴロツキであるのだ！ 奪ふものと奪はれるものとのある間、ゼントルマンとゴロツキとは絶えないのだ！ 「生存権すら主張が出来ない」ことは、どんなに、ボーイ長を苛立たせたことだらう。そこに人間の生命の疾患に對しての、病院がいくつも覺を並べてゐるのに、彼はそのまま、横濱から又船で戻つてしまつたのだ。そして、それは船長が自分の船のボーイ長が怪我をしたことなどは、チーフメートから聞いたまま、「忘れてしまつた」ことが原因かも知れないのだ。又はそんなものを病院なんぞに入ることには勿論、その怪我が「癒らねばならない」必要を認めない、ことに起因するかも知れないのだ。そして、きつとそうなのだ。

それは確にさうあるべきだ。何故かならばそれは「階級」と「身分」とが違ふからであつた。それは又何故かならば

455
グレインは今、室蘭驛の機關庫の見える方から、その怪物のやうな圖體を、溢々とランチに引つ張られて、萬壽丸を目がけて近づいて來るのであつた。四角な浮箱の上に、二十五噸の重さの物を引つ張り上げるだけの力と、骨組とを持つた鐵の腕と、ウキンチが裝置されてあるのだ、けし粒ほどの小蟻が小金蟲か何かを引つ張るやうに、小蒸汽はそれを曳きなやみつゝ、じり／＼と近附いた。

船の方では、いつでも、引き上げられるやうに、ボーイラーはそのあらゆる拘束から釋放された。今はたゞ大きな腕が、自分をその牢獄から引き出して呉れるのを待つ許りだつた。グレインは近づいた。そしてその偉大な腕を、又ツと本船のハツチの上へ差し延べた。夫から、ワイアローブがブラ下つて來た。そのローブの尖端には人間の腕廻りほどの太さの鉤がついてゐた。この鉤自體が一人では迎も動かないのであつた。そこへ持つて來て室蘭では、この種の荷役に馴れた仲仕があなかつた。その巨大な鉤が上からブラ下つて來て、下から何でもひつかゝりさへすれば、引き上げやうとしてゐるのに、仲仕はたゞ間違問誤するだけであつた。

水夫たちも荷役に手傳つた。が、何にしても足場は、ボーイラーの圓いペンキ塗りの上である。這ること此上もない處へ、夫を縛るワイアローブは、腕の太さほどあるのであつた。間違つくとワイアに、跳ね飛ばされねばならぬ破目にな

「階級」と「身分」とは人間と猿とを距てるよりも、もつとひどく人間と人間を距て、離れたからだ。

かくて、ボーイ長の負傷は、水夫等に何とはなしに、陰惨な印象を與へ、白内障の眼に於ける障害のやうに、いくら拭いても／＼除れなかつた。そして、それは此ゴロツキ共を、布團に紛れ込んだ針のやうに、時々チク／＼とつゝ突いた。且つ針は、いつかは餘りの痛さに「ゴロツキ共」を飛び上らせずには置かないのであつた。

ボーイ長は、自分にとつて何よりも尊い自分の生命のために、相手は船長であれ何であれ、「今日と云ふ今日は交渉しやう」と決心した。そしてそれは藤原に相談すべきであると思ひ決めた。

二八

一方水夫等は、ボーイラー揚陸のために、ハツチの蓋をとり、ビームを外した。そして彼等は、マストの内部にとりつけてある足場を傳つて、ダンブルの中へと降りて行つた。それは嚴重に荷造がしてあつた。水夫等は、それが航海中ゴロゴロ暴れ出さないやうに、それをしつかり据え、方々から引つ張るための作業の困難で、迎も面倒臭かつたことを思ひながら、それを取り外すのだつた。取り外しは、取りつけから見ると、比較にならぬ程手軽に行つた。

454
るのであつた。おまけに鉤は一人て動かない、奴であつた。従つて作業が甚しく困難であつた。

處が、船長が、此ボーイラー揚陸に當てた時間は、極めて短かいのであつた。夫はチーフメートも心得てゐた。チーフだつて正月は横濱でしかかつたことは云ふ迄もないことだ。従つて、之も、ボーイラーを急いでゐた。かくの如く二重にボーイラーは急がれてゐたが、仲仕は人数が少い上に、横濱の仲仕ほど馴れてゐなかつた。仲仕仕事は抄らなかつた。チーフメートはハツチに片足を載せて、

「そのワイアを引つ張るんだ！ 異ふ！ そつちからこつちへだ！ ボースン、そのワイアをあれへかけて引つ張るんだ、そら、シャツクルが外れた！ 駄目だ！ ボースン！ 馬鹿！ 違ふ！ そらホツクをかけて、ヒーポイ、チエツ、また外れた。スライク、スライク！」彼は眞つ赤になつてせり賣りの商人のやうに怒鳴りまくつた。

彼の此の焦燥にも拘らず、ボーイラーはグレインからのホツクに、些も引つかゝらうとしなかつた。チーフメートは、自分の聲で、ホツクをワイアに引つかけやうとでもするやうに、段々其聲を大きく張り上げた。そして、鉤の大きいのは、ボースンや水夫達の責任でゝもあるやうに、ボースンや水夫たちを口汚なく罵り初めた。

紳士の番頭はその地金を現した。

「大工、何故隅へ行く、そのワイアを抜くんだ！ ポースン、何だまゝまいっほろ見たいに、グルグル廻つてやがつて、グルグル廻つたつて、ポイラーは上りはしないぞ、どこへ行くんだ、そら、馬鹿！」 全てポースンが馬鹿であることをはやし立てゝゐるのであつた。

ポースンが、上から見るとたゞ、ポイラーの廻りをグルグル廻るだけのやうに見えると同様に、チーフメートはポースンの周圍をグルグル廻りながら、ポースンが馬鹿であることを、ハツキリ飲み込ませてしまつたより外には、何もしなかつた。

ポースンは慌てゝしまつた。どこから手を出していいか、分らなくなつてしまつたのだ。

藤原はポイラーの上に乗つて、鉤が當然引つかゝるやうな状態になつて来るのを待つてゐた。そして彼は、普段から、餘りに意氣地のない、ポースンや大工が、チーフメートに「糞味噌」に罵られてゐるのに對して、猶更腹を立てた。

「ほんとに貴様等は馬鹿だ！ 奴隷でもそれ程卑屈ぢやないぞ！ 水夫等から月二割も搾りやがつて、豚奴！ チーフメートの野郎、なにか俺に云つて見ろ！ 思ひ知らしてやるから、高利貸の丁稚奴！」

彼は、それこそ、抜けかけたポールトのやうに、ポイラーの上に突つ立つてゐた。

「ストライクか、それや、是非やらにやならないこつた。波田も賛成であつた。

チーフメートはデツキの上で、餅を喉につめてもしたやうに、慌てゝしまつた。

ポースンは下で癪を起しさうに青くなつた。そして、ストキの處へ飛んで行つた。

「ストキどうしたんだね、何か腹の立つこともあつたのかね」ポースンは全てチーフメートが一人出來た、と云つた様にオツ／＼しながら聞いた。

「ポースンは些も憤つてゐない様だね。俺たちや、チーフメートから、仕事を止めると命令されたから、今やめた迄の話さ。そして、荷役の加勢はもう止さう、と云ふことに決めたんだ。陸から、そのために來た仲仕があるからね。それに、仲仕の前で、あゝ我鳴られちや仕事もできないしね」藤原は答へた。

「そんなことを云はないで、頼む、後で何とでも話をつけるから、氣を直してやつてくれ、わしなんぞはどうだ、まるで畜生だが、頼むな、ストキやつてくれ」ポースンは、自分が畜生のやうに云はれることを知つてはゐたのだ。だが、ポースン對チーフメートの關係と、水夫對チーフメートとの關係は全て違つてゐた。

前者には、高利貸とその手代と云ふ關係があり、後者は、

ホツクはうまく彼と、向ひ合つて立つてゐる波田との間へ下りた。波田は腕程の太さの、ワイアの鉤穴を持ち上げた。それは一秒間とは持ち續けることの出来ない重さであつた。藤原は、ホツクを、彼の體の重みを凭せて、波田の持つてゐる鉤穴の方へ揺がした。それは丁度そこへ行つたが、少し足らなかつた。

駄目だつた！ 嵌らなかつた。

「何だ、ボケナス、どうして嵌めないんだ！ 馬鹿！ 止せッ！」 チーフメートは頭から、ストキへ罵聲を吐きかけた。

「波田君、降り給へ！ チーフメートが止せと云ふ命令だ」そのまゝ藤原は、ポイラーからワイアを傳つて飛び下りた。

波田も續いた。

「どうした、ストキ、どこへ行くんだ！ 畜生！」 チーフメートは全て狂つてゐた。

藤原は下へ降りて、西澤をデツキから見えない處へ呼んだ。

「君、仕事があれてやれるかい、馬鹿とか、止せとか、怒鳴り散らされて？ え？ 止さうぢやないか、俺達あ、船を棧橋まで着けないで下船しちやはう、馬鹿馬鹿しいや！ 奴隷ぢやねえや」藤原はジロリとポースンを睨んだ。

「止せ！ 止せ！ 全く、こんなボロ船いつだつて下りるぜ」西澤も賛成した。

高利貸對労働者と云ふ關係であつた。

「やるもやらぬもねえぢやないか、吩咐を守つて、止めてる丈けのもんぢやないか、ポースンもさつきから大分やめると云はれてゐるやうだが、止さないと後で又うるさいだらうぜ」

全くポースンにとつては、どちらにしても、後でうるさい、面倒な事になつたものであつた。

ポースンは、ストキから、西澤、西澤から、波田へ、その禿げた頭をつる／＼撫てながら、一生懸命で、仕事をして呉れるやうに頼んだ。

デツキでは、チーフメートは青くなつてしまつた。彼は様子が悪いことを見てとつた。然し、どうにもならなかつた。グレインの方では、チーフメートの合圖一つで、いつでも捲き上げやうと、腕をたくし上げて待つてゐるのであつた。デツキの上に、チーフメートの怒鳴るために、人のことながらウロウロしてゐた仲仕たちは、俄にポイラーの上から、水夫達が下りたので、茫やりしてしまつた。

二九

チーフメートはデツキから、ポースン！ と怒鳴つた。ポースンは、慄々慌てゝ、慄々急にその禿頭を撫てゝ、頼むのであつた。「ソラ怒鳴つてる！ 後生だから此ポイラー

だけ上げてくれ。その後でいくらでも話はつくぢやないか、ホラ、また喚いた。頼む、ストキ、西澤、ナ波田頼む」
 彼はこんなことを喋りながらも、チーフメートの聲に應じて、その度に、マストの梯子まで駆けて行つては、又、驅けて歸るのであつた。「ね、おい、やつてくれるだらう。な、おい、頼んだぜ。」

「俺たちやチーフメートの命令で止めたゞけのもんだ。ポースンからやつて云はれたつてどうも、やるわけにや行かないぜ」ストキは頑張つた。

「困つたなあ、ほんとに、チヨツ！ 頼む、わしは今一寸チーフメーツさんが呼んでるから上つて来るから、その間頼むよ。いゝかい。俺を助けると思つて。な」

ポースンは發育不良な、旅藝人のジョーカー見たいな格好で、マストにとりつけてある梯子を上つて行つた。

三人の水夫は、そこに腰を下してしまつた。彼等は、彼等の力が偉大であると云ふことを知つた。僅か三人のセイラーであつた。然も、それが、たゞ何とも云はずに、ポイラーから下りたゞけであつた。それだけなのに、此ポイラーが動かず、あのグレインが空しく待ち、仲仕が徒手傍觀し、本船の出帆が後れ、チーフメーツは青くならなければならぬ。そして、これは、たゞ労働を一時中止すると云ふだけの簡単な理由からなのだ！ そしてこれは、社會の一切の根本は、

ストキなんだ。だから波田君なんざ、僕よりもいつも進給が遅いんだ」西澤は自分たちのことを例に話した。全く藤原はその驚くべき獨學の努力のお蔭で、學校出の船長などよりも、遙によく社會的事情にも、一般學術的常識にも、通じてゐた。

小倉は藤原から、英語、數學、其他の學科を習つた。彼は高等海員の試験を受ける積りで勉強してゐるのであつた。小倉も頭はよかつたので、一年餘りでナショナルリーダーを五まで上げてしまひ代數は高次までやつてしまつたのであつた。そして、船長にしろチーフにしろ、頭腦が明晰な爲に、その地位を得たのではないことを知つたのだつた。だが、小倉は、自分の位置を、高めることによつて、酷使と隸屬と侮辱とから、逃れ様としたのであつた。そして、それは結局彼一人を救ふことすら至難であり不可能であることがあらゆる努力を盡くして後、彼を敗殘の身にしたことに依つて分つたのであつた。彼は非常に壓迫を憎んだが、身を挺して反抗しやうとする代りに、權力の壁にくつついて身を隠さうと企んだため、卑怯になつたのだと、水夫達から云はれてゐた。

ポースンはデツキから下りて來た。そして三人が煙草を喫んでゐる處へ來て、チーフメーツは非常に憤つて、直ぐに下船を命ずると云つてゐたが、自分はやつと頼んで、止めて貰つて來たから、どうか、一服したらすぐに荷役にとりかゝつ

労働者の労働によつて、維持される、と云ふことを語るものだ。極めて簡單であるのに、我々の知らされない、唯一の事實なんだ！

水夫たちはそんな風を感じて、煙草に火をつけた。

藤原は、西澤と波田とに、「これは未だ何でもないんだ。僕等は、こんな詰らない理由でストライイクには移れない。これは、労働者の發作的の癡癡だ。ストライイクは發作的に無計畫に起れば、必ず失敗するものだ。然し、これでも、事に依ると本とうのストライイクの、口火にはなるかも知れないけれどね。ストライイクの總成員三名なんてのは、古今未聞だらうね。」

「僕等は、然し、此船の船長や、チーフや、ポースンには、あらゆる機會に反抗しなきゃならぬんだぜ。船長チーフメーツは共謀で、俺達宛の食費を、會社から前月末に受取るものだから、それをポースンに月二割で、おもての者に貸しつけさせてるんだぜ。見る、だから借金しないと、給料も上らないし、受けが悪いぢやないか。向う半年も頭なしの奴はどん／＼給料が上がるぢやないか、奴等は、借金の利子を回収する爲だけで、給料を上げるんだ。だから、彼等は俺等に女郎買を奨励するんだ。借金があれば、月二割の途方もない利益があるのと、それに頭を上げられないし、足止めすることも出来るんだから。だから藤原君なんか、いつまで立つても

て貰ひ度い、そうしないと、チーフメーツは、すぐポイレンへ代りを連れに行く氣であるのだから、と云つて來た。

藤原は、産業豫備軍が海員に於ては、組織的に、ポイレンに依つて動員準備されてある、且つ事情不明のためストライイク、ブレイキングが平氣で行はれることを知つてゐた。そして此場合も夫れが行はれ得ることを知つてゐた。で、彼は、仕事につくことが得策であることを知つた。

「それぢや、一服したらやると、チーフメーツへ返事して來てくれ」と、譯なくストキが承諾したので、躍り上つたポースンはデツキへ上つて行つた。

藤原は、西澤と、波田とに、形勢は全く不利であるから、これは時期を見なければいけない。これほどの少數で、完全に勝つためには機會を握ることが第一だ。その時は今ではない。だから、その時を待つて力を示すために、今は忍んだ方がいい。それに今はなんでもないことなんだからと、種々と話しをした。

「だが、今はいい時だがなあ、正月前だし、横濱にはギリギリに歸れるかどうか、と云ふ時なんだからなあ。條件が揃つてゐるんだがなあ、たゞ冬であるつてことが悪い丈けだ。ポイ長は雇入れなして負傷させて打つ捨てあるし、俺達は、全く馬車馬か奴隷か甘んずるなら、それでもいいだらうけれど、——それに、いま時分、室蘭に休む者はありやし

ないと思ふんだがなあ」と波田は主戦論を唱へた。
「だから、今は仕事をしなければならぬんだらう。今は、
室蘭に休んでる者があるか無いか、ハツキリしてないから、
今は仕事をしなければならぬんだらう。其代り、今夜上陸
した時に、僕等は休んでる者が有るか無いかを探ることが能
きる。で、若し出来ないと思ふことになれば、出帆間際に船を
動かさないことが出来るだらう。横濱まで、電報でセーラー
を呼ぶにしても、いくら早くても、四日や、五日はかゝるだ
らう。おまけに正月だ。正月早々なんだ。ね。それに、ボー
イ長を今日どう云ふ風に取り扱ふか、それを見なくちや、若し
ボーイ長に對して、全然船から救護しないと云ふことになれ
ば、僕等は機關部の方にも櫂を飛ばして、全船の問題としな
ければならぬと思ふ。

まづいのは、三上の問題が、未解決で残つてることなん
だ。船長側では、それを仕掛の種に使ふだらうと思はれるん
だがね。

要するに、ほんとに、僕等の力がその一切を現し得るの
は、一切の奴隷的條件が、僕等に痛切に感得され、彼等の野
獸的殺戮振りが曝露される時だけなんだ。その時は、當分來
ないか、又は明日の朝來るか、僕等が、ジツと見張つてゐ
なければならぬことなんだ。ね。だから今よりも、いつか、
もつと彼等の暴虐が露骨に現れて、われわれの生命を直接に

も、——間接にも顧慮することなく、反つて損傷すると云ふ
事實がハツキリした時の方がいいだらう。と、僕は思ふんだ
がね。藤原は條理を盡してその本質と、作戦とを述べた。
ボースンは降りて來た。衆議は一決して、藤原と波田とは
ボイラーの上に、西澤は、船底で夫々の仕事の持場につい
た。

ボイラーは、ハツチの口よりも長かつたので、非常にその
作業は困難であつた。けれどもその日の夕方には、三本のボ
イラーをうまく無事に積卸すことが出來た。
倍、それから、萬壽丸は、高架棧橋の、石炭漏斗の下へ、
そのハツチの口を持つて行かねばならなかつた。

三〇

ボイラーが、舽へ積み込まれると直ぐに、わが萬壽丸は、
高架棧橋へ横付にするために、錨を巻き初めた。

錨を巻き初めると、おもての室の中は、一切合財がガラガ
ラに緩んでしまひはせぬかと、氣が揉めるほど震動した。轟
き互つた。ボーイ長は、その弱つた神経が壊れるのを、心配
するやうな格好で、耳に栓をするのだつた。

水夫室の眞ん中にある蓋をとると、その下が鎖鎖の入る箱
(チェンロツカー)になつてゐた。それはすつかり鎖が出切
つた時、其處の廣さは、横六尺、縦六尺五寸、高さ十尺位で

あつた。そして、それが二つ並んでついでゐた。上で捲き上
げる鎖は、デツキの穴を通つて、此箱の中へ送り込まれるの
であつた、それを此箱の中では、波田が、一々、鎖を順序よ
く並べなければならなかつた。そうしないと、鎖が穴の下へ
溜つて固へてしまふのである。

波田は、此箱のドブドブの中へ、カンテラを掲げて入るの
であつた。そして、金棒の先の鉤になつたのを、落ちて來る
鎖に引っかければ、順序よく並べねばならなかつた。それは
急がねばならぬし、力のいることだし、狭い處だし、濡れて
ゐて迂ることだし、暗くはあるし、油煙は立つし、息苦しく
はあるし、そして、また、時々鎖から鉤が外れると、肘で後
ろの壁を力一杯つき飛ばすのであつたし、鎖が一杯になつて
來ると、彼は、鎖の中に危く身を構へて、それに挟まれぬや
うに作業しなければならなかつた。これは一航海に一度でも
うんざりする仕事であつた。それを、彼は、昨日の朝から、
二度目であるのだ。

波田は暗い顔をして、チェンロツカーへ下りて行つた。彼
は全く、それへ入る時は地獄へ下りて行くやうな氣がするの
であつた。

彼はチェンロツカーについて悲惨な物語を聞いてゐたが、
それは、いつでも彼がチェンロツカーへ入る場合に、彼の記
憶の中から、ムク／＼と起き上つて來ては、彼を脅すのであ

つた。

それは一九一〇年代の事であつた。英領植民地のシンガポ
ーアの、マレーストリートとベンダストリートとの二街に、
赤色煉瓦の三階建の長屋が兩側二丁餘に渡つて續いてゐた。
其長屋は全部日本人の娼婦の居る家であつた。そこは、日本
内地の都會、例へば、横濱とか神戸とかに於る遊廓より
も、數も多く、規模も遙に大きかつた。其頃は船員はゴロツ
キが多かつた。それはほん者のゴロツキであつて、陸を食ひ
つめた博徒などが、舟乗りになつてゐた。そして、船長など
と云ふのも如何はしいものが多く、これ等の船員と結託して
は密航婦を、シンガポールだとか、ホンコンだとか、又はア
ントワープだとかの遠方までも、大仕掛で輸送したものだ。
その運賃は高率であつて、それに食費は向ふ持ちであつて、
おまけに船員が航海中最も惱む處の性慾に對して、密航婦を
積む以上、好都合なことはなかつた。

密航婦はどんな状態でも、我まんしなければならなかつ
た。哀れな彼女等は、フオーアピークの中で、窒息して死ん
でしまつた程にも、我慢しなければならなかつた。彼女等は
ビール箱の中で五晝夜も、云ひやうのない状態で、半死のど
たん場まで我慢しなければならなかつた。

殊にチェンロツカーと彼女等との關係は慘鼻を極めた。そ
れは、密航婦を船長とボースンとが共謀で、チェンロツカー

の中に隠したのであつた。チェンロツカーは、出帆したが最
後、入港までは用のない處なのだ、その暗室の鎖の上へ彼女
等は、蓋を敷いて寝てゐたのだ。彼女等はシンガポアで上
陸して、その遊廓に賣られるのであつた。水火夫等は毎夜、
そのチェンロツカーの蓋を開けてやつた。彼女等は、運動に
出された禁錮囚のやうに喜んで、おもての船員たちの室へ來
て、出して貰つた禮として、××××××××××××××××。

彼女等にとつても、その航海はビール箱や、フオーアビー
クなどよりも、×××であつたに違ひなかつた。船員たちは浮
れ氣味の航海を續け、彼女等は一日も早く、動揺しない大地
を踏みたいと希つてゐた。

ところが、ホンコン入港の時は、密航婦を、フオーアビー
クへ移しかへることを忘れなかつたボースンは、何と考へ違
ひしたのか、大切のシンガポアで、有頂點になり過ぎて
ゐて、密航婦を、チェンロツカーから出すことを忘れてしま
つた。

そこで状態は、投錨の際に一度に悪化した。鎖の各片、人
肉の各片、骨の各片、席の破片ともつれつ、くんづして、チ
エンホールから、或は虚空へ、或は鎖と共に海へ、十三人の
密航婦を分解、粉碎して、はね飛ばしてしまつた。船首甲板
に立ち並んでゐたボースン、大工は勿論、水夫、チーフメー
ト等は肉漿を頭から浴びた。

萬壽丸は斯くして棧橋へ横付になることができた。

棧橋の上は、夕張炭田から、地下の坑夫等の手によつて、
掘り出された石炭が、澤山の炭車に満載されて、船の上の漏
斗へ來ては、それを吐出して歸つて行くのだつた。

數十間の高さに、海中に突き出してゐる高架棧橋上の驛夫
や、仲仕の仕事は、例へやうに困る程寒いものに相違なかつ
た。

人はストーブにあたつて、暖いコーヒー、暖い肉を攝るべ
き時候であつた。そして多くの労働者は、それを作り出すた
めに、各々、危険と鼻面を突き合せて、凍え、飢え、彷彿に
ながら、労働すべきであつた。で、一切はお芽出度く其通りに
進行し、幾千代かけて長閑なる年の初めが、十日の内には來
るべきであり、又、芽出度くも唇さへ間違ひなくば來るので
あつた。

そこでブルジョア共は新年宴會をやるのであつた。二次會
が開かれるのであつた。

三一

ボイラーを吐き出すと、すぐに飯を食つた水夫達はそのま
ま船首甲板へ上つて、棧橋横付の作業にとりかゝつた、ボー
イ長は、食事の時に藤原に頼んで、

波田は、チェンロツカーが、そんな歴史を持つてゐること
によつて、その困難な労働を猶一層不快いやな、堪へ難い
ものにした。それを思ひ出すと、彼は全くチェンロツカーに
入ることが、何よりも厭であつた。そして、入つて來る鎖の
一片一片が、全て、自分を毟つて飛んでゆく來るやうに感じ
るのだつた。

彼は肉體的には勿論であるが、精神的にも此上ない疲労を
感じて、チェンロツカーから上つた時は全て溺死しそこねた
人のやうであつた。

その仕事着には海底の粘土、が所きらずにくつついてゐ
て、彼の手や顔は、夫で彩られて、隈取りしたやうに見え
た。顔の色は劇動のために土色であつた。心臓は無暗矢鱈
に、跳ね上つた。頭が痛く、眼が眩んで、彼は、暫くデツキ
へ打つ倒れるか、その邊にあるどんな處へでも、打つ倒れる
のが例であつた。

誰もが、此チェンロツカーに入らなかつたならば船は動き
得ないのであつた。波田は、破れさうな心臓に苦しみなが
ら、どんなに多く與へ、少し得てゐるかを思はずにはゐられ
ないのであつた。

「俺達は死ぬほど苦しんで、こんな有様なのに、遊び抜い
て、住みもしない別荘を、十も持った人間が、此船を持つて
るのだ！」

「今夜は是非病院へやつて貰ふやうに、船長に頼んで呉れま
せんか、もう此上とても辛抱がなりません」と云ふのであつ
た。

「いいよ。だがね。今から、棧橋だから、棧橋へついてから
にした方がいいと思ふよ。それに先づ、そんなものはどうで
もいゝとしても、順序つてもがあるさうだから、ボースン
に一度話して、ボースンから最初に話し込んで貰つて、僕
も、その時、一緒に話をつけて話をつけて貰ふよ。ま、何にしても、苦しいだらうが、今夜まで待つて呉れ
給へね。今度は僕も、その積りであるんだから。」と藤原は快
よく、請合つて呉れた。ボイ長は非常に喜んだ。

棧橋にも、馬蹄形の街にも、その後ろなる山も、高原も、
みな、美しく、厚い、雪で念入りに蔽はれ、雪面を吹きまく
る北海道の風は痺れるやうに痛かつた。

萬壽丸は棧橋へついた。棧橋の漏斗はその長い嘴を、船の
ハツチの中へ差し覗けた。それからは白い雪の代りに黒い石
炭が降つて來た。

船員たちは、船長から、水火夫に至るまで、自分を、完全
に縛りつけてゐる、その動揺する家屋から、解放しようとし
て、それ／＼準備に忙しかつた。

船長は、室蘭から少し内地へ入つた登別と云ふ温泉地へ、
室蘭碇泊中は必ず泊り込んでゐた。そこには、彼の妻や子供

の代りに、彼の愛妾がゐるのであつた。
 一般に北海道に美人が多いかどうかは、分らないが、然し、飛び抜けた美人を時々、我々は北海道で見る。色が「抜ける」程白くて、顔立ちの非常に高雅な美人を、われ／＼は、雪に埋もれた山腹の遊廓にさへ見出すことが出来た。それは寂しい情景であつた。船員たちにとつては、彼等の手に負へない夢幻的な情緒であつた。従つて水夫たちにとつては、それは本能的な、肉慾的な、一對照より以外ではなかつた。
 彼は、今夜も、そこへ行くために、汽車の時間表と睨めつことをしながら、仕度を急いでゐた。

船長が、そのダイアモンドのピンを、ネクタイに「優雅」に挿さうとしてゐる時に、純白の服を着けたボーイは船長室の扉を叩いた。

「何だ？」船長は怒鳴つた。

「ボースンとストキとが、お目にかゝりたいと云つて、サロンで待つて居ります」

「用事だつたらチーフメイツへ話せ、と云へ」彼はピンの格好について、研究を續けた。ボーイはサロンに待つてゐた、ボースンとストキに、その由を傳へた。

「それぢや」と、ボースは、それをいいしほに、ストキに云ひかけた時であつた。

「どうしても、會はなきゃならないんだ！ 是非、會ひ度い

つて、も一度取次いで呉れ給へ」ストキは、ボースンを抑へてボーイに云つた。

ボーイは「何だい一體」とストキに訊いた。

「ナアに、一寸會つて話せばいいことなんだよ。」氣輕に藤原は答へた。

「奴さん、登別に行くんで、急いでるんだよ。」

「ところが、こつちもつと急ぎの用事なんだ、一寸頼む」ボーイは再び船長室の扉を叩いた。

「是非お目にかゝり度いと云つてゐます」

「駄目だ！ 時間がないんだ！」船長は鏡の中の自分に見入つてゐたが、チエツと舌打ちをした。「うるさい奴等だ、用事は何だと聞いて見る」馬鹿野郎奴等が、と、彼は考への中てつけ足した。——手前達全體の運命は横濱までだ。代りのボースはもう横濱まで來てるんだのに、馬鹿野郎等が——船長は蛆蟲共の低能さに對して、一寸冷かしてやつてもいい、と云ふ氣を起したほどであつた。

「ボーイ長の負傷の手當をするために、室蘭公立病院へやつて頂きたい、と云ふのださうでございます」

「ボーイ長！ そんなものは駄目だ、と、そう云つとけ」何だ一體ボーイ長の負傷とは、馬鹿な。そんなものが船の費用から出せるかい。筈棒な。冗談も休み休み、機を見て云ふがいいんだ。時もあらうに、自分等の首の運命の決してゐやう

と云ふ時に、それに今は上陸間際ぢやないか、ゴロツキ共奴が！ 船長は、ボーイ長が負傷をしたことを、今、言はれて見て、思ひ出すには出したのであつた。そして、それは手當をしなければならぬであらう。——が、——それはこんな場合では勿論ない筈だ！ と彼は思つたのであつた。

一體それはいつのことだ。横濱でやるべきではないか、今頃になつてそんなことを云ふのは因縁をつけると云ふものだ！ 然し、これは彼の思ひ違ひであつた。横濱では船長に話す間がなかつたし、それに、チーフメイトは、船長に相談してからにすると云ふので、横濱では、フィになつたのであつた。

船長は、登別の温泉に、彼女——それは全く美しい若い女であつた。そしてそれは、白樺のやうに、山の匂の高い、澄んだ溪流のやうに作爲のない、自然人であつた。——をしつかりと、そのあらゆる力と情とを藏めて、彼女を抱き締めることの回想と豫想とで、血腥い、汚れた、現實的な、ボーイ長の問題なんぞは、その餘地を頭の中へ置き得やう筈がないのであつた。

「どうしても、それが必要なら、それはチーフメイツがうまく片をつける事柄なんだ！」船長は、ズボン——押し出してしまつた後の繪の具チューブかなんぞのやうに、ピツタリ一重にくつついた——の中へ足を通した。

「北海道ぢや一寸類がない、すが／＼しい氣持なもんだ。ズボンの折目の立つてゐるのは、」彼は一寸足を前へ踏み出すやうに振つて見た。「上等」それで彼のズボンの試運轉は通過した。

彼は十八の少年のやうに急ぎながら、彼女に與へる指輪を、自分の小指へ光らしながら、理想的に船長らしい、スツキリした立派な服装と、その姿勢とを、サロンドツキへ現はした。

そこには、その寒さにも拘らず、ストキとボースンとが立つて、彼の出て來るのを待つてゐたのであつた。彼はハツとして立ち止つた。

ボースは、とつ掴まへられた、コソ盗棒見たいに、しきりに尻ごみしながら、ストキに掴まれ、勵まされて待つてゐたのであつた。が、彼は一體、何を云へばいいのだ！ 彼には言ふべきことはなかつた。怪我をしたのは見習であつて、女房子を持つた哀れな、老いた彼ではなかつた。

「俺は此船を放り出されたらどこへ行くことが能きるんだらう。橋の上か、墓場かだけぢやないか、俺は今、俺のためよりも、子供等や家内のために、働いてゐるだけのものだけに、俺は、……ストキは全く困つたことをさせるわい。見習の怪我と俺と一體、何の……そりや關係はあるにしても、船長が一度いかんと言つたものをナア……俺は、第一寒くてや

り切れないや」
 ポーソンは、ストキの顔を切端詰つて拜むやうに眺め、そして又、船長に慌て、敬禮をした。
 船長は黙つて行き過ぎやうとして、トラップの方へ歩みかけた。

ストキはポーソンを小つ酷くつゝついた。ポーソンは眼だけをパチ／＼させて、口は固く噤んでゐた。それは一秒遅くてもいけなかつた。續いて第二發目のストキの拳固がポーソンの横つ腹へ飛んで來た。と同時に、
 「船長」と太い、低い、重々しい聲が壓へつけるやうに、ストキの口から呼ばれた。

そして、ストキは、ポーソンを打つ捨らかしたまゝ、船長が今下りてゆかうとするその前へつゝ立つた。

「船長！ 水夫見習の安井昇つてのが負傷したのは知つてますか、それが、今日は病院へやつて貰ひ度いと云つてゐるんです」

「それがどうしたんだ」と船長は頭の尖から、足の爪先まで、ストキの長さを眼で測量した。「上陸禁止にでもなつてゐるのか、そうでなかつたら、今日でも明日でも病院へ行けるぢやないか、だが何だつて、お前はそんな處に立ち塞がつてゐるんだい。」船長は、暴化の時に、夜中、深海測定をやるのと同様に、嚴密に、幾度も幾度もストキの長さを、全く腹

が立つて頭の熱くなる程の、熱心さと冷靜さとで測定した。
 藤原はそのあらゆる激怒と、憤懣とを、船長の前で、そのしつかり踏んだ足の下に踏みつけて立つてゐた。
 「だが、負傷手當を船から出すべきぢやありませんか。それに、足を負傷して寢てゐるものが、此の雪の中を歩いて行く」と云ふわけにも行きませんからね。俵賃と、診察料とを拂つて下さいまし。それに、……」

船長は、爆發した。
 「負傷手當を船から『出すべき』だ？ べきだとは何だ！ べきだとは！ そんな生意氣な横柄なことを云ふんだつたら、どうとも勝手にしろ、俺は、手前等に相手になつてゐる暇はないんだ！ 馬鹿な！」
 船長はさう怒鳴りつけると、そのまゝ、棧橋へと下りて行つた。

藤原は自分の足の下に踏んでゐた疝癪玉を、そうと、矢つ張り抑へつづけた。彼はアハ、ハ、ハ、と、船長の後ろ姿に向つて嗤笑を浴せかけた。

船長は棧橋の上へ飛び上つた、ポケットで金が鳴つた。彼は、ひどく怒りはしたが、先を急いでゐた。「明日、片をつけてやるから」と自分をなだめながら、棧橋の闇へと消えて行つた。
 彼は、暫くすると、殆んど全速力で駆け足に移つた。何だ

か、メスが、自分の心臓に向つて光りさうで氣になつてゐないのであつた。この頃は、おかしい。三上——藤原——、どうもよくない傾向だ。彼は、後を振り向いた、狐のやうに幾度も幾度も振り向いた、棧橋は黒く、眞つ暗であつた。本船の碇泊燈が、後ろに寒さうに悲しく瞬いてゐた。

やがて棧橋が盡きて、海岸に出た。雪は二尺餘り積つてゐた。海岸に小溝のやうに深く雪道が踏み固められてあつた。

室蘭の町は廢墟のやうに、雪の灰の中から處々覗いてゐた。人魂のやうに街の灯が、港の水に映つてゐた。呪の聲を揚げて風が波をつき刺した。彼は外套の襟を立て、首巻を耳まで巻いてフルスピードで停車場の方へと急いだ。

停車場は室蘭の町をズツと深く入り込んで、馬蹄形の一端に寄つた方にあつた。淋しい、終發驛であつた。停車場は海岸の低地にあつて、その上の方には、遊廓の灯が特に明るく光つてゐた。

冷酷な、荒涼たる自然であつた。その前では人は互にくつき合ひ、互が、互に温め合ひ、扶け合はねばならぬやうに感ぜしめられるのであつた。

何だか、人なつこくなるのであつた。

船長はストキや船員を反撥して、登別へ引きつけられた。そこでは彼は自然の冷酷さから暫く逃れ得るのだ！
 ストキは喚くやうな笑を船長に浴せると、そのまゝグルリ

と振りかへつて、おもての方へ歸つて行つた。

ポーソンは、悄々といつて行つた。

おもては、大工は、ポーソンが來るのを、仕度をすつかり済まして居り、水夫達は藤原の歸るのを待ち草疲れてゐた。

藤原は、おもてへ入つた。食卓の前のベンチへ倒れるやうに腰を卸した。

「どうだつた」と皆は訊いた。

「駄目だ！ 今度はチーフメイトだ」と彼は答へた。若し彼は、彼がボーイ長が診察を受け、治療を受ける丈の金を持つてゐたならば、チーフメイトへなんぞ、再び交渉に行く譯がなかつた。その結果は、餘りに彼にはハツキリ見え透いてゐる。けれども、彼が若し、ボーイ長を自分の費用で連れて行き得ない限りは彼はありとあらゆる手段を試みる必要があつたのである。そして、夫は、又、彼を救ふと同時に、ボーイ長を絶望から、暫くでも引き止めて置く處の、唯一の残された方法なのであつた。

「チーフメイトの方もどうなるか分らないから、若し、それが駄目だつたら、おもてで出し合ふつてことにしやう。そうすることは、全て船主に口へて呉れてやるやうなものだが、此際仕方が、外にあるまい。そして大丈夫チーフメイトだと思ふんだ。船長の許さないものを俺が、と云ふに相場は極つてゐるんだ。だから、一人頭二圓宛位金を集めて置いて呉れな

いか、それはポースンに頼まう。今持ち合せのない者は、ポースンに立て替へて置いて貰ふこと。と云ふことにしてゐたらしいだらう。ね、僕は、チーフの處へ行つて来るから、頼みますよ」

彼は出て行つた。波田は、彼が出て行つて暫くすると、ポースンに、五圓貸して呉れと頼んだ。そして二圓をポイ長へ割いて、三圓を懐へしまひ込んだ。そして、彼は、デツキを通つて、チーフメートの室の附近へ行つて、藤原の交渉を聞かうと試みた。然し、チーフメートの室は固く扉に錠が下されて、人の氣配がしなかつた。彼はサロンドツキを一廻りした。けれども何事も、そこでは起つてはゐなかつたし、又、誰もそこにはゐなかつた。

波田は——それでは、藤原君はどこへ行つたんだ？——と思ひながら、おもてへ歸つて來た。

藤原はもう歸つて來て、水夫達に、チーフメーツは、船長よりも先にサンパンで、海から上陸した後だつたことを報告した處であつた。

そこで、ポイ長をどうしよう、と云ふ相談が水夫等と、四人の舵取りとの間に行はれた。

三三

相談の結果、病院が夜では都合が悪くはないかと云ふ動議

のあつたため、成程、それは晝の方がいいだらう。では明日午前中に、行くことにして、序と云つては濟まないが、この事件の最初からの關係者として藤原君と、波田君とに、病院までついて行つて、貰はうと言ふことになつた。金は五人の水夫と、四人の舵取と、一人の大工とで二圓づゝ出せば、二十圓あるから、それで、若し必要ならば入院させて、とでも入費を持たないと云ふやうなことであつたら、おもてて持たう。その代り、ともの奴等は覺悟をするがいいや、と云ふやうなことになつた。

安井は、その汚ない、暗い、寒い寢箱の中で、その傷の疼痛のために、時々顔を擧めながら、一生懸命にこの成行きを聞いてゐた。そして、藤原のそれ程の努力にも拘らず、また、明日に延びたと聞いて、彼は心持ち持ち上げてゐた、その頭を又ぐつたりと落してしまつた。今夜は病院へ行けると云ふ、彼にとつては唯一の歡が消えてしまつたのであつた。彼は、今までと「同じ」一夜を又、此の船室で苦しみ通さなければならぬと云ふことに、眞つ黒い絶望を感じたのであつた。

然し、何ともならなかつた、事情は彼も聞いてゐた通りであつた、ともの人間にとつては、彼は、その生命でも一個の價値なきものだと思ふことが、念入りに繰りかへされて聞かされたに過ぎないのであつた。そして、彼は、自分の生命

が殆んど、生れ落ちてから、一個の價値もなく、それは恰度産みつけられた蛆が大きくなるやうに、大きくなつたのである。いつでも、彼の生きてゐることは、外の誰かの生きてゐること、そのパンの分配の時に、怖ろしく窮屈な思ひをしなかつたことのなかつた、彼の全生涯——僅か十八年ではあるが、その中の確かに十四、五年を占める——を、その傷の疼痛と共に、彼に手酷しく思ひ知らせた。

「いつそ、産れなければよかつた」と思はれる程、或は事實に於て、その人間を餓死か、自殺かに導くやうな、いつそ、死んでしまつた方がましだ」と痛切に感ぜざるを得ないやうな状態が、何故存在するのか？そして、それは永久に存在しなければならぬのか？

一方には「腹が空かない」と云ふ「病氣」のために、薬を飲む階級があり、一方には「飯が食へない」と云ふ「健康」のために死ぬ階級があると云ふことは、地球が圓く出來てること、同様に、何とも仕様のないことであるか？それは時が、種を植えて居り、その種が生へて居り、既に實つて居る處もあるのだ、だが、傍路へ入つてはならない。そんなことは餘りに分り切つたことなのだ。それは矢つ張り、飯の食へない、健康體の人たち、即ち労働者たちが、命じられてゐる仕事の一つなのだ。

藤原は、ポイ長の寢箱の傍に腰を下して、今日の願末を

話した。種々と其成行を述べて、かう云つた。

「労働階級は、君の場合のやうに、ハツキリ現はれた場合丈け、資本制生産のために、其生命の危難に面すると云ふことを覺るのだが、それは實はもう遅すぎてゐるんだ。賃銀労働者であることが、既に××を搾取されてゐることなんだ。だから、工場法にだつて、生命を失つた場合に、その生命に對する支拂額のミニマムが決めてあるぢやないか、それが、労働力、云ひかへれば、人間の生命力の搾取に、その基礎を置いてなつてゐるものであるならば、それが、どんな形に於て生命が消耗されやうと、ブルジョアジイにとつて、驚くべき理由がないだらう。君の生命は、君にとつて永久に大切であるが、ブルジョアジイにとつては、君の××が搾取され得る間だけ、役に立ち得ると云ふ丈けなんだ！産業豫備軍は無數だ！僕等は今、一切残らず、そう云つた境遇の下にあるんだ、そして、お互に噛みつき合はうとしてゐる。馬鹿な話だ、僕等は、生きる道を探るのだ。君の、今の直接の生きる道が醫者にかゝることにあるやうに、労働者階級は、階級としての、生命の道へ眞つしくらに進むべき時なんだ！」

それは、ポイ長へ話してると云ふよりも、彼が一人言を云つてる、と言つた方が正當であつた位だつた。

波田、西澤、小倉などは未だ上陸をせずに、一緒に、彼の話を聞いてゐた。

水夫では、波田、コートマスターでは小倉が、今夜の當番であつた。

波田、小倉、西澤、藤原と、四人の中で、酒を飲むのは西澤だけであつた、後の三人は酒よりも甘いものであつた。特に波田と来ては、前にも云つたやうに、菓子のために「身をもち崩す」ほどだつたのだ。

「みんな、東洋軒へ行つて、お茶でも飲みながら、話をしやうか」と、藤原は、皆が自分を待つてくれたのが、——上陸を十分延ばすことが、どんなに辛いことかは、讀者は船長の例で知つてゐる筈だ——氣の毒になつて、皆を菓子屋へ誘つた。

「よからう。」波田は、懐中の三圓——その月末には二割の利子で月給から天引きされる處の借金——を抑へながら叫んだ。

皆は揃つて出かけた。出がけに、波田は、ボーイ長に言つた。「すぐ歸つて来るよ。菓子を買つて来るぜ、待つて給へよ。そして、明日は、午前中に病院へ行くんだ！ すぐ歸るからね」彼は三人の後を追つかけて、棧橋へとトラップを、猿のやうに傳つて飛んで降りた。

西澤たち三人はトラップを降り切つた處で彼を待つてゐた。それは寒い夜であつた、水夫たちは不完全な防寒具で、皆

震へ上つてゐた。オーバーを持つてゐたのは藤原と小倉とだけであつた、彼等は、どこかの古着屋で、それを買つたのだ。藤原のは上着の大き過ぎる位に小さかつたし、小倉のは米一斗袋に三升詰めた位にダブ／＼してゐた。

彼等は馬蹄型の海岸を一行に並んで、黙々として歩いた。齒が痛かつた。風は頬を透して、齒の神経をひどく刺戟するのであつた。水夫達は、彼等が貧乏であるために、必要以上に苦しまねばならぬことを思つてゐた。

「メリヤスの新しいシャツが一枚あれば」波田は「どの位暖いだらうなあ」と思ひながら油と垢とでガワガワになつたズボンのポケットの中で、拳固を力一杯握り固めたり、延ばしたりした。

西澤はオーバーが無い代りに、スエーターを着込んでゐた。それは「買ひ被つた」綿製の物であつた「随分商人はひどいことをしやがる」もつとも、彼はそれに一圓二十錢を夜店で出したと云ふことは、餘り吹聴はしない方が賢いと思つてゐた。

かうしてめい／＼が甚しく貧弱な防寒具の下に、甚しく寒い、寂しい、荒涼たる、一口に云へば、と云つても、云ひやうのない、そうだ、それは「死」にいやでも應ても考へを押しつけねば置かない關係即ち、プロレタリア對寒冷の、本能的の寂しさの中を、四人は、港の街の淋しい通りの、明る

い二階で暖いお茶と、お菓子とが待つてゐることを思つて急いで行くのであつた。

左側は、驛から迂迴して來た鐵路のある山腹の切断面、それから高架線、それ等が萬壽のかゝつてゐる方へ並行してゐた。積まれた石炭の上には雪がすつかり塗り上げをしてゐた。處處に、人足の茶飲所兼監督の詰所の交番様のものが「置いてあつた」。

彼等は、石炭と海との親不知、石炭と石炭との山の谿間を通つて夕張炭山へ續いてゐる鐵道線路を越して、室蘭の市街へ出た。その街は、晝も夜のやうに寂しい感じのする街であつた。方角を忘れてしまつたが、室蘭製鋼所のある反對側、棧橋を上つて右の方へ大通りを淋しく歩いて行くと、道が、上中下三段位に別れて、山の側面へ各々の家の並びを持つて並行についてゐる。その中段の通りへ、東洋軒と云ふ、此町で見付けた初めピツクリしたほど、立派な「文化的」な構へと「文化的」な菓子とを賣つてゐる店があつた。硝子製の立派な箱が十五六、その廣い舖に並べてあつて、その中には、外國人がクリスマスに食べるやうな、パイや、その他種々な生菓子が並べてあると、一方の棚の中には、栗饅頭や、金つばや、鹿の子など、云ふ東京風の蒸菓子や陳列してあつた。その店の間から靴を脱いで、階段を昇ると、二階二間がホールになつてゐた、入つて左側のは、大テーブルが一つと椅子が

いくつか置いてあつた。右の室は日本室で六疊であつた。

セイラーたちは、テーブルの方の室へ、油だらけな同勢を押し込んだ。けれども東洋軒は驚かなかつたと云ふのは、波田は、いつもその格好で來て、必ず二圓位は食つて行くからであつた。

テーブルには白い布がかけてあつた。それを力をいれて指で擦ると、黒くなるのであつた。どんなに手に石鹼をつけて、輕石で磨いた後でも！ 彼等はそれで用心をした。金つばと、栗饅頭とを小僧さんがお茶と一緒に持つて來て呉れた。

彼等は、全て飢餓地方の住民のやうに、飛びついて、食べた。殊にその中でも、波田は仲間からさへ驚嘆されるのであつた。然し、彼等が其ものを要求するのは、囚人が甘いものを寶玉よりも數十倍も数千倍も、比較にならぬ程望み、欲しがるのと同じことだ。

何かを人間から、奪ふならば、忽ち奪はれたものが、奪はれたものにとつては一番切實な要求となり、願望となるのであらう。光線を奪へば光線、空氣を奪へば空氣を、活動、音聲、嗜好品、それ等は、それが奪はれるまでは第二義的であつても、奪はれると同時に、それは一切第一義的な慾望に變るのだ。自由を奪はれたものは自由を生命より尊いと思ふやうになるものだ。

菓子には、銀色の小さなフォークが楊子代りについてゐた。

紅茶のコップは銀のスプーンがついてゐた。彼等は、これ等の器物を汚さないやうに、氣にしながら、忽ちの中に第一の皿を空けて、第二番目が註文された。

三三

彼等は甘いものに對する渴望が稍醫された。そこでボーイ長へ持つて歸る菓子に註文された。それから彼等は、ボーイ長の負傷について「とも」の取つた態度について、我々は、どう云ふ形に於て抗議するか又、三上のやうな、事件を惹き起さずには置かない、船長の減茶苦茶な態度に對して、そしてこれ等のことを交渉するならば、労働時間もハツキリと決めて貰ふこと、それに賃銀が全て相場外れだから、もう少し上げて貰ふこと。——當時歐洲大戦亂時代であつて、石炭は水夫たちの寝るべき室にまで詰め込まれた程であり、従つて、汽船會社の利益は全く莫大なものであつた。——それに、日曜でも何でも出帆入港でとられれば、それで休日はおじやんになるが、それは休日翌日廻しと云ふことにして貰はう。これ等のことは、是非片をつけるべき性質のものであり、又つけねばならない状態に、われわれは追ひ迫られてゐる。そこで、これ等のことを何時、交渉を始めるがいいかと云ふことの話が、彼等の間に、西澤によつて口を切られて問題になつた。

「それは、交渉をチーフメイトに對してやるか、又は最初つから船長に對してやるべきものか、それが問題だね」と小倉は言つた。

「勿論夫れは決定權を持つてゐる船長との最初で最後の交渉にならねばならんだらう。」藤原が答へた。

「君の言ふやうに、それが最初で最後であると言ふならば、交渉を拒絶された場合には、どうなるんだらう」小倉はその點を怖れてゐた。若し交渉が不調になつたりした場合、同盟下船とても云ふことになれば自分は明に乗船停止を食ふだらう。そうすると、自分は高等海員の免状をとる資格が失くなつてしまふんだ！彼は苦しい立場にあつた。彼は若し、高等海員になつて稍多い収入を得ないならば、山陰道の山中で、冷酷な自然と、惨忍なる搾取との迫害から、その僻村全體が寒さのために凍死し、飢餓のために餓死しなければならぬのであつた。

彼の村は、山陽道と山陰道を分ける中國の脊梁山脈の北側に、熊笹を脊に、岩に腰を卸して凭れかゝつてゐるやうな、人煙稀れな嶮阻な寒村であつた。その村の者は森林の産物をその生活資料としてゐた。所がそれ等の森林は國有林になつて終つた。そこで、その村の者は、監獄へ行くか、餓えるかと云ふ二つの道のどちらかを取るやうに強られた。小倉の生れた村の小徑とも、谷川とも分らない山徑は、監獄の方へ續

いてゐた。僅か三軒の家を以て成り立つてゐる此村は、その各家から戸主を監獄へ奪はれた。村から最年少は六つ、最年長十六の間の、十三人の男兒は滅亡に瀕してゐる故郷を救ふために、社のやうに神寂びたその村を後に、世の中を目がけて飛び出したのである。そして、村に金を送る代りに、村から労働力を搾られに來たと云ふ形なのであつた。

て若し、彼が、これに參與して、此の企てが失敗するならば、彼は、今まで三年間、全力を傾倒してそれに向つて進んだ高等海員どころでなく、下級船員からさへもその職業的命を奪はれることになるのであつた。

彼は三上とサンパンを押しした時にも、同様な感じを味つた。深い憂悶と、人生に對する疑問とが彼を蜘蛛の網のやうに包みとり巻いた。

「それは鬭争になるだらう。僕等は、何等の武器も持たないから、たゞ固まつて、何にもしないだけの方法をとるだらう。そうすると、船では雇止めして、乗船停止を食はずだらう。事に依れば棧橋から道は監獄へ續いてるかも知れないよ」藤原は答へた。

「それは僕等の生活の破滅にはならないだらうか、いや、僕等だけではなくて、僕等の背後にある老人や幼兒たちの運命を破滅に導くだらう。僕は僕の故郷のことを考へると、どんな忍耐でもやりたいと思ふよ」小倉は彼の哀れな氣の毒な心

の中に、涙と共に浮ぶ考へを述べるのであつた。

「さうだ！君は君の忍び得る最大の「忍耐」をなし得た時に、君は君の爲し得る最大の力で同胞を殺戮し、それからパシを奪つたと云ふ結果を見ることになるんだ」藤原は殆んど冷酷そのものゝやうな顔付きになつてゐた。そしてその眼だけは火のやうに燃えて、光つてゐるのであつた。

「さうは思はれないよ。僕が今職業を失へば、僕の故郷では、どんなに嘆かかれやしないよ。それだけではないんだ。僕の家では食ふ物に困つてしまふんだ！」小倉は感情が昂ぶつて來た。彼の頭には、彼が村を去る時の悲痛な光景が涙に曇つて浮んで來るのであつた。

「同情する！労働者は殆んどすべてが、罷工することの能きない地位につき落されてゐるんだ！あらゆる組織が俺たちを賛卷きにしてゐるんだ。そして、俺たちは首を切られても罷工も罷工もできないんだ。直立不動の姿勢を保つて、殴つても、蹴られても、それを崩せない新兵よりも俺たちは苦しいのだ。資本制は、労働者に一人残らず狭窄衣——監獄で狂暴な囚人に着せる革の衣類、それを着ると、體の自由が利かなくなつて、非常な苦痛を感じる——を着せて、手錠、足錠を嵌めて居るのだ。藤原は、その眼だけが益々燃え上つた、が顔はそれと反對に段々血の氣が褪せて青ざめて行つた。

「だが、小倉君、君はどつちにしても誰かの死には、關係し

ないわけには行かないだらう、ボーイ長は、自分のパンを求めに来て、鉤のついた餌を食った魚のやうに、自分を生命の危難に打つつけてしまつた。それが「今」の問題なんだ。これはボーイ長にその形をとつて現れたのだが、パンを得るために、船のりになるなど、言ふことは、針のついた餌に釣られる魚と同じことなんだ！ それは我々全體に一樣に變りのない運命なんだ。われ／＼には、鉤のついた餌より外には、どこにも餌がないのだ。君も二度まで沈没船に乗つてゐたと云ふぢやないか、その時に、若し萬一君が死んでゐたら、どの位君の家族は嘆いただらう。若しその時に、君が誰かに救はれなかつたとしたら、君は、その嘆きを家の者にかけておればならなかつたんだ、そうではあるまいか。それは、どこへ行つても餌に鉤がついてるから起ることなんだ。

だが、小倉君、君の言ふことは分る。僕等は馬車馬のやうに生活するか、餓死するかどちらかなんだ。ほんとうに、僕等が、僕等の持つてゐる偉大な力に、自分から驚く時の来るまでは、徒に、僕等は犬死にをしなければならぬんだ！ 上陸の時以外に彼等が口にする事の出来ない一杯の紅茶は、彼等を昂奮せしめたやうに見えた。藤原は自分でもさう思ひながら自分に追つかけて話してやるのであつた。

「分つたよ、藤原君！ 僕等は、一飛びに跳ぶことよりもズリ／＼進む方がいいんだらう。自分丈けがブルジョアになら

「だがさつきも言つたことだが、要求が撥ねつけられた時はどう云ふ對策を取るんだね」小倉はそれを聞いた「始めることになれば、俺も徹底的にやらねばならぬ」と彼も覺悟したのであつた。

「それは、ストライクが皆の意志で決定されるやうに皆で、決定しなければならぬ重大な問題だ。要求條件を出したゞけては、未だなんでもないんだからね、夫が容れられない時に、休業するか、怠けるか、下船しちまふか、等の方法がある譯だね。こんな處で下船すると云ふ譯にも行かないから、それを止むを得ない時は勿論、裸でも此雪の中へ下りる覺悟はしてゐるんだが、下船すると云ふことは、最後の場合にとつて置いて、さう大切でない時は怠けて、これをやつては絶対にいけないと云ふやうな仕事の日には休業しちまふんだね。これが一番効果の上る方法だと思ふんだ。」リーダーは、實戦の闘士、藤原であつた！

「そんなことは、一體どこで相談をするんだい」西澤が訊ねた。

「それは、若し、コーターマスター全部が承知したら、コーターマスターの室でやらうぢやないか」と小倉が言つた。

「それはいいだらう」で、本部は三疊敷きに足りない舵取の室を第一の候補地にした。コーターマスターが入らなかつたら「おもてでいいさ」と云ふことになつた。

うとするよりも、成功しなくてもプロレタリアの戰士、で倒れた方がいいんだ。僕には、それがよく分るんだ。そしていつも君達には敬服してゐるんだ。だが、僕には、その勇氣と、決斷と、信念とがないんだ！ 詰り臆病者なんだ！ 僕は！ 卑怯者なんだ！ だが、僕は、今度は、やるよ、やつて見やう！ コーターマスター四人をも起たせて見やう。僕にも漸く分つたやうな氣がするよ。」小倉は、漸く厄介なものを拂ひ除けた、と言つた風な顔付をして残つてゐる菓子を摘んだ。

「それで」と西澤は口を切つた。「誰が船長に打つつかるんだい」彼は、全つ切り黙つてゐるわけにも行かない場合に喋舌るやうな、それと同じ氣持で、同じやうなことをそこへ吐き出した、俺等ぢや逆も太刀打ちが能きねえから、矢つ張りストキに頼むんだね」

「ぢやあ、今夜要求條件を作らへて、それに全部で連印して、それを船長に提出しやうぢやないか」波田が云つた。

「いいだらう」皆が賛成した。

「だがそれはいつやるか？ その時を選ぶことが、勝つも負けるも、時を選定すると言ふことになるだけだと思ふんだ、殊に、船長は歸りを急いでゐるからね。正月は目の前だしね。俺たちの用事がなくなつた時に、俺たちが力を示さうとしたつて、それや駄目なことだから」藤原は、實戦家としての提案をした。

「それで、いつ一體やるのかい」波田が今度は聞いた。

「いつがいいと思ふ」と藤原は反問した。「それは皆が一番いいと思つた時が、いいんだ」

「俺は出帆の時がいいと思ふぜ。出帆の時に俺達が遊んだら、第一ワイアやホーサーが棧橋から外れつこねえんだからなあへツへツへ、と西澤は、戰鬪を開始したやうな氣であつた。

「さうさなあ——出帆の間に要求書をブリツヂへ持つて行くか？」小倉が言つた。「これを承認して下さい。何でもないあたり前のことですよ」とやるか」

「さうぢやないよ。要求書を奴の眼の前へつきつけるんだよ。」やい見えるかい、え、これに判をつけ、さもねえと、正月は横濱ぢや能きねえぜ」と高飛車に出たら随分痛快だらうね」西澤は云つた。

「出帆の時はいいだう。第一、俺はチェンロツカーに入らないよ。」波田は、自分のあの困難な仕事、船の出帆に際して、どうしても省略することが能きた。「俺たちを月給盗棒見たいに考へることは、全で違つてゐることをハツキリ思ひ知らせた方がいいだらうよ」彼は、何だかほんとうに、人間として、勞働者として、貴い犠牲的な、偉大な事業に、初めて携り得ると云ふ晴がましい誇と、自信とを感じない譯には行かなか

ら

つた。

「だが、これがよし通つたにしても、これが最後の勝利ではないと云ふことを、よく考へて、なるだけ大事をとつて呉れないと困るよ。たとへば要求は通つたけれど、後で氣を弛めたいめに、毎航海毎航海、一人づつ下船させられたなんてことになるよ、二三航海の中に、又元々通り、外の人間は押られるし、僕等だつて馬鹿を見なければならぬからね、争議は、その時も大切には相違ないが、跡始末がもつと大切なんだからね」藤原は、彼の苦い經驗を思ひ起した。「折角奇麗に掃除しても塵取りですつかり取つてしまはしないで、隅つこの方に貯めときでもすると、埃はすぐに飛び出して、前よりも汚くなるやうなものだからね。殊に、三上のやうな捨つ鉢なやり方は、残つた同志のことを思へばやれない筈だと思ふよ」藤原は、一切のプログラムを腹案しつゝ言つた。「でポースンやカムネ（カーペンター——大工——の訛り）はどうするんだね」波田はポースンや大工が裏切り者になりはしないかを恐れた。彼等は籠の中で睜つた目白のやうなものであつた。自分の牢獄を出ることを拒む、その中で生れた子供のやうであつた。彼等は船以外に絶対に、パンを得られない程、船に同化されてゐた。たとへば彼等は、丁度人間程の太さの捻釘にされてしまつたのだ。それは船のどこかの部分に忘れられたやうに嵌り込んでゐるのだ。そして、それは大切な捻

じ釘なんだ。だから錆びるまでそこへそのまま置かれるのだ。錆びると新しいのと取り換へられねばならない。

彼等は捻釘の本質に基いて、船體に錆びついてゐるものと見なければならなかつた。

「餘つ程例外でもなければや、あいつ等が船長に鬭争を宣言するなんてこたあないよ」とストキも云つた。

「それやあたり前さ、今夜だつて、ポースン、大工は、チーフメイトに大黒樓に呼ばれて、そこで飲んでるんだぜ。勿論奴等あ、捻釘さ！だが奴等は反つてゐない方が足手纏ひがなくなつていいよ。今夜は貸金の利子を勘定する日さ」西澤は、素ばしこくスパイしてゐたのであつた。

「俺達は毎月の収入の五分ノ一宛出し合つて、奴等に薬者買ひをさせ酒を飲ましてくんだなあ」波田が言つた。

「では、藤原が言つた。要求書は僕が原稿を作つて、それが纏つた上で、清書して判を捺して、それから提出と云ふことにしようね。それまでは勿論、絶対に秘密、併し内容を秘してコーターマスターを説くことは小倉、君に一任しよう。ね、それでいいかしら、外に未だ考へて置くことはなかつたかしら」彼は一寸頭を軽く叩いて考へた。

「もういいやうだね」西澤が答へた「だが波田君には菓子や、僕には酒と女とが足りないやうな氣がするね」彼は大口を開いて笑つた。空気が凍りついたやうな、静けさを

破つて、聲は通りへ響いた。

「波田君どうだい、そんなにいけるかい」藤原は立ちながら訊いた。

「もういいよ。でも食べば食へないことは無論ないけれどもね。財政が許さないさ。ハハ、」と笑つた。

四人はおもてへ出た。西澤は「ひやかして、一杯ひっかけてくる」と言つて坂を遊廓の方へ上つて行つた。三人は揃つて、どこか、そこが外國の町でもあるやうな感じを抱きながら、馬蹄形にその船へ向つた。

ポースン長は波田から菓子土産を買つて喜んだ。

三人は、紅茶のお蔭で眠られぬまゝに、ポースン長の傍で、ストーブに石炭を放り込みながら、前のポースンが、直江津で放り上げられた悲惨な話を、思ひ起しては語り合つた。

三四

それは、ここに今書くべきことではないかも知れない。けれども、それは書いた方が都合がいい。船長とは一體何だ？その答の一部にはなるだらう。

それは夏の終り、秋の初めであつた。時々暑い日があつて、又、時々涼すぎる夜があるやうな時であつた。萬壽丸は同じく吉武船長——これは矢つ張り此船のブリツチへ錆びついた捻釘以外ではなかつた——によつて、押ることを監督され

てゐた。そして小樽から、直江津へ石炭を運んだ時の、出来事であつた。

本船が秋田の酒田港沖へかゝつた、午後の一時期であつた。全でだしぬけに瀧にでも打つつかつたか、氷囊でも打ち破つたと思はれるやうな狂的な夕立に遭つた。その時、船首甲板には天幕が張つてあつた。それが、その風に煽られて、今にも、デツキごと覆つて行きさうにブリツチから見えた。船長はずつかり慌てた。そして、あれを取れと、命じた。その時、夕立前の暑さで、おもては皆裸で晝食後の眠りをとつてゐた。そこへ、コーターマスターが駆け込んで「ウォーニン」をそれと傳へた。

波田、三上、藤原、西澤等は元氣盛りではあるし、船長をそれほど「怖」れてゐなかつたので、猿股一つで飛び出した。

仙臺と波田とは全裸で、飛び出した。それは風呂のない船に於てのいい行水であつた。だが、風が猛烈なので、仕事は頗る危険であつた。ウツカリするとウォーニンの煽りを食つて、海へ飛んで行かねばならなかつた。それにしても、若い水夫にとつては、それは、全裸で暴れ廻ることが「痛快」なことであつた。彼等は終ひには、少々寒くなりながらも、裸でその作業を爲し終へた。ところが、妙な船長だ！ポースンが裸ですぐ飛んで出なかつたと云ふので、ひどくポースンを叱つたのだ！

全くこれは豫想外の悪い結果を水夫たちは齎したものだ。水夫達では、漁船ちやあるまいし、全裸で「船長」の見て「おられる」前で作業することは無禮だと、船長は考へるだらう。だが、ウオーニンを取り外すことは、又急いでゐるんだらう。だから、こう云ふ時を利用して、奴の鼻先に俺等の○を拜ませてやれと云ふ積りだつたのだ。

ところが其晩ボースンは船長から「捻じ」のぐらつくほど「油を搾られた」のであつた。「そんな風では非常の時の役に立たない、反つて邪魔になる位なものだ」と云ふんだ。

それにはボースンはひどく情氣た。水夫たちも、方角違ひの飛ばつちりに、些か、恐縮したのだつた。

だがそれは、問題にならずに、直江津に着いた。直江津の初秋！それは全く、日本特有の淋しい景色であつた。さらだに、人戀しい船のりは、寂しい人なつこい自然の情景の前で、滅多に来る事のない直江津の陸を眺めて戀ひ慕つた。處が困つたことには直江津の海は極めて遠淺であつて、おまけに少し風が吹くと、そこはのべつたらな曲線をなした海岸であるために、汽船は錨を巻いて、大急ぎで佐渡へと逃げねばならないのであつた。

佐渡へ避難する！それも亦セイラーたちには結構であつた。そこにも、珍らしい街、珍らしい風俗があるのだ。

萬壽丸は別に錨を巻いて逃げる程のことはないが、石炭積

あつた。それは、隠されると猶見たくになると云ふ人心を劇しく刺戟した。おまけに、誰かが直江津へ一度来たことがあるのであつた。

この女郎は、皆亭主持なんだぜ！そして、みんな自分の家を持つてるんだぜ、自分の家へ連れてゆくんだぜ、素人見たいなのや、かと思ふと藝妓も及ばないやうなのがあるんだぜ。そして、皆素人素人してるんだぜ。全て自分の家へ歸つたやうなものだぜ。日本一だ！全く茲の女郎買を知らない奴は船のりたあ云へない位なんだぜ。それは、恐ろしく皆の者を昂奮させた。有夫の女郎、素人の女郎！人に餓えた船のりはもう有頂點にされてしまつたのであつた。それは全て錦繪の情緒ぢやないか。

それは、全く怖ろしいほど、彼等の好奇心をそゝつた。素人の娼婦、一軒を持つてゐる娼婦！それは全く獨特のものであつた。

この昂奮劑は、恐ろしい偉力を現した。傳馬は直ちに卸された。

彼等は大騒ぎをして下ろした。それは難なく、海面へ下りた。そして、三上は、實際直江津の漁夫を笑ふかのやうに、樂々とおもてへ漕ぎ寄せた。ボースン、ナンバン、ナンブト、大工、と云ふ順序にロープを傳つて乗り込んだ。櫓が二挺立てられた。三上と大工とがそれを押した。

取の解船は波で来られないと云ふ、甚だじれつたい曖昧な日が三四日續いた。これには、船長はおろか、誰でも疝癢を起した。

そうかと云つて、わが萬壽丸が、不良少年のやうに、ノコノコ佐渡までも女狂には出かけられないのであつた。

丁度、その時日曜が来た。船長は直江津の解船の腑甲斐なさを、冷かす意味に於て、水夫夫全體へ向つて、當番を除いた外の者は、ボートと傳馬とを卸して、練習していいと云ふ、本船初まつて以來の計畫と壯舉とが發表された。そこで、傳馬にはデツキ、カツターにはエンデンと云ふことに振り當てられた。

此計畫が發表されると、同時に、ボースンと、今の大工、三上の三人は速早く隠謀を企んでしまつた。それは、傳馬を、どん／＼漕いでつて、上陸して直江津の女郎買を「後學のため」にして、朝歸つて来やうと云ふのであつた。そのためには、グズ／＼してると不純な分子藤原の如き、小倉、波田の如きが乗り込んで来ると、いけないと云ふので、氣脈相通する火夫長とナムブト（ナムバート）とを誘惑して、傳馬を占領してしまつた。これは無邪氣な面白い、企であつた。此の企ては必ず喝采を博すると、彼等は考へた。

直江津の町は、沖から見ると、砂濱から、松が處々に上半身を表してゐて、街は殆んど、その姿を見せないやうな處で

波の山、波の谷を、見えつ隠れつして、それを漕いで行つた。

そして、そのまゝ、どこへ行つたか、見えなくなつてしまつた。カツターはその後で卸された。そしてこれは、サイドメイト、チーフメイトまで乗り込んで、本とうに漕ぎ方の練習をやつた。傳馬はと云つて、チーフメイトはカツターの上へ立つて方々を眺めたが、それは見えなかつた。

カツターは引き上げられた。そして日は暮れた。傳馬は勿論歸つて来なかつた。傳馬の連中が、若し、船長を連れて行つてゐるならば、此のやうな問題は起らないのだつたが、船長は船に残つてゐたのだ。

船長は、叩き落された熊蜂の巢見たいに、かつとなつて憤つた！

自分の妻君の姦通を嗅ぎつけた亭主のやうに、その晩、船長は一睡もしなかつた。そして、そのおかげで、ボーイも眠れなかつた。と云ふのは、船長は、のべつに、ベツトから飛び上つては「ボースンは未だ歸らないか、歸つたらいつてもいいから、すぐに俺の處に連れて来い、分つたか」だの「傳馬は未だ見えないか」だのと、怒鳴り續け、ベルを鳴らし續けたからである。

「全て狂人病室だ！看護人は堪らん」ボーイは脊中をポリポリ搔きながらこぼした。

全く船長にして見れば、其誇を傷けられ自分の優越感を裏切られ、自分の特権を蹂躪され、殊に彼さへも未だ遠慮してゐたのに、「女郎買ひ」に行つたことは、彼を「愚弄」すること甚しいものであつた。それは、昔ならば「罪正に死」に相當すべきであつた！

彼は時々ベツトから、飛び上つては、ボーイを怒鳴つた。それは足へ煮え沸つた湯でもかゝつた時のやうに飛び上るのだつた。そして、彼は飛び上る度毎に、「彼奴等」に對する復讐を一層殘忍にしようと考へるのだつた。

ボースン、ナンバン等が「出し抜いて」直江津の、自分自身の家を一軒獨立に構へてゐる女郎買ひに行つたことは、憤怒の餘り、船長を發作的の熱病患者見たいにした。

僅か、然し、この位の事で、何のために、それほどまでに船長が、憤らねばならなかつたか、それは、誰にも分らないのだ。それ程に憤慨しなければならぬ「理由」を、未だに「發見が能きない」とおもての者たちも云つてゐるのだ。それは多分、「蟲の居處」が悪かつたのだらう。そして、蟲の居處が悪かつたために次のやうな結果になつてしまつた。

三五

その夜は、船長にとつては、全く不愉快極まる長い夜であつた。その夜は、ボースン一行にとつては、全く愉快極まる短

面であつた。

そしてボースンは乙姫様から貰つた箱を提げて、ハンケチを振つてゐた。

ボーイが、船長にボースンの傳馬が見えると報告した時の彼の憤り方の氣持や、態度を説明するには、匙を投げる。

彼は、獨逸製の双眼鏡を、オツ取つて、ブリツヂに駆け昇つた。彼の双眼鏡は傳馬を擴大した。

「圖々しいにも程がある、奴はハンケチを振つてゐる！」彼は唸つた。

水夫たちも、火夫たちもデツキへ出て、悲慘な遊蕩兒たちを眺めた。傳馬は近づいた。大工は鼻歌を唄つてゐた。彼は又聲がいいのだ。それは、誰でも聞く者を、母に縋りついて乳を飲んでゐた頃の、甘い追憶を誘ひ出さずには置かなかつた。

彼等は、おもてから、ロープを下して貰つて上つた。彼等が、皆未だ上り切らない中に、コーターマスターが飛んで來た。

「傳馬はそのままにしといて、ボースンにすぐ來いつて、船長が」とボースンに云つて、

「オイ、ボースン、氣をつけないと眞つ赤になつて憤つてるぜ」

ボースンは、女房と、六人の子供が、打ち上げられた藻屑

い一夜であつた。

そして、おもての者たちにとつては、それは、灰色に塗りつぶされた、懲役囚の一夜のやうに隋力的な一夜であつた。

その夜が明けると、ボースン等は、陸地近くの、日本海特有のまき浪の中から、その傳馬の姿を見せた。浪は、その浪のやうな色と巾を持つて、沖の方から陸地の方へ捲き轉がして行く反物のやうに見えた。傳馬は、陸近くでは、よく此の浪に見事に覆されるのであつた。傳馬は捲き込まれるやうに見えた。が、すぐにヒヨコリと現れた。芥子粒のやうな傳馬は、段々大きくなつて來た。

止せばいいのに、ボースン——海軍出の面白い男だつた——は、傳馬の舳につつ立つて、其功を誇りでもするやうにハンケチを振つてゐた。

それは、客觀的には浦島太郎が、龍宮の乙姫様の處から、歸つて來るのではないかと思はれるほど、美しく、詩的であつた。

黒青い、大うねりのある海には、外には一艘の船もなかつた。空氣は甘く、戀人の肌のやうに匂つた空は海一杯を映した鏡のやうだつた。傳馬の背には、白い砂山の續きの間から松と屋根とが延び上つて覗いてゐた。

一切が澄み互つて、靜かであつた。それは一九一四年のことではなくて、紀元二百年の日本海と名のつかない、前の海

のやうに、ゴタ／＼してゐる、自分の家庭のことを思ひ出してしまつた。「こいつあしまたつた。行かなきゃよかつた」と、

彼は思つた。深刻に彼は悔いた。悪いと思つてよなく。より悪いことの誘因になつたことを、彼は、……頭をデツキへ打つ衝けたかつた。……心臓が全て肋骨の外側についてるやうに、彼は、動悸がした。捕まつた犯罪人のやうに、彼は、自

分の運命が決定したことを直感した。彼は、その破滅に瀕した自分の家で疲れ衰へ弱つた、妻や、子供等と一緒に、飢え凍えてゐる状態を想像して、震へながら、船長の所へと行つた。

彼の共犯者？ 達も、霜寄りした魚のやうに、一つ處に集つて、「困つた」のであつた。三上だけが一人その中で、昨夜はいかにして遊んだかと云ふことを、仲間の者に發表する勇氣と、發表せざるを得ない衝動とを持つてゐた。

その話によると、若い船員たちにとつては、その歡を得たことは、そのために首を切られることがあるにしても、猶且つ非常にいい、得難いことであつた。何故かならば、

三上はこゝろ説明した。「ほんとに自分の亭主のやうに、親切にした」と。

彼等は、人間の「愛」には、嘘にもほんとも、沙漠のやうに渴き餓えてゐたのだ。砂漠にオアシスの蜃氣樓を旅人が見るやうに、彼等は「愛」の蜃氣樓さへをも索し求めたので。

の模型位に評價してゐたのであつたが、彼が「馘首」されたことを聞いて、急に同情者になつて了つた。

彼は、梅雨時の夕方見たいな氣持ちである、ポースンの室へ入つた。そして、何かと手傳つたのであつた。——彼が、今時々足に嵌めるゴム長靴の「ゲートル」は此時に、貰つた記念品であつた——。

ともからは、ポースンは未だ上らないかと、頻りに急ぎ立てゝ來た。

「人間ほどわからんものはない。あゝ人間ほどわからんものはない」と、ポースンは溜息と共に言つた。

ポースンは、三上に送られて、自分も一本の櫓を押して、今歸つた許りの直江津の街へ向つて漕ぎ去つた。

ブリツヂからは、船長とチーフメイトが望遠鏡で之を見送つた。傳馬は段々小さく、波山と波谷との上のりつゝ見えつ、沈みつして行つた。

丁度、その日も荷役がなかつた、又別に仕事も無かつたのだ、水夫等は、船首甲板にウオーニンを張つて、その下で寝轉びながら、ポースンの傳馬を見送つた。

傳馬はどん／＼進んで行つた。そして、陸岸近くなつて、もう一二間と、云ふ位の處まで進んだ時に、後ろから追つかげられた、例の捲浪に、くるまれて、旋風が埃でも渦巻くやうに、ゴロ／＼と横に轉がしてしまつた。勿論船長とチーフ

フメーツは此上もなく面白がり、手を打つて喜んだ。

岸には、石炭の人足達が、もう少し風いだらば、本船へ仕事に出かけやうとして澤山集つて、その有様を見てゐた。

人足の四五の者は直ちに跳り入つた。そして、二人を——

三上は櫓と抱き合つて、ゴロ／＼轉がつた、彼は、立たうとして二三度試みたが、彼の四倍も長い重い櫓を拘へてゐたので立てないで、その代りに潮を飲んだ。ポースンは、その突壁の場合にも、荷物を流すまいとして、手を章魚のやうに八方に擴げて、手にさわるものを掴まうとしながら、グル／＼と捲き轉がされた。そして、彼は手に舟板一枚と洋傘一本とをしつかりと握りしめてゐた。

若し、人足が助けて呉れなかつたならば、傳馬は勿論、流されてゐるし、ポースンにしても、三上にしても、死に得た。彼等は足が立たなかつたと云つてゐた。その筈であつた。どんな大男でも、海の巾ほど丈のあるものはないからだ。詰り彼等は、横になりながら足を突つ張らうと試みたのだ。

二人は、櫓と、舟板と洋傘とをしつかり握りしめて人足に助け上げられた。

ポースンの荷物は、布團一枚と毛布一枚との包が取りとめられた。そして、帆木綿の袋の方は流れた。そして、一切は残る限なく完全に濡れてしまつた。それは、吸取紙が完全に濡れたやうに、殆んど一切を役に立たなくしてしまつた。

それは、ブリツヂから、望遠鏡で見る時に、流れて行く行李まで見えた位であつた。

「これは、痛快だ、こいつ面白い、ワツハツハハ、、、ワツハツハツハ、、、、迎も堪らない、ワツハツハ、、、あれを見給へ！ 舟板を虎の子見たいに抱いてるぞ、ワツハツハ、、、、船長は轉げ歩けばかりに笑ひ狂つた。全く、それは、關係のない者から見ると、おかしい情景でもあつたらうさ。チーフメーツも笑つた。

おもてのウオーニンの下でも、砂丘の上の粒のやうな人間だが、動揺し始めたことを見た。何だらう？ と、傳馬の行衛を探したが見えない。その中に、ブリツヂで、船長とチーフメーツが腹を抱へて笑ひ轉げてゐるのを見た。そこへ、ブリツヂから、非番になつたクオーターが下りて來て、ポースンの傳馬が、捲浪に巻き込まれて顛覆したが、人命だけは人足に救はれたことを知らせた。

彼等は、ウオーニンの柱やレールに上つたり、掴まつたりして、それを眺めやうとした。けれども、波に遮られて見えなかつた。彼等は下に降りて、寝そべりながら、彼等について話し合つた。

夕方になつて、三上は、膨れつ面をしてポースンと共に、又歸つて來て、船長に、仔細を告げた。ポースンは、船長に損害賠償を要求しやうとしたがテンデ、デツキまでも上らさ

れなかつた。既に彼は、萬壽丸のデツキさへも踏み得なくなつてゐた、そして、一切は浪に掠はれた！

三上は、再びポースンを送つて行つて、夜になつて歸つた。

ポースンは、横濱へ歸つて、全く、屑鐵の山の中の一本の捻釘のやうに、僅に存在してゐるに止つた。彼は、帆布の縫工になつて、一日七十錢を取つてゐるのであつた。

これが、船長の偉業であり、これが、「ポースン」が當然受けねばならない報ひであつた！

三六

私が全て酔つ拂ひのやうに、千鳥足で歩き、一つことをクド／＼と、繰り返してゐる。だが、これは、私が船のりであるからで、小説家でないからのことだ。全く、こんなことをいや、『書く』と云ふことは、迎も難かしいものだ！

ポースン長は、もうこれですつかり傷も、それから來た病氣も、「これで癒々癒るんだ！」と思つた。それは、今から室蘭の公立病院に行くからであつた。

そこに行くためには、どうしたつて、海も見るだらうし、家も見らだらうし、木々も見えるだらうし、又、町の人々も、その外々々なものを見ることが能きるんだ！ そうだ、彼は頭の上の、上段の寢箱の底板ばかりを一週間許り眺めつゞけ

てゐたのだつた。

こんな場合には、人は恐らく、どんなものでも、見るもの一切が懐しいものだ、どうかすると、自分に喧嘩を吹つかけて来る、酔つ拂ひでさへも、それは放免された囚人の心と同じであつた。

彼を連れて行く、藤原と、波田とは支度をしてゐた。支度をしながら、二十五歳のキビ／＼した青年、波田は悲痛な冗談を云つてゐた。

「病院には、看護婦があるぜ、色の白い、無邪氣な、それ程別嬪ではないが、素適に可愛い、……」

「何だい、こいつ隅に置けねえなあ、君は病院に行つたことがあるのかい」波田にしては珍らしい話なので、藤原が一本突つ込んだ。

「その眼が、いゝんだ！ 眼がね、汚れたどんな塵も映さない山中の未だ發見されない、處女湖のやうな澄み切つた、親切な目なんだ！ その女は、全く、どの患者にでも、兄妹のやうにわざとらしからぬ親切さで以て、接するんだ！」波田は、既に十度以上は、便所掃除で汚した仕事着に腕を通しながら、自分の戀人のことを語るやうに言つた。

「似合はねえな。波田君、糞だらけの服と、澄み切つた瞳の處女とは、どう工面して見たつて、縁がねえなあ」と、藤原は冷かした。ポイイ長までも、ウツカリ微笑んだ。水夫たちは

を彼の背中に、そつと乗せるやうにした。「濟みません」と、ポイイ長は嬉し涙に詰つたやうな鼻聲で言つた。

三人は、四本の足で出發した。

子供を負ふぶすることさへも、非常に肩が痛く、又重いものである。ポイイ長の場合には甚しく重かつた。そして、困つたことには、その胸が痛く、猶より悪いことは、碎けた左の足が、兎もすればダラリと下つて、雪の中を曳き摺るのであつた。ポイイ長は、足を引き上げてゐやうとして、全身の注意を左足に集めて、それを、曳きずらすまいとしたが、駄目であつた。ポイイ長の足の下ると同様に、波田の手までが下るのだつた。

波田が、ポイイ長を揺り上げるのは、二十歩から十歩になり、今では一步毎に揺り上げるやうになつた。ポイイ長は、痛さと寒さとの爲に、顔色を失くしてゐたが、それでも辛抱した。

彼等は、棧橋から、二十間位の處にある、番小屋へ入つた。そして、ポイイ長をベンチへ卸した波田は、額の汗を拭つた。

「ア、御苦勞様」藤原は言つた。ポイイ長は、心臓の鼓動が草疲れてゐて額から冷汗が出て、ものを言ふ氣に、どうしでもなれなかつた。たゞ、アーツと小さく溜息を洩らした。

も笑つた。

「マ、待ち給へ、先廻りしちやいけないよ。實際だね。僕だつて、もう二十五になるんだからね。戀も、愛も充分に知つてるさ。その時に、若し、そんな處女に病院で出會つたらだね、此の糞の匂ひのする仕事着にでも、近づいて来るだらうかつてことを考へてるんさ、ハツハ、……」彼は笑つた。その笑顔の中には、全處女湖に宿す、處女林のやうな純な表情があつた。

「だつて、君は、自分でも言つてるぢやないか『女難除け』には此の菜葉が一等だつて、そうだと、勿論その娘だつて例外ぢやないぜ」小倉が言つた。

「悲觀々々、俺が女のことなど云ひ出したのが、よくねえんだな、俺の妹だつて、こんな汚ない、労働者とは結婚し度がらねえだらうからな。ハツハツハ、……」

「それは全くだよ、波田君」藤原は感に堪へぬやうに言つた。

さて仕度、——それは、その通すべき處へ、手、足を通して、嵌めるべき處へ卸、靴、帽子と嵌めればいゝ——は出來上つた。全く波田は「女難除けのお守り」であつた。新米の乞食などは、彼より立派な風をしてゐた。彼の髪と來たら馴れた乞食と區別がつかなくかつた。

波田は、ポイイ長を背中に負つた。水夫たちは、ポイイ長

番小屋で休んでゐた男女の人足たちは、彼等が取り繞つてゐた、ストーブの一邊を空けて三人に與へた。そして、ポイイ長の負傷に同情と憐愍の言葉を贈つた。

「俺達あ體が資本だてなあ、大切にしなければ」と言ひ合つた。「可哀相にまあ、未だ子供だによ」と言つた。

ポイイ長の左足は、銃劍の尖のやうに、白木綿で真ん丸く膨れ上つてゐた。その尖がストーブの暖みて、溶けた雪粉によつて濡らされてゐた。

ポイイ長は、そこで、變つた人々の慰さめの言葉を聞いて涙ぐまれて仕様がなかつた。

彼の母位の年配の老たる婦人も、あの劇勞に従ふのであらう、シヨベルを杖にストーブの側へ立つてゐた。彼は、恥しい氣持ちを感じた。何故そうであつたかは分らないが、彼が怪我をして病院へ負はれてなど行くと云ふことが、恥かしい氣がしたのであつたらう。そこに居た人達は、そんな大きなシヨベルを動かささへ困難であつたやうに見える、年配の人が多のであつた。それは皆四十を越してゐるか、そうでなければ未だ十五六の子供かであつた——そんなのが娘さへも交つて四五人ゐた——働き盛りの者はどこに居るだらう？ と、人々は思はずにはゐられなかつた。

働き盛りの者は、夕張炭田の、地下數千尺で命をかけて、石炭を掘つてゐるのだ！ それに、彼等の息子や娘が、そつ

ちへ出稼ぎに行つてゐるのだ。そして、歸つて来れば、不具者か、敗残の病軀か、多くは屍になつて歸つて来るのだ。「俺も、片輪になつて歸らねばならぬだらうか」ポイイ長は、灰になりかけた石炭のやうな、味氣ない淋しさに心を蝕食はれた。

「サア、行かうか、今度は僕が負ふからね」藤原が言つた。人足の人たちも手傳つてくれて、ポイイ長は藤原に負はれた。三人は、又、四本の足を以て、馬蹄形の海岸の石崖の端を、とぼ／＼と拾ひ歩きして行つた。そうして、藤原は丈が高かつたにしても、雪は二尺から積つてゐた。踏まれた道は狭かつた。ポイイ長は、道端の高い雪へ、足で合圖の印でもつけるやうにして、その足を曳き摺らねばならなかつた。

三人は、それ程黙つてゐないで、稀には一言何か言つたらしいだらうと思はれるほど、黙つてくつ／＼歩いて歩いた。三人も自分で、何かその不愉快な苦痛な沈黙に反抗したいとは思つても、口を利くだけの氣力がなかつた。それは何か官廳の手續きでもあるやうに、非常に面倒臭いことのやうに思はれるのであつた。

道は、藤原と、波田にとつては、昨夜歩いたと同じ道であるのに道の方が先へ向ふへ迂り抜けてもするやうに遠く思へた。然し、彼等はやがて、第二の小屋まで来た。そこは、港の

のだ。

白い服を着て、看護婦たちはゐた。そして、美しいのも居た。けれども、波田の考へたやうな夢のやうな、女はとうとう見つからなかつた。けれども、彼等は、ペンキの匂の代りに薬の匂を嗅いだ。殺風景の代りに、清い女の聲が流れ、看護服の裳がサラ／＼と鳴つた。薬の匂の中に、看護婦の顔からは、化粧水の芳香が、蜘蛛の糸のやうに後を引いて流れた。

椅子には頭中纏帯したのや手を肩から吊つたのなどが、二人かけて待つてゐた。

その中に「安井さん」と呼ばれて、ポイイ長は二人に抱へられて診察室へ這入つて行つた。

「どうしたんです」醫者は訊いた。

ポイイ長は、かいつまんで怪我をした時の容子と、痛い處とを話した。蒸汽のラジエーターが、白い湯氣を吐いてゐた。

ポイイ長は、寢臺の上で巨細に診察を受けた。そして、足は、改めてナイフで切り開かれたり、ピンセットで、神経を引つ張られたり、血管を引つ張り出して、それを糸で縛つたりした。

「どうして、こんなに、いつまでも放つていたんです。夏だつたら、もう此邊から切り取らねばならぬやうなことになる

最奥部で、馬蹄形の頂點になつてゐた。その小屋から暫く行くと、彼等は、左へ、海岸から離れて、石炭の連峰の間に、拵へられたトンネルを抜けて、それから、室蘭驛の機關庫のある、數十條のレールの平原を横切つて街へ出るのであつた。

彼等の一行は、第二の小屋で息を入れた。

そこにも、澤山の人足の人たちが、眞つ赤に焼けたストーブの廻りに、集つてゐた。

三人は、又、そこで、人足たちに席を與へられて、そして、前と同じやうなことを繰りかへした。一休みごとに、彼等は少しづつ濡れるのであつた。

廳で、一行は、レールの平原を通り越して、街に出た。そこで、ポイイ長に俵か籠かを雇ひたかつたが、そんなものはなかつた。波田と、藤原とは、交る交る汗だくになりながら坂を上り上つて、もう少し上れば、半島の頸部から、大洋の見える程、市街の高い部分へ上つて行つた。そこに公立病院があつた。

三七

受付で、診察券を買つて、外科の待合室で順番を待つた。全て、言葉の通はない國へ上陸したやうに、不案内であつた。船の生活が、彼等を、段々陸上に於ては、不具者同業にする

てたか知れないよ」と云つて、膝の邊を指さした。

「船長が、どうしても診せることを許さないんです。それで僕等は、自費で連れて来たんです。藤原は答へた。

「何か、船長と、例の如く喧嘩でもしてるんだらう、船ではよくあることだからね。君たちも強く出たんだらう。若い醫者は、近視眼鏡の奥で、その人の好きさうな眼で、笑ひながら言つた。

「そんなことぢやないんです。全く、話にならないんです」と、藤原は簡単に暴化の話と、横濱の話をした。

「足は、これで一週間もすれば、糸を除けるやうになると思ふんだが、胸の打撲傷の處は、一度、内科に、見て貰はないといけないね、どうも、そこは外科では、ちよつと困るからね。」と云つた。

「それぢや、胸を内科で診察して貰ふんですか」波田が訊いた。

「そう、その方がいゝね。足は絶対に動かさしちやいけないう五日か一週間の中に、もう一度来て下さい」

「は」と藤原は答へて、二人はポイイ長を抱へて、内科の方へ行つた。

一週間、以内なんぞに來られやしない——ことは皆を困らし、途方に暮れさせた。が、まあ、内科の方が、濟んでから

考へることにしようと、言ひ合せたやうに、皆が考へた。それは、痛い傷に觸れたくないやうな状態であつた。

内科の醫者は「熱が夕方になると出るだらう」と訊ねた。ところが船には、ともは知らずおもてには、検温器などはないこともなかつた。従つて、熱もあるにはたしかにあるんだが、高すぎるか低すぎるのか、皆目見當がつかなかつた。

「計つたことが無いんですが、實は、検温器がないんですから」藤原が答へた。

「夕方になると、氣分が悪くなつたり、寒氣がしたりしやしないかい」醫者は訊いた。

「え、しよつ中傷は痛いんですか、氣分がぼんやりして来るのは、夕方です、何だか、妙な夢なんぞ見て、壓されたりします。それに、寒氣も夕方になると、屹度來ます」安井は答へた。

醫者は、背中から呼吸器を聴診しながら首を傾けてゐた。「入院が能きるか。入院をした方がいゝんだがなあ」醫者は、藤原の方に問ひかけた。

「何でございませう病氣は、入院も、能きなかないと思ひますが、船の方から経費が出ないと、私達では、入院費が迎も支拂へないと存じますので。」藤原は、正直な處を打ち明けた。

「病氣つてのは、打撲から來たものだ、矢つ張りね。足のや

うに、中から骨と肉とで出來上つた處はいゝが、こう云ふ處は、内部に複雑な、機關があるからね。」と云つて、七面倒なむづかしい病名を云つた。

「で、病氣の原因が、負傷から來たものだと、云ふことが分れば、船から出るのかね？ 診断書を書いて上げようかね」と云つて、醫者は、診断書を書いて渡した。

「どうも有難う、いづれ歸船して、相談致しましてから。」三人は、禮を言つて、ボーイ長は、波田に負はれそこを出た。

診断書が、百通あつても駄目だらうとは思つたが、兎に角、それは、一つの有力な味方であつた。

今では、實際の負傷や疾病よりも、診断書の方が、重大な意義を持つてゐるのだ。殊に、それは、労働階級の負傷疾病の場合、そうであるのだ。工場醫は、資本家の診断によつて診断書を書く、と云ふ役目だけを勤める場合が多かつた。

資本家は、機械に截斷された労働者、ベルトに捲き込まれて、碎けてしまつた労働者、乾燥爐の中へ墮ちて、燒鳥のやうになつた労働者には驚かない。その診断書だけに驚くのであつた。

炭坑主は、自分の炭坑が、ガス爆發をした時に、五百人の男女工が、坑内で蒸焼きにされてゐることには、決して驚かないのだ。彼は、その坑口の密閉が三年後にか、五年後にか開

かれた時、未だ掘る部分が燒けずに殘されてゐるか、どうかに心配してゐるのだ！

汽船に於ても同じことだ。一緒に沈んだ人間は何でもない——然し、船體は資本家にとつて大きな永久の嘆きなのである。

船長も、ボーイ長の負傷そのものに對しては、驚くべき「理由」がなかつた。だが、此診断所は、幾分なりとも、何等かの衝動を興へまいものでもない、三人は空頼みにした。

小學校の小供たちが、本と辨當とを載せた、小さい櫓を引つ張つて笑つたり、喚いたりしながら、その高見にある學校から、ゾロ／＼と歸つて行つた。道が、急な坂をなしてゐる處になると、小供たちは、小供たちにとつても小さすぎる、その櫓の上へ、兩足を揃へて、まつしぐらに、下の街へ這り落ちて行つて、曲りそこねて、雜貨屋の店先に飛び込んだりその破目板に打つ衝つたりした。中にはうまく曲つたけ曲つたが、雪の掃溜の山へ衝突して、煙のやうな粉雪を撒き散らしたりする子もあつた。

これは、ボーイ長にとつて、堪らぬほど、愉快なことであつた。いゝ氣散じてあつた。

三四年前までの彼の姿が、無數に雪の上を這つたり、轉んだりするのである。彼は、足のことを忘れてしまつて、自分

の負さつてゐることまで忘れてゐた。

彼を負んぶした波田は、汗を垂らしてゐた。

「波田さん、菓子屋まで、まだ大分寄り道になるの、ボーイ長はフト菓子食べたくなつた。『きんつば』が食ひ度くなつた。出來れば、上等の蒸菓子の中へ入れる餡だけが食べたくなつた。彼は、甘いものを食べると、それは、血管を流れて行つて、足の傷所で、皮になるやうに感ずるほど、それほど甘いものに餓えてゐた。それと一つは「上陸した以上は、煎餅一枚でも食はないと氣が收らん」と言ふ波田へ、その機會を興へたかつた、と、休息したかつたのと、最も彼を、此學に出でしめた重大な誘因は、一分でも遅く船へ歸りたかつた、少しでも長く、陸の明るい處にあつた。清い空氣、ハツキリしたものゝ形、人間の生活、美しい一切のもの、それ等と一刻も長く、一緒にゐたかつたのだ。

「そいつあいゝ思ひつきだ」波田は、その積りで航路をそつちへとつてゐた。

東洋軒は、又、その日も、珍無類なお客を迎へた。ボーイ長は、足が利かないので、日本間の方に三人は通された。

全く、波田がどの位甘いものに對して、眞實の愛を捧げてゐるか、それは、私のよく表し得ない處だ。彼は、ほんとの酒好きが、酒に眼をなくす以上に菓子には參つてゐた。それ

は『病的』だつた。然し、一體に、船員は、何物、何事に對して『病的』に欲望を持つてゐた。安井、藤原なども量的には、時とすると波田以上であつたらう。

三人は、木炭の埋けられた火鉢を挟んで、菓子を摘んだ。こう云ふことは、ポイイ長は、未だかつて経験しなかつたことだ。非常に、慘憺たる生活をしてゐた労働者が、何か下らぬ犯罪で、監獄に投り込まれる。そこでは、彼は、未だ曾て食つたことのない豚肉や、魚肉やを食べさせられた。その労働は、彼を今まで、苦しめたよりも樂であつた。土地の瘠せた、産業のない、深い山中の谷間などから、四十を越して囚へられた、囚徒などの、稍々低脳なのに、そう言ふのがあつた。そして彼は、晩年を獄中で送ることを意に介しないやうに見える。

一八六三年、法刑及懲役にされた、囚徒の給養や労働状態について、英國政府が調査した結果からマルクスは、ポルトランドの監獄囚徒が、農業労働者や、植字工などよりも、良い營養をとつてゐたことを證明してゐる。(資、一ノ三、二三八ページ)

一八五五年、ベルギーに於ても、デユクペシオー氏は、書物の中で、悲惨でないと思はれてゐる標準的の労働者が、同國に於ける囚人の營養よりも、十三サンチームだけ營養が、少かつたと書いてゐる。(資、一ノ三、二四一ページ)

やしないよ」波田は通がつた。

「菓子の鑑別にかけちや、波田君は、ブルジョア的の、嗜好を持つてゐるからなあ」藤原は笑つた。

三人は、胸の焼けるほど菓子を食つた。その間に、疲労も恢復された。そして、暫くは、船のことや、一切のいやなことを、忘れてゐることもあつた。が、藤原の心は、ストライキが、いつ起さるべきであるかが、殆んど、忘れられなかつた。

彼は、菓子を食ひながら——「萬人がパンを獲るまでは、誰もが、菓子を持つてはならぬ」と云ふモットーを思つてゐた。此言葉、此モットーは、どの位、藤原を教育したことであらう。此簡單で分りのいいモットーは、全世界の、労働者たちの間に、どんなに、親しい響を以て、口から口へ、村から街へと、瞬く間に、擴がつて行くことだらう。そして、此言葉は『アーメン』を口にする人の數を、今では遙に、抜いてゐるのだ。そこには、新しい感激に燃える眞理が、炬火の如くに、輝つてゐるのだ。

藤原は、勘定を拂つた。濟まないなあ、僕が、おれいに奢る積りだつたのに」とポイイ長は、藤原に負さりながら、眞から恐縮して言つた。

ポイイ長の眞つ白の縋帯は、それでも血が滲んで來た。臍が出るよりはいゝね」と、ポイイ長は笑ふ元氣が出た。

世の中には、監獄よりも、食物や、労働に於ては、中には一切に亘つて、苦しい生活をしてゐる者もあるのだ。

ポイイ長は、負傷して、見舞金を貰つて、初めて、そんな炭火の埋けられた、茶の道具の並んだ盆や、名前も知らない非常にうまい菓子を食べ、お茶を飲み、ゆつとりした、氣分を味ふことができたのであつた。これは、監獄に入つて來て初めて『豚の肉』に、ありついた哀れな労働者と似てはゐないだらうか？

私は、讀者に、斷つて置かねばならないのは、以上のことに依つて、監獄がいゝ處だと云ふことには、ならないことを承知して貰ひ度い、監獄よりも悪い條件が、あると云ふことは、監獄が、いゝと云ふことの、一つの條件にもなり得ないからだ。

ポイイ長は、その注意を足や胸から、暫くの間は、引き離すことも、能きるやうになつた。彼は、つまり、いくらか外のことでも、考へることが出来るやうになつた。と云ふのは、手術をしたり、藥の香を嗅いだりしたのが、彼を、勸つたのだ。

「船に乗つてるとかう云ふものは、逆も食べられないね」など云つて、彼は「鹿の子」の小豆を齒で噛みとつたりしてゐた。

「全く、此の家の菓子はうまいよ、横濱にだつてたんとあり

然し、本船に歸り着いた時は、彼等は、グツタリ草疲れてゐた。ポイイ長は、その曳き足した足のために、再び、その神経は、掻き荒らされてしまつた。それは、美しい夢から眼覺めた、牢獄内の囚人の心に似てゐた。

一切は、又狭い、低い、騒々しい、不潔な、暗い、船室の生活へ歸つた！

三八

萬壽丸は、横濱へ歸ると、そのまゝ正月になるのであつた。従つて、船體は、化粧をしなければならなかつた。船側は、既に塗られた。次はマストが、塗られねばならない。

マストのシャボン拭き、ペン塗り、——この仕事は、夏はよかつたが、正月の準備などは、冬に決つてゐたので、困難であつた。シャボン水は凍つてヨーグルト見たいになるし、ブラシが凍るし、全く、始末に行かなかつた。

中でも、最も困ることは、體の凍ることであつた。

冬の日電柱に寒風が唸り、吹雪の朝、電柱の片面に、雪が吹きつけられて凍つてゐるのが丁度その面に日でも當つてゐるやうに見える。その電柱の數倍の高さと太さとで、マストは海中、何の遮るものもない處に吹き曝しに突つ立つてゐるのだ。

全くそのマストを相手の仕事は危くもあるし、寒くもあつ

た。仕事は一番のマストから始められた。自分で自分の體をロープに縛りつけて、それを、マストのテツペンへプロツコを縛りつけ、それへそのロープを通して、一端を自分が持つてゐるのだ。塗りながらだんだんそのロープを延ばし、延ばして塗り、塗つては延ばして下の方へ下つて來るのだ。

われ／＼の仕事はペン塗りは夏に於いては、大變やりいゝのである。夫はペンがのびるからである。ただ、此場合、ペンキはいくら油でのぼしても、夏の時よりも遙に濃い。波田は濃くて堅くて延びの悪いペン罐を腰のバンドに縛りつけて、マストのテツペンから塗り初めた。

向ふ側を西澤が塗つてゐた。

高架棧橋は、マストのテツペンから四五間下に見えた。

「棧橋は高いやうだが、マストよりは低いんだナア」波田は西澤に云つた。

「そらそうだ、だがどうだい寒いこたあ、手に感じなんぞありやしないぜ」

二人は、ペンブラツシユを小供が箸を掴むやうにして掴んで塗つてゐた。風のために彼等を吊してゐるロープは揺れた。彼等は機械體操をする人形のやうに、足をピン／＼させながらマストから、離れず、即かすの處で仕事をしなければならなかつた。どうかすると二人の労働者は、マストの一つの側で打つかるのであつた。

「オイ／＼、こつちは俺の領分だぜ！」

「冗談言つちやいけない」

そこで二人は横を眺める。棧橋が左の方にあれば、西澤が正しいのだ。西澤は船首から船尾を向いて、船首部分を塗るのだつた。

彼等を吊るしたロープまで堅く凍つたやうに感ぜられた。彼等は勿論『棒だら』のやうに凍つて堅くならないのが不思議であつた。

「こんな團扇見たいなボロ船を化粧してどうするつてんだらう。え、船長も物好きぢやねえかなあ、いくらお正月だつて室蘭でマストのペンキ塗りなんぞ、萬壽丸の船長でなきや考へ出せねえ名案だぜ」西澤がガタ／＼震へながらそれでも、早く降りたいばかりに、盲目が杖を振り廻してもするやうにむやみに塗り立てた。

「奴あ、おいらが、マストにくつついて凍つたのが見たいんぢやなからうかい？ え、俺は、彼奴の魂膽はてつきりそこだと思ふよ」波田も震へてゐた。

「極つてらあね、金魚が凍りついたのよりや、餘つ程、人間がマストへ凍りついた方が珍らしいからね」西澤が答へた。

大きなマストも、其高い部分では、随分揺れた。それは、その磨ぎ澄ました日本刀のやうな寒風が揺るのだつた。

「はたちやそこらでペンカン提げて、マストに昇るも——親

のばちかね、西澤は坑夫の唄をもぢつて、怒鳴つた。

「——シユシユ、どころか今日此頃は、五錢のバツトも喫いかねるシユツシユと——波田も唄つた。

「何だ捨てられた小犬見てえな音を出してやがる」西澤が冷かした。

「おめえのはペン罐を叩いてるやうだよ」波田がやりかへした。そして彼は下を見た。

「オイ、未だ大分あるぜ、何とかうまい便法はねえかなあ」波田はこぼした。

「あるぜ素敵にいゝことが」西澤が云つた。

「へッ！ 下に下りてストープにあたるこつたらう」

「もつといゝんだ。マストのテツペンから海へ飛び込むんだ！ さうすれや、どんな難病でも、いやな仕事でも一度に片がついてしまはあ」

「全くだ」

彼等は殆んど、無意識に、マストを、こすつてゐた。水の中で金魚が凍るやうに、彼等は、宙天の空氣の中で凍りさうであつた。

西澤と、波田とは、マストのペンキ塗りを『やり仕舞』で命じられたのであつた。『やり仕舞』とは字の如く、やつてしまへば、その日の仕事の仕舞と云ふことであつた。詰り仕事を、請負つてやることであつた。

それは大抵都合の悪いことであつた。何故かならば、仕事を當てがふ方では、普通の一日行程ではなし遂げ得ないで、然も急いでゐる仕事を『やり仕舞』に出すのであつた。すると、出された方では、尻尾に紐を縛りつけられた犬のやうに、無暗にグル／＼廻つたり、飛び跳ねたりして、その仕事から免れやうと狂ふやうに働くのだ。

「やり仕舞だぞ、二時には済まあ」セコンドメイトは、未熟の南瓜のやうな氣味の悪い顔を妙に歪めて、さう言つて、自分の室へ行つてしまふ。さうするとその仕事はきつと五時には済む。普通より一時間だけ餘分に働いて、二倍以上の骨を折つたのだ！

彼等は『やり仕舞』と云ふ『わさびおろし』で自分をすりおろすのだ！

それは、陸上に於ける請負仕事、或は『せい分』仕事、と同じものだ。

『やり仕舞』の仕事で、時間の後れるのは、それは労働者に『腕がない』のであつた。仲間から言つても、夫は『だらしのない』ことだつた！ 自分から云へばそれは『自業自得』であつた。そして、資本家から言へば、『だからこれに限るのだ』つた。それで、『俺たちが儲かる』のであつた。

彼等は、殆んど骨の髓までも冷たくなつて、夕方、外の水夫たちが、飯を食つて了つた後で漸く、その『やり仕舞』を

終へた。それは彼等の言ふのが正當であつた『やりづらひ！』と。

三九

一切は兎も角も順當に行つた。

高架棧橋からは、豫想以上に、石炭を吐き出した。それは黒い大雪崩となつて、船艙へ文字通りになだれ込んだ。仲仕は、その雪崩の下で、落ちて来る石炭を、隅の方へくくと、シヨベルで掻き寄せた。上の漏斗からの出方が速くて量の多い時は、數十人の人夫のシヨベルの力は間に合はないで、船のハツチ口は、石炭で塞がつてしまひ、人足達は船艙の四隅の空いた處へ密閉されてしまつた。

彼等は、苦しさで暗らさから、其身を救ふために、そのありたけの力で、石炭を隅の方へ掻き寄せた。そのシヨベルの音、石炭のザク／＼鳴る音、彼等が何か呼ぶ聲が、デツキの上をあるいてゐると、初めての者にはどこから聞えて来るか分らないのと、その音が全て若しあるなら冥土からでも出たゞらうと云つた風な妙に陰氣な響きであるので、必ず驚かされるほどであつた。そしてハツチ口に山のやうに高く積んだ石炭は、うまくダンブルへ收まつて、中の労働者が上へ上ることが能きるだらうかと、心配せずにはゐられない程高かつた。

労働者達は、時とすると半日も石炭に密閉されて、隧道に密閉された土工のやうに、暗い中で働いてゐるのであつた。出て来ると、全て體中が肺で出来上つた人形でももあるやうに、幾度もく／＼飽かずに深呼吸をしてゐるのであつた。そして、胡摩鹽のついた、非常に大きな、――それは他のどの港でも見られない――人間の頭程の太さの、整頓した、等邊三角形の、握り飯を一つづつ、親方から受取つて、船室へ持つて来ては食つてゐた。

それはセイラー中での食ひ頭三上でさへも、一つは連も食べられなかつた。それには胡摩鹽以外何にもおかずはついてゐないのであつた。人足は夕食にその握り飯を一つ貰ふと、明け方までは、義務として、残業労働を、再びその害の中で、『あの世』の人の如くに續けねばならないのであつた。

石炭の運賃は、その頃一噸について室濱間が五圓であつた。従つて、石炭は水夫室にまで積み込まれた。水夫の月給は八圓乃至十六圓であり、仲仕、人足等は八十錢の日賃銀を貰つてゐた。そしてその途方もない握り飯に釣られると、一圓三十錢丈、一晝夜で貰へるのであつた！そして石炭の運賃は噸五圓であつた！

ありとあらゆる隙間は石炭を以て填充された、保険マークはいつも波が洗つて、見えなかつた。そして、糧食は、かつきり豫定航海日數分だけが、積み込まれてゐた。

船主や株主等にとつては、黄金時代であつた。水夫たちや、労働者たちにとつても過度労働の黄金時代であつた。たとへば、汽船はゼンマイ仕掛のおもちやのそののやうだつた。ゼンマイの利いてゐる間は、キチ／＼と些も休むことなく動いた、従つて、水夫たちも船長にしても、同じやうなことであつた。船長は稍々そのために水火夫へ對して當つたのかも知れない、迷惑な話だ！

人足たちは、棧橋から轟音と共に落ちて来る、石炭の雪崩の下でその賃銀のためにはなく、その雪崩から自分を救ふために一心に、血眼になつて働いた。そして、その爲に彼等の労働は一ヶ月に廿日以上は、どんなに體格の者にも續けられないのであつた。そして、彼等は粉炭を呼吸するのだ。然し、良かつた。一切が分らなかつた。一切が知られなかつた。馬車馬のやうに暗雲に稼ぐのはいゝことなのであつた。そして、資本主にとつても此事は此上もなくよいことであつたのだ。そして、その頃は歐洲戦争が行はれてゐたのだ。

その時であつた。わが日本帝國の富が世界列強と互角するやうになつたのは！

その時であつた！日本が富んだのは。その時であつた日本の資本主達が富んだのは！労働者は其代り過度労働ですつかり、體をブチ壊してしまつた！

ツチ口は未だ開かなかつた。デツキの下では、――テーブルの下邊りでも、ボーイ長の寢箱の下あたりでも、あちこちで、ゴト／＼と、異様な響きが絶えず續いた。そして時々唸るやうな人聲が聞えた。そして、それ等も七時を過ると、漸く穴が開いた。それは難治の腫物が口を開いて膿を出し切つたのと同じ喜を人足達に與へた。山の絶頂へでも登りつた人のやうに、彼等はシヨベルを杖にして石炭を踏みしめて上つて来た。

そして、その例外に太い握り飯に有りつくのであつた。彼等はかうして、ダンブルの中で土蜂の様な作業に従つて、窒息しさうな苦痛を嘗めてゐる時に、その境涯を羨んでゐるものさへあつた。

それは高架棧橋上の労働者であつた。それは船のマストと高さを競ふ程も高いのであるから、その風當りのよいことは、送風機のパイプの中のやうであつた。

彼等は、石炭車の底部にある蓋をとる。石炭は棧橋へ作られた、漏斗の上へ落ちる。そして、船のダンブルへドドツと雪崩れ込むのである。彼等が労働する部分は皆鐵で出来上つてゐる。そしてその鐵は燒鍍のやうに、それに觸れると肉を引つ剥いてしまふ。彼等は帆布で作つた大きな袋を足に『着て』ゐる。彼等はまた毛布と毛布との間に、綿や毛などを詰めた赤や灰色の仕事着を着てゐる。それは、彼等が、その眼

の廻るやうな、過激な労働時間以外に着てゐる、唯一の防寒具である。彼等は、又、皆、鎮西入郎爲朝が、嵌めてゐたゞらうと思はれるやうな、弓の手袋に似た革手袋の中で、その手を泳がせてゐる。

北海道の寒風が林檎の皮を緻密にし、その皮膚を赤く染めたやうに人足等も、その着物を厚くし、その頬を酒飲みの鼻の頭のやうにしてゐる。

だが高速鋼のカッターは、鑄物を、ナイフで大根でも、削るやうに削る。と同様に北海道の寒風は、労働者たちからその體温をどん／＼奪つてしまふ。棧橋の上で働いてゐることは、焔の中へ氷を置くのと反對な、然し似合つた作用をする。

彼等は、その労働を終へた時、歸つて行く、空荷車の上へ攀ち登るのが困難な位に、體が硬くなつてゐるのだ。彼等の一人は言つてゐた。

「まあ、生きながら凍つたやうなものづら」と。

然し、労働者は、生きて行くためには死を怖れてはならなかつた。

四〇

藤原は、自分の寢箱の中で、腹匍ひになつて、紙片に何か書いてゐた。それは、何か本の抜き書きでもするやうに、側

方向に脱線して、坐礁したと云ふことを、覺らねばならぬだらう。

そして、それ等の原因は、水夫等が、要求條件を提出して、目下交渉中であるから、彼等は、働いてゐないのだ。それで、船が動かないのだ！と云ふことが、船内一般に知られるだらう。我々の要求條件は、エンヂンの労働者に依つても、吟味せられるだらう。この要求條件は、彼等にも、何等かの衝動を與へるだらう。そして、そのために、この要求條件は、よく考へて、作らなければならぬ！

藤原は、煙草の煙の間から、こんなことを考へてゐた。

彼は、その紙つ片を眺めた。それには、要求條件の原案らしい文句が、書かれてあつた。労働時間の制定、労働増額、公休日、出帆、入港は翌日休業、公傷、公病手當の規定及勵行、深夜サンパン不可、などが亂雑に書かれてあつた。

彼は今、それ等の條項に、要求書としての形を、與へるために、苦しんでゐるのだ。あつた。「チエツ！藤原は舌打をした。そして、煙草の灰を本の表紙の上に、やけに拂ひ落した。「こんなことを今更ら、要求しなければならぬなんて」彼は、その紙片をポケットに入れて、寢箱から下りた。そして、波田へ訊ねた。「小倉君の方は、どうなつたんだらう」「さあ、それを、未だ何とも聞かないんだがね」波田も、心配してゐるのであつた。

には二三冊書物が置いてあつた。彼は、煙草を喫かしてゐた。二本一緒にくはへたらいいだらうと思はれるほど無暗に、スバ／＼と喫かしてゐた。彼一人でおもてを燻べ上げるに充分であつた。

ダンブルには、殆んど石炭が一杯に詰つた。本船は、豫定通り、明早朝出帆して、横濱へ歸つて正月を迎へることが能きさうであつた。横濱で正月を迎へることは、總ての船員の希望であつた。「室蘭では仕様がな」のであつた。

横濱には船長も、機關長も、誰も彼もが、世帯を持つてゐた。その自分の世帯で、お正月を迎へ度いと云ふことは人情として當然であつた。萬壽丸は、三十一日の午前十時頃か、もつと後れて横濱へ歸りつづける豫定であつた。従つて、その豫定は、一時間も延長し得るものでなかつた。

明朝一番で船長は登別の温泉から、その愛人と別れて、一番の列車で、室蘭へ歸つて来る筈であつた。

船長が、船へ上り切ると同時に、ブリツヂには、彼の姿が現れるだらう。そこで、彼は「ヒーポイ」と、錨を巻くことを號令するであらう。

それまでは、今までの些も變らないだらう。だが、それからが、變るだらう。彼等は『横濱正月』が、既に實現され得るものと信じてゐた。その安心を、甚しく揺り動かされ、のみならず、その他のことも一切が、全て、プログラムと違つた

「小倉は、當番かい、今？」

「どうだか」波田は、出入口まで行つてブリツヂを見た。

小倉は、ブリツヂを、アチコチ歩きまはつてゐた。

「あるよ。海圖室で、相談しやうぢやないか」波田は、ストキに耳打ちをした。ストキはうなづいた。

「ぢや僕が、都合はどうだか、訊いて来るから、君は、エンヂンの上で、待つて、呉れ給へ」

波田は、そのまゝ、氣輕に飛び出して行つた。藤原は、一度奥まで入つて、そこで、ベンチに腰を下した。そして、煙草へ火をつけた。暫くすると、フト何か、忘れものでも考へついたやうに、立ち上つて、デツキの方へ出て行つた。

幸に、メーツ等は、明朝出帆の名残を惜しむために、皆どこかへ行つてしまつてゐた。

三人は、チャートルームへ集つた。

「西澤君に来て、貰はなきや」小倉が言つた。

「今、女郎買ひの話で、おもてを持ってさせてゐるから、目立つたらいかんだらう、と思ふんだがね」藤原が答へた。

「あいつあ、全く、仕様がな」よ。女郎買ひの話となつたら、全て、夢中になつちまやがるんだからね、もう少し眞面目な時は、眞面目に、やつて呉れなくちや、困るんだけどなあ」波田は、口惜しがつた。

「然し、中には、中にはぢやないや、殆んど誰もが、それ以

外に何も無いのに、それ以外のものを、あの男は持つてゐるわけ、いぢやないか、味方に對しては、我々は、徹底的に寛容な、態度を取らなきやならないよ。さうしないと、味方の戦線から、自然に壊滅しちまふからね。藤原はなだめた。

「で、コーターマスターの方はどうだらう。未だ、話して貰へなかつたかしら」藤原は、小倉に訊いた。

「未だ、話さないんだよ。どこから切り出していいんだか、話が、すつかり、打ち撒けられないので困つちやつたんだよ。だからね、要求書を出す間際になつて、それを見せて意見を聞いたら。そして若し、コーターマスターとしての、提出要求でもあると云ふことなら、それを追加して、提出すると云ふことにしたら。」小倉は答へた。

「さうだね。その方がいゝだらうね。」藤原は賛成した。「その方が、秘密を保つ上にも、反つていゝだらうよ。」波田も賛成であつた。

「ぢやあ、僕は、西澤君を連れて來よう。そして、決めたまはなきや、明日のことになるのぢやないかい。」波田は、何だか追つ立てられるやうに、心が急がしいのであつた。

「ちよつと。」小倉は手で制した。「僕は、もう十五分て非番だから、非番になつたら、ともの倉庫で寄り合つたらどうだらう。」時計は、八時十五分を指してゐた。

「さう、さうしよう。一人宛、チョツと上陸すると、云つた

「そこで、僕等は、いつ浪に浚はれるか、ウキンチでやられるか、どこで、やられるか分らない危険な労働をしてゐるのに、ボーイ長のやうに、負傷はさせつ放し、死ねば死につ放し、と云ふやうな状態では、迎も不安心で、落ちついてゐられないんだ。それで、僕は、公務疾病、傷害手當規約を本船に作つて、それで以て、扶助すべきだと思ふ。それを諸君に、計り度いんだ。そして、たゞ、そんなものを作つて貰ひ度いと、云ふ丈では役に立たないものを作るだらうから、こつちで二人、向ふて一人の委員を出して、その委員会によつて、扶助規則を作ると云ふことにしたら、どうだらうと思ふのだがね。」藤原は言つた。

「それや、是非必要なこつた。」西澤が言つた。

「然し、規則の點だが、委員会で、おもての意志が、果して貫徹するだらうか、僕は、その點に疑ひを持つよ。」波田が言つた。

「さうだ、だから、こちらから二人、向ふから一人と、云ふ割合にしといたんだがね。」藤原が答へた。

「それや、形ではさうなるけれども、實際に、その委員会は、ともの一人のために、おもての二人が支配されることになりはしないだらうか？ 若し、おもての二人が、支配されまいためには、僕は單に、その條件のみについても、一度ストライキが、起されやしないかと思ふんだよ。さうなれば、

格好をして、出ればいゝからなあ。」
「ぢやあ、さうしよう。」そこで、二人のセイラーは下へ降りた。

おもてへ歸つた波田は、西澤に、八時の鐘がなつたら、ともの倉庫で、相談があるから、分らないやうに抜けて來て、呉れるやうにと云つた。西澤はうなづいた。

ストキは、ベンチへ聴衆の一人と、云つた様な顔付きで腰を下して、例に依つて、煙草を喫かし續けた。

四一

八時が鳴つた。その時には、もう藤原はゐなかつた。波田は、ボーイ長の傍に、腰を下して話してゐた。ぢや、正月までの菓子や、食ひ貯めて來るからね。お土産も忘れやしないから、待つてゐ給へよ、え、不相變、東洋軒さハハ、と、波田は、ともの倉庫を東洋軒にしてしまつた。

「え、西澤は頓狂な聲を出した。」波田君！ 僕も、稀にや連れて行けよ。」そこで、二人は、連れ立つて、ともの倉庫へやつて來た。

藤原は、目玉ランプを抱へて、綱敷き天神見たいに、ホーサ一の、捲き重ねてある上に坐つてゐた。やがて小倉もやつて來た。

それで、一切は動員された——と云ふ譯であつた。

それは、二重の手間をとることになるからね。」波田が言つた。

「さうさなあ、それぢや、どうすればいいんだらう。」小倉が言つた。

「なるほどね。こつちからの委員は、木偶の坊も同じだからね。」藤原も賛成した。

「で、結局、どう云ふ風にすればいいんだらう。」
「僕の考へでは、こつちで作つてしまつて、向ふには、たゞそれを承認するか、しないかの二つの回答の中一つを、選ばせる丈けていゝと思ふんだがね。でないと、何しろ出帆前の突嗟の間に、決する勝敗だから、出帆後に持ち越せば、こちらの負けになるに決つてるんだからなあ。だから、一切の條件は、それを承諾するか、しないかどちらかのみ、決定の能きるやうに、ハツキリしたものにして置いて、そして出帆間際の致命傷を突くと云ふことが、一等よかないかと思ふんだがね。」波田の考へはこれだつた。

「さう、その方法はいゝと思ふね、今室蘭には、一人も、休んでゐるものはないさうだ。二三日前まで休んでた者が、二人許りあつたさうだが、仁威丸に、便を借りて濱へ歸つたさうだ。室蘭なんぞぢや雇入れる船はないさうだ。」小倉が言つた。「だから、たとひ四人でも五人でも、時機さへしつかり捕まへれば勝てると思ふよ。」

「だから、その要求条件を、茲て作らうぢやないか」西澤が言った。

「それは、藤原君に草案が一任してあるから、それで以て作つて行かうぢやないか」波田が言った。

そこで、藤原の原案に依つて、新しい要求条件が、巻き重ねられたロープの上で、その夜十一時頃までかゝつて作り上げられた。

それは、

一、労働時間を八時間とすること。(現在十二時間以上無制限)

八時間以上は、必要なる場合労働するも一時間に付、正規労働時間の倍額の賃銀を支給すること。

二、労働賃銀増額、——水夫、舵手、大工等下級船員全體に對して、月支給額の二割を左の方法に依つて増給すること。

方法、下級(下級とは何だ!)船員全體の月收高の總計の二割を、下級船員の人頭數に平均に配分

し、これを在來の賃銀に附加すること。

三、日曜日公休を勵行すること。

四、公休日に出入港したる時は、その翌日を休日とすること。

五、作業命令は一人より發し、幾人ものメイツより同時

に幾つも發せられぬやうにすること。

六、横濱着港の際深夜、船長私用にてサンパンを以て、水夫を使用して、上陸することに對して、吾人之を拒絶すること。

七、公傷、公病に對しては、全治まで本船に於て、實費全部を負擔し、月給をも支拂ふこと。

以上

と云ふやうなものであつた。それは、小倉が、舵手室へ歸つて清書して、波田に手渡しする。交渉の順序は、明早朝、出帆準備にとりかゝる前に、チーフメイツに手交して、我々は全部の要求が承諾されるまでは、船室から出ない——と云ふことに決定した。

要求条件は、労働時間と、労働賃増額と、公傷病手当の三つの完全に利害をフアヤマンの方と一致した。そして、其三つは、要求條項中重要なものであつた。「だから、われ／＼は、この要求をフアヤマンの方へ無斷でやると云ふ譯には行かないだらう。」勿論。

そこで、小倉がフアヤマン(火夫)コロツバス(石炭運び)に報告し、藤原がオイルマン(油差し)に、水夫達はかう云ふ要求条件を出して戦ふ。戦線を共同して貰へれば、此上もない事だが、さうでなかつたら應援をして貰ひ度いと、云ふことを申し込むことになつた。然し、それは、われ／＼の要

求條件がチーフメイツの方へ持つて行かれると、同時になければなるまい。何故かならば、それは、セイラーの方で計畫實行しなければならなかつた程、セイラーによつては、緊密な要求だが、火夫の方では、或者にとつては、さうでないかも知れないし、より一層われ／＼が怖れるのは、スパイだ。スパイに對しては、われわれは絶對に、氣をつけねばならない。それは、ベストのバクテリアよりも怖いんだから、スパイはいつても居さうな處に居ないことは、柳の下の鱈と同じことだから、猶更われ／＼は細心に注意しなければなるまい。だから、少し手後れのやうに思はれるかも知れないが、明日の朝にした方が、よくはないか、それはどうしても、明日の朝でなければならぬ——と云ふ事も決定した。

そして今一つ重大なことが、決定された。それは、此の要求提出を機會として、それが成功しやうが失敗しやうが、兎に角く、要求を出したと云ふことに丈けは、成功した譯なんだから、その記念として、我々は海員組合——それが無いならば作らうし——へ加盟しやうではないか。確か、それは極く最近生れたやうに、臆げながら聞いた。それは、濱に歸つた上で、早速調査して組合があれば、直ちに入會に決することになつた。

公傷病手当の規約については、直ちに實行するのは、勿論であるが、ボーイ長の手當は、その新らしく決定された規約

に依つて爲すこと、を忘れないやうに、交渉すること、これも、その通りに決定した。

彼等が、かうして、彼等の必要なる要求をするのにも、何か、不都合なすべからざる行爲を企ててもしてゐるやうに、彼等、自身が先づ、之を秘密にし、それが、成らない時は——と云ふ善後策をも考へねばならなかつたことは、何を意味してゐるか。

それが、何を意味してゐるやうだが、私の知つたことぢやない。たゞ、私は、彼等が、人間としてあたり前のことを最小限度に要求する時に當つて、いつでも、その企ては、慎重に秘密にされる習慣を知つてゐる。誰でも、地獄に落ちたくはないのだ。誰が、人間をこんな、コツ／＼するやうに仕込んでしまつたのか。

丁度此時、船長は、そのマストが奇麗になり、サイドが化粧し、うまい具合に満船したと云ふ報知を、チーフメイツから受け取つて、彼女と、酒を飲んでゐた。彼女は、「これが、此年のお別れで、來年は、又、すぐ會へるのね」と言つた風な意味のことを言つた。

「俺は、お前の美しいのが好きだけれど、そこが又、俺を心配させもするんだよ」と、彼は盃を舐めた。それは登別の温泉宿の一室で、燃えるやうな、緋の布團のかゝつた炬燵の中であつた。

ポイ長は、其の時、鐵のサイドが、同時に彼のベットの一方である、其の寢箱の中で、海のものとも山のものともつかない傷と、病のために唸つてゐた。
水夫等は、彼等を、餘りしつかり締めすぎる鎖を、少し弛くするやうに、要求する相談の最中であつた。
三田子爵は、此汽船會社と、その炭坑との社長だつた。彼は其の時、何をしてゐたか、雲の上に隠れてしまつて見えなかつた。

四二

夜が明けた。風がヒュー／＼唸つてゐた。灰色の空は、どこからともなく、山となく平原となく水平線となく、とけ合つてしまつてゐた。その間を粉のやうな灰色の雪が横つ飛びにケシ飛んでゐた。だが、大した雪ではなかつた。目も、鼻も、開けられないと言ふ、あの特徴的のやつてはなかつた。
風は、大黒島を代れば必ず、前航海程には吹いてゐるだらうとは想像された。ハツチは、未だその口を開けたまゝであつた。それは粟おこしを食つた子供の口の邊に似てゐた。デツキ中は石炭だらけてあつた。その各片はデツキの鑄瘤のやうに、デツキへ堅く凍りついてゐた。
ポースンはチーフメートの處へ、其の作業の順序を聞きに行つた。すぐ其の後からストキ藤原が、清書された要求書を

つた。彼は字義通り立ち往生した。

ストキは平氣だつた。「初めやがつた」と彼は思つてゐた。「そこに書かれてある通りの要求です。御質問があれば御答へ致します」

ストキは『續に障る』ほど落ちついてゐた。「どんな要求でも今はいいけない。横濱へ歸つてからだ！」チーフメートは、事態が自分の考へてるやうに簡單でもなく、又豫想通りにも行かないだらうと云ふことを覺つた。

「私たちは、室蘭で片がつかなければ働かないだらうと思ひます。この要求は殆んど海軍法に定められてある最小範圍から、極めて僅か出てゐるか、出てゐない位のものだし、その他の問題も普通の問題です。今頃要求するのは、われ／＼の迂愚であり、同時に萬壽丸の恥辱でしょう。然し、それは、われわれにとつては、全く切實な問題なのです。これは、あなた方にとつて全く一顧の價値もない、輕易な問題でしょう。それが我々には重大な問題なのです。これを御覽の上承諾して下さいるやうに希望します」

ストキは全て小學校の生徒が讀まされる時のやうに、「まじめ」くさつてさう言つた。
ポースンはおじ／＼してゐた。逃げるにも逃げられないわけであつた——
「兎に角、俺には何とも返事ができない。船長が歸つてか

持つて續いて行つた。小倉は、起きると共に火夫室へ行つた。水夫等は、それはいつもの朝とは何だか大變違つた朝のやうな氣がした。全く實際違つた朝ではなかつたらうか。

ポースンは、チーフメートの室に入つた。そして彼は後を締めやうとすると、もうストキがすつかりその體を入れてゐた。そして扉は後からストキによつて締められた。

「お早うございます」とポースンは云つた。
「うんすぐすぐ」チーフメートが仕事の命令を發しやうとすると。ストキはすぐに、チーフメートの机の上に、其要求條件を載せた。

「水夫一同は、その要求書通り要求しますから、要求を容れて下さい。そしてその要求書に判を捺して下さい。詰りそれが要求承認の意味になるのです」

ポースンはそこへ凍りついた棒のやうに立つてゐた。
チーフメートは、暗礁に乗り上げたよりもつと／＼驚いた。

それはあり得ることではなかつた。暗礁はあり得るが、水夫等が要求書を出すなんてことが！彼は憤つてしまつた。

「何だ、要求だ！ どんな要求だ！ 乗船停止の要求か！」チーフメートは怒鳴つた。

ポースンは縮み上つた。彼は私は知りませんと言ひ度かつたが、——そこにストキが立つてゐるではないか——あゝ困

ら、船長と相談して返答する。だが、ストキ、こんなことあ止した方がいゝぜ、これはお前のために俺は言ふがなあ、もうお前も三十一なんだから、考へてもいゝ年ぢやないか、これや全く止した方がいゝぜ、船長がウンと云ふ筈がないと思ふぜ。そうすれや、お前たちや一年か三年位の停船命令は食はにやなるまいぜ、え、どうだ、おもてへかへつて、水夫等に思ひかへすやうにすゝめたら」

チーフメートは、そのコースを轉換した。

「私はさう云ふわけには行きませぬ。ひつ込められるやうな、どうでもいゝやうな要求は私たちは出しはしません。それはわれ／＼の生命や生活にとつて切實な事柄許りなんですから。冗談や退屈凌ぎ半分でこんなことをしはしません。私達は乗船停止なんてことを今頃恐れてゐるやうでは、こんな要求が出来ないことを知つてゐます。要するに、私たちは、此要求が、容れられなければ、私たちとしては、どんな仕事にもつかないと思ふ申合せがしてありますから。私はたゞ、使として此要求書の提出と其説明とを引受けて來たのです」

ストキはチーフメートの戦術には吊り込まれなかつた。「それぢやどうしても訊かんと云ふのなら、船長に俺から渡すまでだ。だが、それは承認されないよ、そして俺の顔も踏みつぶす積りなんだな」チーフメートは自分の手で納めたかつた。

「そうです！ 船長に渡して下さい。それから、あなたの顔をつぶすかつぶさないとか言ふのは、おかしいと思ひます。そんなことはどうだつていゝやうなものだけれど、誤解があるといけないから云つときますが、此要求書は最初あなたに出したんですよ。そうするとあなたは俺では決られんから船長へと云はれるのでしやう。で船長へ渡すことを頼めば、俺の顔をつぶす」と云はれるんですね」

「そうではないか、俺の言ふことを聞かんぢやないか」チーフメートは一つグツと押した。

「それではあなたは、私達の要求書の決定権を持たないと云ふときながら、握りつぶす権利を持つてることになりはしませんか、握りつぶすことは否定することぢやありませんか、否定する権利だけ持つてゐて肯定する権利を持たないと言ふことは、此頃の流行にしても、理屈には合はないぢやありませんか。だから、あなたに對して、今ではわれ／＼は何等の要求もしません。たゞ取り次いで頂ければいゝのです」ストキは矢つ張りまじめに、急がず、何か相談でもしてゐるやうな調子で話した。

それは全くチーフメートの顔をつぶしてしまつた。彼はうんともすんとも云はなかつた。

「船長が歸つたら渡すよ」

「どうぞ願ひます」ストキは去つた。

四三

船長は歸つて來た。

ボースンは、水夫たちへ『無分別』をしないやうに頼みに行かうとしてゐるところへボイイはチーフメートの室へ現はれた。

「チーフメートさん、スタンバイださうです。船長は今ブリツヂに上られました」

そのまゝボイイは去つてしまつた。

何と言ふこつたらう。「始末がつかない」ボースンも、チーフメートもこれから殴り合てもしさうな格好で、二人向き合つてそこに突つ立つてゐた。

「兎にかく、お前はおもてへ行つてスタンバイして呉れ、何とでも誤魔化して水夫等を働かしてくれ！ 僕もすぐ行くから」チーフメートは漸くそう云ふと、急いで帽子をとつた。

ボースンは追つかけられた猫のやうに、おもてへ飛んで行つた。

チーフメートはブリツヂへ駆け上つた。右の手には要求書を引つ摺んでゐた。

船長はスタンバイをかけたのに、チーフメートがフォックスルに現れないので、彼女との別れ前からそのまゝ保つてゐた幸福感が、爆發しかけてゐた處であつた。彼はチーフメート

大工はフォックスル（おもての甲板）へ上つて揚錨機をゴツトン／＼と調節したり、油を差したりしてゐた。

ボースンはチーフメートの室で、おそろしく極りの悪い思ひをしながら未だ、そこに突つ立つてゐた。

「どうしたんだい。ボースン、お前はこれを知らなかつたのかい」チーフメートはその机の上の要求書を指さして訊いた。

「早いことをやるものです。私は全て存じませんでした。ボースンは甦つたやうに答へた。彼はもう先刻から、何でもいから一言口を利き度くて堪らなかつたのだ。

「些も知らないぢや困るぢやないか、お前に責任があるんだぜ。一體どうする積りなんだ。それに今日出帆が遅れてもすると正月には横濱へ歸れやしないぜ。そんなことにでもなつて見ろ、船長は、一人残らず下船を命じかねないから、お前はどうする積りかい」チーフメートはボースンから切り崩して行かうと突嗟に考へつた。

「私は……困りましたなあ、ボイラーを揚げる時も漸くなだめて仕事をさせたのですけれどもなあ、兎にかく全く私もぬかつてゐたのですからおもてへ行つて出来る丈け仕事するやうに話して見ます……」彼は確信でもあるものゝやうに慌てゝそこを立ち去らうとした。

トが上つて來たのでチヨツとニツコリした。「どうも、サア、スタートしよう」船長は云つた。そうして息を切らしながら彼の前に突つ立つてゐる、チーフがたゞぢやないのを見てとつた。そしてその紙つ切れへ眼をつけた。「水夫奴等が要求書を出してゐるのです。舵夫まで二人入つてゐるのです」チーフメートは漸くこれだけをいふことができた、彼は要求書を船長の前へ差し出した。

水夫の出入口では、三尺巾の出入口へ、一尺巾のベンチを抱へ出した、藤原が出入口へ最も近く、波田、小倉、西澤、と腰を下して、顕微鏡的なピケツテイングラインを張つてゐた。藤原は船長とチーフメートとが要求書のことを話してゐるのを、おもての出入口から眺めてゐた。

船長はチーフメートの要求書を見やうともしなかつた。そんなものはチーフメートが、引き破いてしまへばそれで圓滿解決が、船長に言はせるとつくだであつた。それなのに、チーフは、そんな下らないことまでも俺の處に持ち込んで來るのであつた。

「そんなものは、引き裂いちまひ給へ！ そんなもの、大體君がビク／＼してるからいけななんだ！ 萬事は横濱へ歸つてから聞いてやるとそう言ひ給へ」船長は全てチーフメートが指尺でもあるやうに頭から足までを計つた。

「私もやつて見たんです。ところが、それが容れられるまで

は絶対に働かないと云ふのです。來年の春になつても働きやしないとかうなんです。そしてそれは船長が決定權を持つてゐるんだから、あなたは船長へ渡してさへ呉れ、ばい、なんだ、と云ふんです。私はどうせ後で分ることだからと思つて取つたので、チーフメイトも、船長からガミ／＼やられると、「何だ此野郎、俺だつて後一年で船長の免狀がとれるんだぞつ」と思はざるを得ないのであつた。「團扇見たいなポイト見たいなチヨコマン舟の船長で威張つてやがら。へん、ポースンと云つた方がよく似合ふよ」と憤慨するのであつた。が、それは思ふ丈けのもので、何とも爲方がなかつた。「どんな寢言が書いてあるんだか見せ給へ」船長は要求書を取つた。

「そら奴は受取つたぞ！」藤原が低い力のある聲で言つた。「フン」、「フン」船長は輕蔑しきつた心持を鼻から吹き出した。が、第六の條項、深夜サンパンを船長の『私用』では漕がない、と言ふ點に至つては彼は鼻を鳴らすことを止めた。これは彼自身に關することであつた。由々しい大事であつた。

「セイラーを呼べ！」船長は無視するわけには行かなかつた。無視すれば船も動かないだらうし、横濱で正月も出來ないし、それに、彼のサンパンに對して、文句をつけるとは全く、怪しからぬのであつた。

ツキリ頭に入つてゐなかつた。従つて、それは適當ではある、けれども、未だ直接の刺戟、衝動が來ない、と云ふやうな『感じ』が、彼等を、水夫等と共に立たせることを妨げた。然し、彼等は、立たないにしても動揺はしてゐた。それは、立つまいものでもない氣配に見えた。

彼等の出入口の前を水夫等が通る時に、彼等は、喊聲を擧げた。

それは、サロンまで響き渡つた。これ等のことは、萬壽丸が出來て、海に泛んでから初めてのことであつた。

水夫たちは、笑を浮べて、火夫達に挨拶しながら通つた。それは、全て、今まで動かなかつた軍艦が、試運轉で滅茶苦茶に走らうとする、第一聲のやうでもあつたし、眼を覺ました獅子の第一聲のやうでもあつた。

何となく、いつもと違つてゐた。スタンバイがかゝつたのに、船體はビクともしない。罐前の火夫や石炭庫のコロツバスは、デツキまで子子のやうに、その頭を上げに來た。

オイルマンは機關室から覗いた。サロンでは、交渉が開始された。尤も、船長は、一撃の下にやつゝける筈であつて、交渉などをする氣はテンデなかつたのだ。ところが、どうしたはづみかいつの間にか、交渉の状態に入つた——のであつた。

船長は、スタンバイの命令を出しつ放して、サロンへ入つて、そこで水夫等を『とつちめ』てやらうと待ち構へた。船員手帖は、チーフメイトに持つて來させて、テーブルの上へ積み上げた。

可哀相に、ポースンと大工は、フォックスルで鼻水を凍らせてゐた。

機關長はエンジンへ入つて、ハンドルへ、手をかけて待つてゐた。

蒸気は、どん／＼上つて來た。セーフティヴァイヴァルが、吹きさうになつて來た。サロンのテーブルにはメイツが船長の兩側に並んだ。チーフ、セコンド、サイドと。

ポーイはおもてへ飛んで行つた。

「セイラー全部、ポースン、大工、コーターマスター、みな、残らず、サロンまで來て呉れと、船長が言つてるよ。大至急！」煙のやうに、彼は、又、飛んで去つた。

そこで水夫等は出かけた。

「奴は、高壓的に出る積りだな」藤原は思つた。波田、小倉、西澤、各々は、別様の戰鬥意志を持つてゐた。

ポースン、大工も青くなつて來た。此時、フアヤマンの方でも小倉が、持つて行つて見せた要求條件が、問題になつて、主戰論と非戰論との猛烈な論戰が行はれてゐた。だが、全體として階級闘争と云ふことは、ハ

四四

「これは、誰が、書いたんだ！これは？この要求書は？」船長は、その一聲をこの文句によつて切つて離した。

「私が、書きました」舵手の小倉が答へた。

「お前が？」船長は、その廻轉椅子から、無意識に腰を浮かした程驚いた。小倉は、コーターマスターの中で、彼の一番愛してゐた從順な青年であり、頭腦もよく仕事も出來る、その上風采のいゝ、サツパリした男だつた。

「誰か、お前に、それを書かしたんだらう。お前が自分で、こんなものを書くと言ふ譯がない、誰だ、この文章を作つたのは」彼はストキを睨んだ。

「私が、作つたのです」ストキが今度は答へた。

「そうだらう。お前だと思つた。大體貴様は、横着だからな。貴様が、小倉や皆を煽つて、こんなものを出さしたんだらう」彼は、裁判官の如くに訊問した。

「そんなことは、極めて枝葉の問題と思ひます。私たちは、食ふために船乗りになつてゐるのです。であるのに、船の仕事のために負傷しても、手當をして貰へないと云ふことになれば、私たちは、命をすてゝかゝつたも同然です。尤も、船では命を捨てゝかゝつてゐることは、當然だと云へば當然です。がね。然し、たゞ、私たちが、命を安賣りすると云ふこ

とは、私達にも、承知が出来ないことです」

藤原は、最初の探照弾を打つ放した。

「それぢや、勝手に下船して行つたらどうだつた。誰が、いつお前に、どうぞ、下船しないで乗つて下さいと頼んだ！頼んだのはどつちだつたか、よく考へて見ろ」

船長が言つた。

「私たちは、どこへ行つても、いゝ處はないのです。だから、自分の『今』の生活を、よりよくする方法をとるより外はないのです。此船ばかりへ日が照らないと言つて、下船した處で、他の船でも、陸でも同じことです。だから、自分の今ある處で、より良い條件の下に、生活しやうとするだけなんです」静に彼は答へた。

「私たちは、どこへ行つたつていゝ處はないのです？ え、それは、一體、誰の責任だ。俺の責任だとお前は言ひ度いんだらう。俺は、今も言つたぢやないか、誰が、頼んで乗つて呉れと云つたと、それに『よりいゝ條件』の生活がし度かつたら、何故もつと、勉強して上の方へ、昇るやうにしないんだ。自業自得を、人の責任におつゝけるのは圖々しすぎるぜ」船長は、こいつ一つ脂をすつかり搾りぬいてやらうと考へた。そして、それからつゝ放す！」と。

「御忠告は、ありがたうございますが、勉強して上へ上つて行く人間が餘り多くなると、セーラーなんぞするものが、失

くなるだらうと思ひまして」彼は危く笑はうとする處であつたが、それだけは取りとめた。

「馬鹿！ お前は、俺を愚弄して積りか！ 馬鹿！ が、いくら勉強しても馬鹿は馬鹿なんだ。セーラーより上にはなれないんだ。だから、實力さへあつたら人に遠慮などせず、サツサと船長にでも機關長にでもなつたらいいぢやないか」

船長は、だん／＼ストキの話の相手になつてしまつた。「私たちは勉強しても、船長はおろかポーソンにも、なれないだらうと思つてゐるのです。ですから、猶更、私たちは、今のまゝで、幾分でもいゝ條件の下で労働し度いと思ふのです。私たちに、決して、船主になつたり船長になつて、富や、權力を、得やうと云ふ考なんぞはないのです。私たちは、普通の労働者として、普通の人間としての、生活を要求するのです。人間として、船長は労働者よりもより特別なものだと、我々は考へません。われ／＼は、今では、階級と稱せられてゐるものは、一つの仕事の分擔に、過ぎないものだと思つてゐます。それなのに、今では、ある仕事を分擔すると、同時に、人間を冒瀆するやうにさへなります。人間が、人間を虐げ、踏みつけ、搾取することを、えらく考へることは、半世紀許り前の考へだと、私たちは思つてゐます。私達は、人類の生活の一部分の貴い分擔者として、自

分を見てゐるのです。だが、あなた方は、私たちを資本家と思つてゐる」ストキは、その話に段々熱と眞摯を加へた。「資本家と思つてゐる。お前等をか？ ハツハツハ、ハ、ハ、ハ、遂々船長も、餘りのストキの言葉に噴き出してしまつた「恐ろしい資本家もあつたものだ！ ハツハツハ、ハ、ハ、ハ、南京蟲のだらう！」

メーツ等は皆笑つた。セーラーたちが、資本家とは珍らしい言葉だつた。

「若し、私たちを資本家だと思つてゐないのなら、奴隷と、思つてるわけです。私たちの賣ることの能きものは、私たちの労働だけですよ。詰り『からだ』だけですよ。だが、それも、私たちのものでないかと考へられるならば、奴隷だ、と考へられることになるでしょう。然し、奴隷だつたら、何故其の奴隷の生命を大切にしませんか。奴隷は、あなたたちの財産ぢやありませんか。私たちの生命が、あなた達にとつて、全て、どうでもいゝものになつたのは、私たちが奴隷から、資本家、すなはち賃銀奴隷になつたからです。それは、とつかへる程新しい、いゝ商品が、無限にあるからです。

それに、私たちは、いつまでも、どんな奴隷でもあり度くはなくつたんです。どんな機會にでも私たちは、私たちが縛る鐵の鎖を打ち切る用意をしてゐるのです。私たちは、人間として、生きやうとしてゐるのです、そこ

へ持つて来て、どうです！ 私たちは蚤と南京蟲の資本家！なんぞせう、私たちは、その要求が通ればよし、通らなければ、私たちの力がどの位あるかを、お目にかけるまでです」

ストキは最後の言葉に、力を籠めて言ひ切つた。

「フン、それもよからう。だが何かね。波田、おまへは自分から進んで、此要求書に捺印したんぢやないだらうな。誰かが、お前を煽動したんだらうな」船長は、方向を轉換した。

「私は、どの船でもストライクの種を、見付ける役目をする積りで、船のりになつたんです。私は、此船に乗つた最初の日から、風呂場のないことでも、ストライクがやれると考へてゐたのです。便所掃除人波田は、風呂場のないことに、誰よりも、苦痛を感じてゐたのだ。それに、彼は、若くて新しい社會の空氣を吸つてゐたのだ。船長は此無邪氣な、彼の便所を彼の居室よりも、金具など奇麗に磨き上げる此奇麗好きな、忠實な青年が『過激派』であらうとは思はなかつた。それに、「こいつはストライクを見付けて歩くなど、抜かしやがる！ 全て、此奴等はバルチザンだ！」

船長は、意外に、水夫等が結束を固めてゐるのを見た。それは發作でもなかつたし、衝動でもなく、計畫されたものであつたのを知つた。

此時、火夫室では又、喊聲が上つた。それがサロンへ響いて來た。

出帆時刻は、どん／＼と遅くなる！ 正月はどん／＼近くなる！

船長は、いら立つて来た。
「西澤、貴様はどうだ。宇野（捺印した舵手）小倉、貴様等も同意して、捺印したんだな。よし、チーフメイト！ ポーレンへ至急行つて、水夫四人、コーターマスター二人、ポーレン一人、遂々ポーレンにも崇は来た——すぐ、萬壽丸へ、チヤンスだと云つて呉れ給へ、そして、此奴等を乗船停止を命じて、それを雇入れて来て呉れ給へ、出帆が、餘り遅くないやうに、今からすぐかゝつて呉れ給へ！」彼はチーフメイトに命じた。

その結果は、水夫等は、昨日からも知つてみたのだ！ 室蘭中のポーレン（それは半素人のも入れてたつた三軒切りないのだ）——に、昔船のりだつた、そのポーレンの主人が二人と、一人の沖賣らうとがある丈けなのだ！ 彼等は、陸上に一軒を経営してゐるのだ！ 彼等は、どんなことがあつたつて、十三圓や十八圓で、一家の生活を保たうとして船に乗る氣づかひはなかつた。ストライクブレイカーはお合憎であつた。「その位のこと、俺達だつて氣をつけてるよ」と藤原は言つてやり度かつた。波田はもうムズムズしてゐた。ポーレンは驚いた。その職業と、月二割の利子——尤も中、一割はチーフメイト（實は船長かも知れない）が、上前

裕を持つてゐた。

「船長」と彼は、船長の回轉椅子の背後から、低い聲で船長を呼んだ。

「チヨツと」と彼は後しざりした。

「何だね？ うん、あアさうか、ぢやあ室へ」チーフメイツへ言つた。チーフは船長室のドアの中へ消えた。

「お前等は、此處へ待つてろ！」水夫達にかう云ふと、船長は、チーフメイツの後を追つて自分の室へ入つた。

船長も、その辭書の中から、不可能と云ふ字を、削る冒險はする位な男であつた。従つて、チーフは、船長に室蘭でそれ丈けの労働者を、即時に得ると云ふことは『不可能』だと、云ひ度かつたのであつた。が、船長は、全く、始末にいかぬタイラントであつた。それは、コセコセしたちしやの葉のやうな感じのするタイラントだ。

「船長、室蘭にはポーレンが一軒切りありませんが、ね、；」彼は、どうだらうと云つた風に、

「正月前だから、休んでるものが無いだらうと思ふんですがね」チーフメイツは切り出した。

「若し、室蘭になかつたら小樽か、函館から呼ぶんだ。えいつと、然し、そうすると横濱歸航が大變遅くなるね。だが、室蘭に五人や十人の船員が無いつてことはないだらう。君は調べて見たかね」船長は聞いた。

を切ねるんだが——とが、ワイになるのである。然も、彼は、何をしたんだ！ ただ、忠實な番犬だつたのみではなかつたか。彼は、功勞こそあれ何の過失があつたか、既に、彼は、一旦の危急をチーフメイトのために、救助さへしたではないか。

しかし、これは船長に何かの深い考があることだらう。一度、皆の前でさう言つて、ポーレンは代りが居ない——と言ふやうなことにする積りなんだらう。でなきや、船長だつて俺の首を切れた義理ぢやなからう、俺が居なげや、あの妾だつてあんな具合に、御安く手に入らなかつたに違ひないんだから」

哀れなポーレン、彼は臆病犬見たいに、半信半疑で、主人の心を探つてゐた。だが、ポーレン、君が、君、自身のこと考へるやうには、他の人は決して君のことを考へてはゐないんだ。君、自身が食へなくて餓死する刹那にだつて、他の人は妾のことや、藝妓のことなどを考へてるのだ！ 他の人は、全く、他の人の身の上的ことなど、てんきり考へはしないんだ。他の人とはお前を使ふ處の人だ、分つたか、ポーレン！

だが代りは、ポーレンに限つてない譯ではなかつた。それは、室蘭中に一人のボーイ長の代りだつてなかつた。チーフメイツはやゝこの點に、その考へを向けるだけの餘

「實は、入港するとすぐ聞いて見たのですがね。二三日前までは、三四人休んでゐたが、便をかりて横濱へ行つたとか言つてたんです。だから、それから一週間にもならないんだから、迎も駄目だらうと思ふのですよ。で、なけれや私もストキは、早く處分しなげやならないとは思つてゐたのですから、代りさへあれば、此處で下船させる積りだつたんです。

あれさへゐなげりや、他に他の連中は尻馬に、乗つてると言ふだけのものですか。どうでしょうあいつだけを、下船させることにして、後はチビ／＼やつたら……でない横濱正月がワイになりますよ」チーフメイツもポーレンを探つてゐたのだ！

「さうだなあ！ 僕も、横濱で正月をし度いと思つてるんだが、それさへなげりや、十日や二十日錨を入れてたつて構やしないんだだけだなあ、ぢやあ、應急手當として、ストキだけ下船さすか」船長も賛成した。

「それがいゝと、思ふんですがね。たゞ、その方法です。どう云ふ風にしたらいゝか、皆の前でやるか、それとも一人だけ呼んでやるかですか。で、若し、水夫等全體があいつについて行くと云ふやうな時には、二十か三十やつて追つ拂ふより外に、仕方がないと思ふですよ。チーフは何でもいゝから、彼が、此船から『消えて失くなれ』ばいゝと思ふのであつた。

「さう！ 何にしても、此際時間を争ふんだからね。どんな方法も遅れちやいけないんだから。ちや、ストキの奴に下船を命じよう」船長は言った。「だが、一體、奴等は何と云ふ不都合な奴等だらうな。これが横濱だつたらなあ」

船長は、横濱でないことを、返すがへすも口惜しがった。奴等を「殺しても、あき足らない程なのに、場合によつては、下船どころか金まで出すとは！」全く、彼の口惜しがるのは理由があつた。

「何にしても時が、悪いもんですからなあ。ところで、ストキが、海事局にボーイ長の雇入未済のこと、負傷のこと、を申告しやしないかと思ふんですがね。そいつをやられると、どうも面白くないから、なるべくうまく、胡魔化す必要があると思ひますね」チーフメイツは、外へ出ようとしながら言つた。

「だが、全く、糺に障るぢやないか、停止も食はせないなんて、監獄にでも放り込んで、やり度い位だ。治警に立派に、引つかゝつてゐるんだからね畜生奴！」

それは、船長が憤るのは、云ふまでもない「御尤」な話だ。二人は、未だ何かこそと話した。一々そんな話を書くのは、面倒臭くて堪へられない話だ。先へ進まう。急げ、急げ。

四五

船長と、チーフメイトとはサロンへと出て行つた。ところが、これはどうだ。サロンの入口へ火夫たちが眞つ黒に集つて、中を覗き込んでゐるのだ。口笛を鳴らす者があつた。足踏みをするものがあつた。

船長とチーフメイツとがサロンへ入ると、彼等は、水夫達への激勵から、船長、チーフメイトへの示威運動へと移つた。

口笛が盛に鳴つた。足踏みが拍子をとつて、踏み鳴らされた。

「何だ！ そんなところから、覗き込みやがつて、あつちへ行け！」船長は怒鳴りつけた。

「何言つてやがんだい。、、、、誰か後ろから叫んだ。」

これは早く、片をつける必要があると考へた、船長は、入口の方へ、その「物凄い」眼を一閃放つておいて、椅子へ腰を下した。

「どうだらう。これは即答も出来ないから、横濱へつくまで保留したら」彼は切り出した。

「船長、それはいけません、私たちは、これが室蘭だから、要求として成立することを知つてゐるのです。横濱まで行け

ば、産業豫備軍が捨てる程居ります。私たちは、此處で要求が容れられなければ、労働をしません。それから、これはどうお考へになつても御隨意ですが、私一人を餓首にしたとしても片はつきません、と言ふことを申し上げときます。私たちは、何の相談もしないのに、機關部の方でもあんなに、動揺してゐるぢやありませんか。此要求は恥しい程、妥協的なおぼつした時代後れの、要求ですよ。これが容れられないと云ふことになれば、「お前達奴隷は、俺達の（もの）だ」と云ふことになりますよ。

あなた達が、一ヶ月の俸給丈けて四百圓——彼れはこれを知くのに苦心したのだ——取つて、戦時利益特別賞與が年四十五ヶ月分ある。この現在、私たちが、月給十三圓から十八圓で、命をかけて労働すると云ふことは、私たちは、餘りいことゝは考へられませんか。あなた方は、自分の懐中の裕福なので、夢中になつてゐられる間に、私たちは俸給の三倍もの率で、物價が上つてゐるので、非常な減給を受けた形になつてゐるのです。おまけに、労働時間は、船が忙しいと同じ比例で、私たちをかり立てゝゐます。一日に十四時間は、全で、懲役囚よりも長時間です、その上公休日なしです。怪我はしつ放し、死に放題、しけだらうが、夜中だらうが、俺は宅へ歸るからサンパンを押せ、お前たちは夜明け前に歸れ！これが私達なんです。どうですか、聞いてゐて恥しくなるや

うな労働條件ではありませんか、實際、監獄だつてこれよりは、遙にいゝ待遇が與へられてゐますよ。その監獄よりひどいのが、萬壽丸で、その船長が吉長武と云はれては、あなたの名譽でもなからうと考へます。」

藤原は、また思ひ切つてやつたものだ！

船長及び士官等の、憤慨振りには頂點に達してゐた。彼等は、椅子のクツションのやうに赤くなつたり、海のやうに青くなつたりした。彼等の憤慨と同じ比例で、水夫等は喜んだ。

「全くだ！」遂々波田が怒鳴つてしまつた。

「さうだ！」波田の氣合のかゝつた言葉に吊り込まれた、扉の外の火夫達は、一齊に喊聲を擧げた。

「第一、私達は、肉體を賣る資本家かも知れない！ だが、要するに、私たちは生きてゐるんです。おまけに未だ此上も、生きて行き度いと思つてゐるんだ。生きて行き度くなけや、こんな船になんぞ誰が乗るもんか、畜生！」波田は、未だく言はなければならぬことが、山のやうにあつた。餘りに言ふことが多くて、彼の言葉がスラ／＼と出なかつた。めに、畜生！ で爆發してしまつた。

「誰が畜生だ！ 失敬な」船長は、夢中になつて立ち上つた。

扉口の外からは、罵聲と足踏みとが聞えた「燃しちやうぞ」

と聞えた。

私は此「燃しちやうぞ」と言ふ言葉の來歴を話し度いが、御覽の通り今は迎も忙しくて。

「さうではないか！」波田は立ち上つた。

「尊い人間の生命を等閑にしたのは、どいつだ！ ポーイ長でも、父と母とから生れて、人間としての一切の條件を、貴様等と些も異なる處なく、具備してゐるんだ！ それなのに、どうだ！ ポーイ長が負傷してから、一度でも、貴様は、彼のことを考へたことがあつたか、貴様に、人間の生命を輕蔑することを誰が許したんだ！」

彼は夢中になつてしまつた。

「若し、貴様が、此上も、ポーイ長に對して、畜生の態度をとるなら、俺にも、覺悟がある！ 貴様が、ポーイ長を見殺しにするなら、俺は……」遂々波田は、その腰にさしてゐたシナイフを引き抜いた。

「危いつ！」と皆が叫ぶ前に、彼は、それをテーブルの上に、脊も通れと突きさした。

「俺は、畜生に對して、人間として振舞はれないんだ！」

一座は、死んだやうに靜になつた。扉の外の連中は、眼ばかりになつて、息を殺して成り行きを見張つてゐた。

「貴様は、權利を持つてゐる。此地上には、無暗に多くの權利が、他の權利を蹂躪することによつて存在してゐる。だが、

に、恐るべき幻影を見て、狂ひ續けるのと同様であらう。それは見かけ倒しの立派な、芝居の建付に、全身の信頼を以て凭れかゝつて、一緒に倒れるのと同じ、人々の運命であらねばならぬ。彼は、芝居の建具に凭つかゝつてゐたのだ！」

「貴様は、大きな錯覺に陥つてゐることを、自分で知らないんだ！ 貴様だつて、被搾取材料だ！ て、なきや幫間だ！ 自分自身が何だつてことを、内面からハツキリ見詰めて！」

若しポーイ長を、此要求通り、此要求は、餘り遠慮がしすぎであるんだぞ、いゝか、若し、これを許さなかつたら、俺には覺悟があるんだ。俺が、覺悟を持つてゐることは、もう言はなくても分つてゐるだらう。サア！ 下らない筋だの、金ピカだのを除つて、人間として、人間の要求に應ずるがいゝ。」

波田はその椅子の上へ、ドツカと腰を下した。そしてシナイフを藤原の前から取つて彼の尻つ邊にブラ下つてゐる、その帆布製の鞆に收めた。

人々は初めてホツとした。彼がライオンのやうに、暴れ廻らなくて幕になつたことが、誰もを安心させた。實際、それはまあよかつたと誰もを感じさせた。

船長は、全て、馬鹿にしたやうな態度を、要求書へ向けてゐたのだが、今では、それが非常に尊いものであるやうに、チーフメーツの前から、自分の前へ引き寄せて、眺め初めたのであつた。この紙つ片に、あの情熱と憤懣とが織り込

船長、いゝか」彼はテーブルを、今度は拳骨で食はせた。人間の生命を輕蔑する權利は、誰もが許されてゐないんだ。又、他人の生命を否定するものは、その生命も、否定されるんだ！ 分つたか」彼は、そこにそのまゝ、坐ることを忘れたやうにつゝ立つてゐた。彼は睨み殺してもしやうな眼付で船長を見据てゐた。それは、全て、燃える火の塊のやうに見えた。

ストキは、波田の突き刺したナイフを靜にテーブルから抜き取つた。そして、彼は自分の席の前に置いた。

船長は、ピストルを持つて來なければならなかつたが、そこを立つわけに行かなかつた。彼は、始めて彼が、殆んど、齒牙にもかけなかつた、低級な人間の中に、高級な彼をも威壓して射すくめてしまふ丈の威嚴を見た。それは、全く、何も持つてゐない、一人の勞働者だ。地位も、金も、系累も、家も、それこそ何にもない、便所掃除の勞働者の青二歳ぢやないか、だのに船長は椅子から立ち上れなかつた。

彼は一度立ち上つて、途中で、グズ／＼と坐つたことを悔ひた。その、彼の前に立つてゐる勞働者が彼からその「煮える」やうな眼光を放さなければ、彼は立てなかつたのだ。

それは、彼の職業的な、因襲的な、尊嚴を傷けるものであつた。そして、一度負けたが最後頭の上らない鶏のやうに、その後は、彼を永久に壓へつける一種の不快な、重しになるであらう。それは脅迫觀念に囚はれた病者が、何もない處

まれてあつたのだ！ 彼は、それを引き裂かなかつたことを今になつて喜んだ。

それを引き裂きでもしてゐるやうものなら！

「それで、その要求書にある條項を、一々説明しませうか、若し、お求めになるならば」藤原は言つた。

「いゝや、説明には及ばないだらう。大抵分つてゐるだらうから。然し、一應メーツ達と相談しなければならぬから、お前たちは、此處で一待つて、貰ひ度いね。一寸相談をして來るから」と藤原は言つて、「どうぞ私の室まで」とメーツ等に見くばせをして、彼は船長室へ又候入つて行つた。メーツ等は續いた。

「波田つて奴あ、どえらい奴ぢやねえか」とサロンの外では、波田の行動に對して、賞讃の辭を惜しまなかつた。「あれに限るよ。あれで行きや、こちとらだつて、いつでもこんな苦勞しなくても濟むんだが」

「さうさ、力の強いのが勝つんだ。俺たちや呑まれてるんだ」などと火夫達は、その場から去らうとはしなかつた。

水夫達は、相手が居なくなつたので、極度の緊張から解放されて、煙草に火をつけて、休憩した。

「どうだい、ポースン、お前の代りまで吩咐けられたぢやないか」波田は、ポースンの方を向いて言つた。ポースンは、全て、ひどく頭でも打たれた者のやうに、ボンやりしてゐ

た。出し抜けに船長を斬つたりする奴は、彼も見たことがあつたが、口も手も、これほど達者な奴は見ることがなかつた。「それに奴は未だ子供ぢやないか」ポースンは、喫驚してしまつてゐた。「いや、どうも知らなんだ」その筈であつた。

波田は、酒も飲まず、女郎買もせず、大人しくて、よく仕事を評判な青年だつたのだ。「全く、人は見かけによらないものだ！」

「え、どうだいポースン？」今度は藤原がぼんやりしてゐるポースンに訊いた。

「え、あゝ、俺あぼんやりしてたよ」彼はほんとにぼんやりしてゐた。

「冗談ぢやないぜ、しつかりして呉れよ。皆大汗で働いてるんぢやないか」

西澤と小倉と宇野と波田と、此四人は交渉条件のことについて、何か頻りに話し合つてゐた。

そこへテーブルの上へ、機關部のボーイ長が、紙つ片を持つて來て載せた。そして「これを機關部から」と云つてそのまゝ、逃げるやうにして飛んで出て行つた。

西澤は、その紙つ片を開いて見た。

フロントウ ヲシヤス、セイコー ヲ イノル、キカンブカフ 一ド一 セイラー ショクン

と電報文見たいに片假名で書いてあつた。

彼等はそれを見て、戸口の方を向いて、手を舉げて合圖をした。

「徹底的にやれ、罷業になれば、火は炊かんから」戸口の外から誰か怒鳴つた。

四人はそれを藤原に見せた、彼は「ありがたう」と叫ぶのを忘れなかつた。

廳で、船長室へ密議を凝らしに行つたメイト等はサロンへ引つかへして來た。

要求条件には念入りにも、船長と、チーフメイツとの判が並べて捺してあつた。

「皆と相談の結果、要求を容れることにしたから、今から直ぐに働いて貰ひ度い、ボーイ長は、横濱着港と共に直ぐ入院させるし、その他の條件も、即時實行することにしたから」

船長は、低い聲で言つた。彼は自ら進んで此條件を、認容したのだと云つた風に、見せかけたかつたが、餘りに狼狽した彼にはその方法も出來なかつた。

「パンザイ」「態を見ろ！」「労働者フレンド」など云ひながら扉の外の水夫達は、ドヤ／＼と立ち去つた。

「それぢや、今からすぐに仕事にかゝつて呉れ」チーフメイトは言つた。

「へー、畏りました」ポースンは答へた。

「どうも有難う存じました」藤原は、判の捺された要求書を、ポケットに收めながら言つた。

彼等はおもてへと歸つて行つた。

水夫等は勝利を得た。だが、何だか物足りない感が誰ももの、心の隅にわだかまつてゐた。彼等は、何かの豫感を感じてゐたのであつた。

火夫室の前では、彼等は、萬歳を三唱してセイラーを迎へた。

その日の出帆は、それでも、水夫等にとっては「凱旋軍の故國への船出」の感があつた。

四六

その航海は異様な航海だつた。水夫達は人間として、取扱はれ初めたやうに見えた。命令を發する處のメイト等は、彼等が單に、作業の分擔的任務から、行動するやうに命令した。そして、その内容も整頓され、そのために同一の効果に對して、水夫達は以前の三分の二の労働と時間とで済む位になつた。

船長にしる、外のどのメイトにしる、今までは「ゴロツキ」の下級船員たちが、たゞもう「慘めに働いてゐる」と言ふことと丈けに、その興味を持たなくなつたやうに見えた。下級船員たちが「人間」らしくあると云ふことが、今では、彼等の權威を傷けると云ふ、その妄想から彼等は、解放されたやう

に見えた。

どことなしに、いや、それどころではない、はつきりと彼等は、餘りに現金すぎる程に、水夫達はおろか火夫達にまでも遠慮してゐた。

それは、内實を知らない人々から見ると、平和であつた。そして萬事が控へ目であつた。「謙讓なるメイト等よ！」と知らない人は、それが労働者であつても、褒めたであらうほど、靜であつた。従つて、船員たちも「ゴロツキ」ではなかつた。

彼等も、彼等が人間らしく振舞ひ得、又、そうすることを、禁じられさへしなければ、彼等は立派に——人間らしく振舞つた。

水夫等は、自分等に酬いられる、勞銀は何であるか？ を

或者は知り、多くは知らなかつた。たゞ彼等は、彼等の生活

が甚しく脅かされる時だけ、仲間のやうな彼等の忠實さから、

彼等は、自身に立ちかへるのであつた。そして、彼等は、それ

に成功することもあつたが、多く失敗した。殊に決定的な

立場から言へば、彼等は、未だ、要求してもゐないのに、叩

きつぶされたのであつた。

彼等は、三上のやうに、或は、波田のやうに、或は小倉のやうに、西澤のやうに、自分を段々強く羽がひじめにする、労働條件から免れやうとして、個人的に行動した。

彼等の行動は全て相反するやうにも見えた。そのことにつ

駆け上る。彼等は、只競争するのだ。そのために得る處は彼等を驅つて過度労働に追ひ込み、資本家をしてより一層その財布を重くせしめるだけのことだ。だが、彼等は我先にと飛び上る！

萬壽丸は荷役を初めさうに見えた。ウキンチは仲仕等にかかつては無暗に手荒く取扱はれる。バルブ明けつ放して、ハンドルのゴーヘーゴースターンだ。

私はこんな風に書いてゐたら、切りがないだらうと云ふことに気がついた。私は未だ船長と三上とが、室蘭で同じ女郎を買當て、兄弟になつたと云ふことも、書く積りてゐた。が、そんなことは別に不思議なことでも珍らしいことでもない。止めてしまはう。

ランチから、會社員が船長室へ入つて行つた。そこで、彼等はコーヒを飲みながら、なにか話した。

船長は、水夫等の「不都合なる行爲」について嚴罰を與へやうと、室蘭に於て既に決心してゐた。で、彼は會社から來た社員に對して、簡単に「水夫達が如何に不當な要求を、横着な態度でした」かを話した。だから、彼等、水夫等全部を下船させると同時に、引縛つてやる必要がある。『序に三上の傳馬事件も告發する積りである』ことを、彼は告げた。だから「會社へ歸つたら、祕書課長へその由を傳へて置いて貰ひ度い。」と言ふのであつた。

一方チーフメートは投錨と共に、通ひ船に乗つて水上署へ赴いた。そして、そこで室蘭であつた一部始終を話した。――

彼はボーイ長のことは話すのを忘れた――それはきつと藤原の煽動だ。殊に波田はメスを抜いて我々を脅迫した。彼等はきつと暴行に訴へてもその實行を迫るだらうから、本船へ出張の上保護を加へて貰ひ度いと願ひ出た。

水上署のランチは、チーフメートと共に、偏強なる巡查五六名を載せて、威勢よく出動した。

ランチは萬壽丸のタラツプについた。チーフメートは警官達をサロンに案内した。そこで、巡查諸君は、林檎と、菓子と、コーヒとの「前で」暫く待たなければならなかつた。

水夫たちは、ウキンチに油をさしたり、種々な道具類を片附けたりしてゐた。そして彼等は、『その夜は、明日の朝まで、語り正月の朝まで歸らないでいゝ上陸が能きる』と考へて、愉快な氣持になつて働いてゐた。確かに、彼等は、當分、船に歸らないでもいゝ上陸によつて、持ち受けられてゐたのだ。

船長は、今は、前航海の、夜中に於けるサンパンの中の船長でも、出帆前の室蘭に於ける彼でもなかつた。彼は今は暴力的であり得た。最も露骨なタイラントだつた。

船長の命を受けたとものボーイは、おもてへ來た。そして、ボーイに言つた。

「ボーイ、荷物を片付けて、下船の用意をして、ボーイ」

と、藤原と、波田と、西澤と、小倉と、宇野と、サロンまで來いと、船長が云つたよ。それからね、オイ、彼は今度は彼自身の部分の話に移つた。水上署の巡查が十五人サロンへ來て待つてゐるぜ、きつと波田が暴れると思つて連れて來たんだぜ。すこし暴れた方がいゝんだ全く。皆にさう云つて呉れよ、いいかい、彼は、ともへと歸つて行つた。

そのことは、もう皆に特に通知するまでもなかつた。ともはボーイが來れば、何かの命令だと云ふことは分るので、水夫達はボーイの室の前で立つて聞いてゐた。

「拙かつた！」藤原は感じた。然し、これほど徹底的だとは思はなかつた。これぢや全て船はカラツボだ！だが！彼はぢつと我慢した。彼にはもう彼が歩いて行く道筋がハッキリ分つてゐた。それは白く乾いた埃つぽい道である。沙漠のやうに、人類を飢餓と渴とに追ひやる處の道であつた。

波田も覺つた。俺達は「それでは行くんだな」と思つた。「俺達の行く道は、右は餓死だ、左は牢獄だ」彼は吐き出すやうに云つた。

四七

彼等は各々自分の運命を知つた。そしてその行李へありつただけの彼等の持物を詰めた。彼等は、その持つてゐる者は、布圍までも行李に詰めた。彼等の行李は猶餘裕を持つてゐた。

彼等は、全く簡単に、その世界一周旅行にでも上り得るのであつた。船乗りの生活は乗客として見た場合には、全く異つた觀を呈する。それは、水夫夫に至つては、乗客から見たのでは全て分らないのだ。殊に貨物船に於ては、乗客がないのだ。乗客が無いと云ふことは世間態が無いと云ふことになるのだ。風呂さへ無いのだ。搾り度い丈け搾るのだ。

彼等は、食つて着る丈けで猶不足であつたので、従つて、その最初船に乗る時に買った行李、その中へ詰つてゐた種々の物が、段々減つては行つても殖えて行くなどと言ふことは殆んどなかつた。

その空際が多い、中實の少い行李を引つ擔いだ彼等は、恰も移住民の一行のやうに續いて彼等の時からサロンへと赴いた。

彼等の去ることを知つたボーイ長の悲嘆は甚しかつた。彼は、藤原と、波田との手に縋つて、何か言ひ度さうにしてゐたが、漸く出た言葉は、劇しい嗚咽のために聞きとることが能きなかつた。だが、彼は嗚咽を語つたのだ！彼は一切を奪はれた。その最初であると同時に最後のもののである、彼の賣ることの能きる唯一の勞働力さへも、彼が勞働力を賣つたことが原因となつて、奪ひ去られてしまつたのだ。

そして、彼を保護し、愛して呉れた人々は、今警官の居る處へ、船長に下船の用意をして來いと云はれて、出かけて行

な冷たい風がシユツシユツと吹き込んだ。
彼等は、そこで刑の決定されるのを待った。(完)

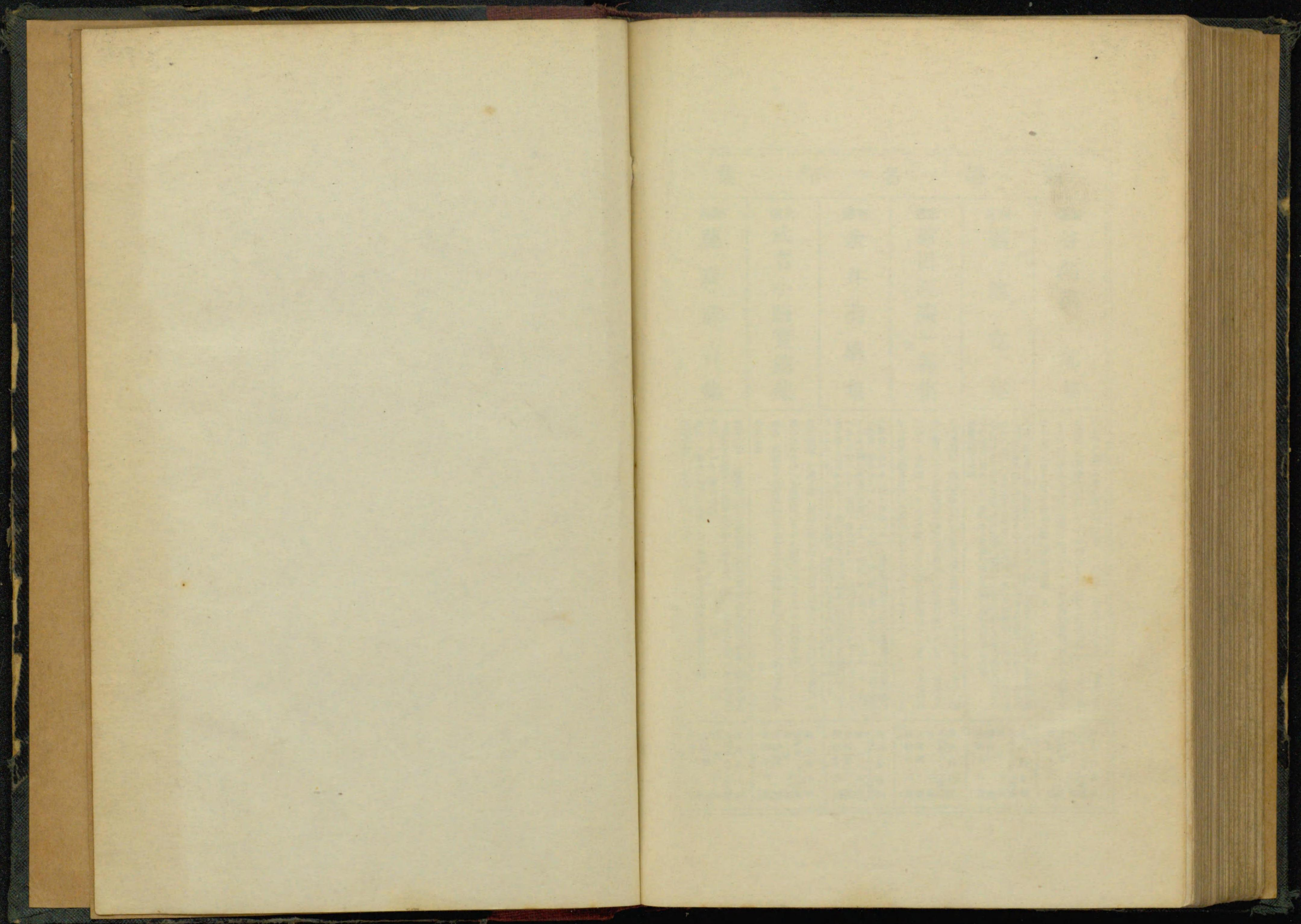
谷 瀬 一 郎 著	發 行	前 田 西 潤 一 郎 著	木 共 販 權 業	五 香 小 淵 實 業 著	昭和三年六月十日印 昭和三年六月十三日發
東京市芝區愛宕下町 四丁目六番地		印刷者		發行者	
振替東京八四〇二二 電話芝(43) 二二二二 四三二一 番番番番		君 島 潔	山 本 美	葉 山 嘉 樹	新選葉山嘉樹集 定價金壹圓
刷 印 社 會 式 株 刷 印 同 共					

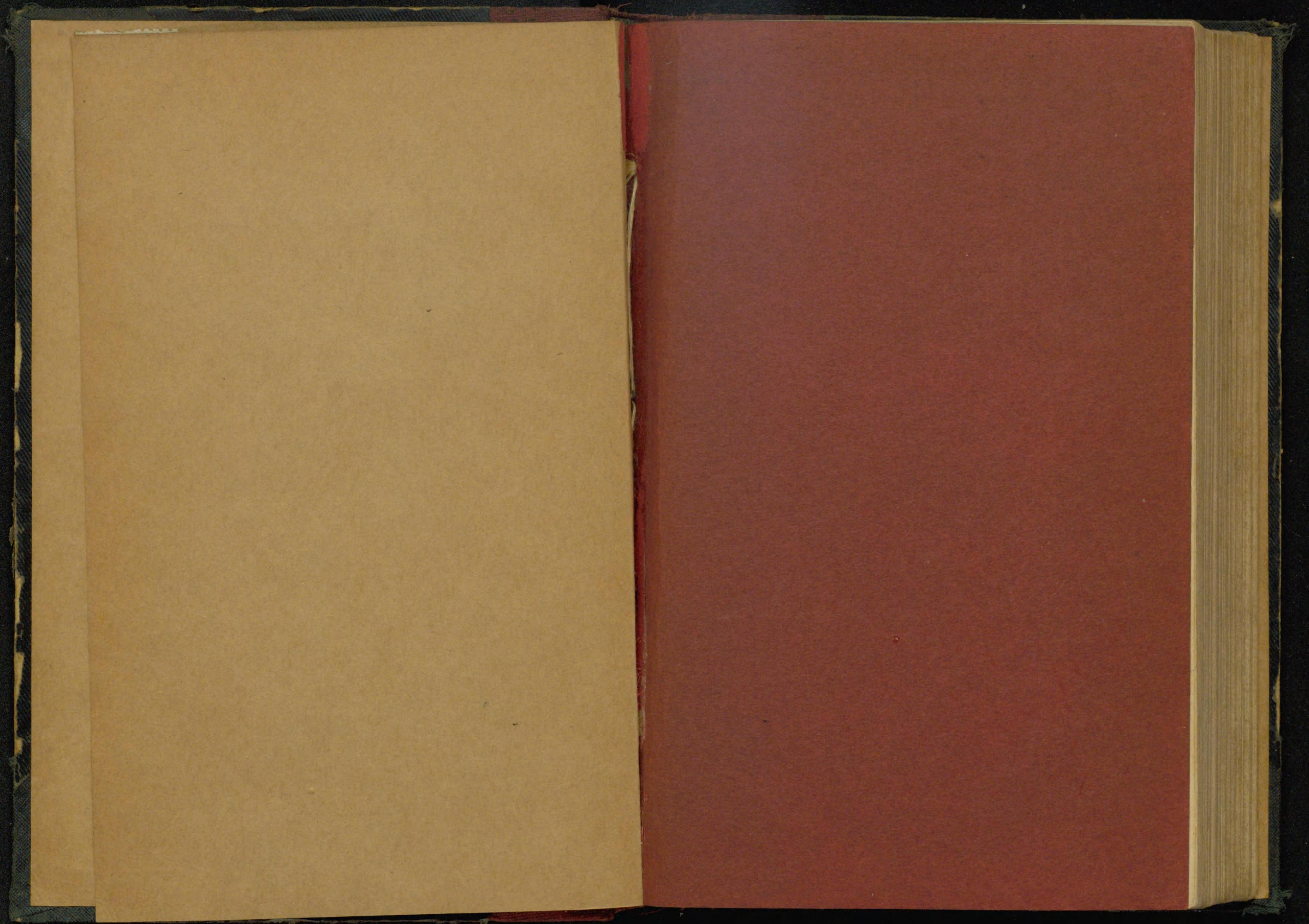
な冷たい風がシユツシユツと吹き込んだ。
彼等は、そこで刑の決定されるのを待った。(完)

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が繰り返されている）

新 選 名 作 集

<p>新 谷 崎 潤 一 郎 集</p>	<p>新 菊 池 寛 集</p>	<p>新 前 田 河 廣 一 郎 集</p>	<p>新 永 井 荷 風 集</p>	<p>新 武 者 小 路 實 篤 集</p>	<p>新 藤 森 成 吉 集</p>
<p>○神寶○戀○悪魔○積草塵 ○あゝ The affair of Two Watches ○前科者○異端者の悲しみ○人面狸○二人の稚児○玄装三藏 ○ハッサン・カ ンの妖術○桐湯の事件○富美子の足○ちひまな王國○獨探○現はれた戯曲○ 或る少年の怏れ○母を慕ふる記○兄弟○恐怖</p>	<p>小説○藤十郎の戀○船醫の立場○笑ひ○亂世○後賢○仇討三態○恩を返す話 ○三浦右衛門の義理○頭蓋り上人○西南奇聞○ある抗敵書○神の如く弱し○ 死床の願ひ○鳥原心中○晩年○たぢぢな帳○羽衣戯曲○神計以上○茅の屋 根○岩見重太郎○奇蹟○浦の苦屋○玄宗の心持○世評○貞操○戀愛病患者○ 兄の場合○舞臺に立つ妻○ある兄弟○時の氏神○順番○温泉○小景 長篇小説○火華</p>	<p>○三等船客○脱船以後○赤い馬車○騒音地獄○裏切る者○ストライキ中○翻 籠○脅威○十三段の段階○佐吉の父親○手○熱帯○海的女○益人○瓦斯タン ク○エレナの話○ドリスの話○メイの話○目撃者○「ダンプロ」○太陽の黒 點○故郷○鶴鬼○海の輕業○スキヤップ○ムツリ</p>	<p>○歌集○夢の女○深川の眼○あの人達○新歸朝者日記○花瓶○監獄の裏○ 小品集 春のつれづれ 花より雨 夏の日 狐 傳滿院 下谷の家 樂器 日本 庭 藤衣花笠 森 ふうん 物語 舟と車 河のはと 秋の ちまた 蛇つかひ 晩鐘 祭の夜がたり 霧の衣 かもかけ 再會 ひとり 旅 聲 巴里のわかれ 練の葉 其他 河 湖 集 (佛蘭西近世世情詩選) ポオ ドレエル 外 十二人 江戸藝術論 浮世論の講義 外 九篇 大窪 だより</p>	<p>長篇小説 ○或る男 短篇小説 ○小き世界 ○芳子 ○休に聞いて話 ○○の 話 ○友の話 ○へんな原稿 ○ユダの辯解 ○ヨハネ ユダの辯解を聞いて 戯曲 旗原にて ○日本武尊 ○二十八才の郎藏 ○佛陀と孫悟空 ○ある青年の夢 ○父と娘</p>	<p>短篇小説 ○雲雀 ○古匣 二篇 ○娘 ○研究室で ○山 ○子供 ○床 甚 ○風 ○故郷を 去るまで ○東京へ ○雀の來る家 ○鳩を放つ ○路上 ○地主 ○こぼるぎ ○北見 ○ 拍手しない男 ○鈴の感謝 戯曲 ○戀性 ○櫻茂左衛門 ○何が彼女をそうさせたか ○親友 ○夫婦 長篇小説 ○萬先生 ○妹の結婚</p>
<p>四六判並製 八ポイント二段組 六〇 定價 八 送料 十 八 錢</p>	<p>四六判並製 八ポイント二段組 五八 定價 八 送料 十 八 錢</p>	<p>四六判並製 八ポイント二段組 五一 定價 一 二 錢 送料 十 八 錢</p>	<p>四六判並製 八ポイント二段組 五三 定價 一 五 錢 送料 十 八 錢</p>	<p>四六判上製 八ポイント二段組 六〇 定價 一 六 錢 送料 十 八 錢</p>	<p>四六判上製 八ポイント二段組 六八 定價 一 八 錢 送料 十 八 錢</p>





582
84

